

■風俗文獻とSMプレイ情報満載■

# 奇譚クラブ

♥獣愛奇譚・犬と私と夫♥縄妾志願女性との  
誌上デート♥妊婦ハント・膨満の快樂♥奇ク  
サロン・マニア体験レポート♥事件簿・女教  
師強姦事件♥S Mビニ本選びのノウハウ伝授

復刊第3号

5

SMのエキスだけを集大成した  
マニア待望の読者参加情報雑誌



奇譚クラブ

復刊第3号

マニア待望の読者参加SM情報誌

昭和57年5月1日発行(毎月発行)第1巻第3号



雑誌02805-5

定価1000円

(株)きたん社発行



# ビデオ公開 賀山茂の

こんな男に屈辱の姿体をとらされ、苦痛と責めに泣き悶え縄の抱擁の悦びの中で果てる私。  
もう二度とされまい、しまいと思いつつ……

## ■私のビデオ■

# 紫痕

これがSMだ!!

…………… 3人の女が責めの競演 ……………

アマチュア生活30年。ひとりで楽しんだSM  
をここに公開します。その真髄を披露します。

お申し込みは…

東京都港区六本木5-13-3 ニューキャッスル  
麻布405号

サム・ビデオセンター

(定価15000円。ソニー用かビクター用を明記のうえ現  
金書留にて送金下さい。10日以内にお送りします。)

奇譚クラブ5月号 定価1000円 昭和57年5月1日発行 発行所(株)きたん社  
東京都港区六本木3丁目4番5号402 電話03(354)6241番 発行人/森田公治  
編集/風俗資料保存会 東京都中央区銀座1の22の10ストークビル501号

## 奇譚クラブ5月号目次



縄炎折檻……………	(144)
悦楽人形……………	(138)
懐かしの奇ク嬢たち・関谷富佐子……………	(134)
辻村隆氏との交遊記(賀山茂)……………	(132)
読者誌上デート……………	(124)
秘められた密儀①……………	(118)
犬と私と夫①……………	(110)
膨満の快楽②……………	(104)
百恵の太腿②……………	(92)
標的はメス犬③……………	(91)
女教師強姦事件……………	(80)
縄妾志願……………	(66)
生人形地獄③……………	(56)
噛みつく女……………	(52)
SM時評・ビニ本選びのノウ・ハウ……………	(46)
縄の愉悦②……………	(38)
奇クサロン……………	(30)
ナリヒラ会リポート……………	(20)
読者交際欄……………	(11)
読者ポスト……………	(7)
投稿規定……………	(3)



繩  
炎  
折  
檻













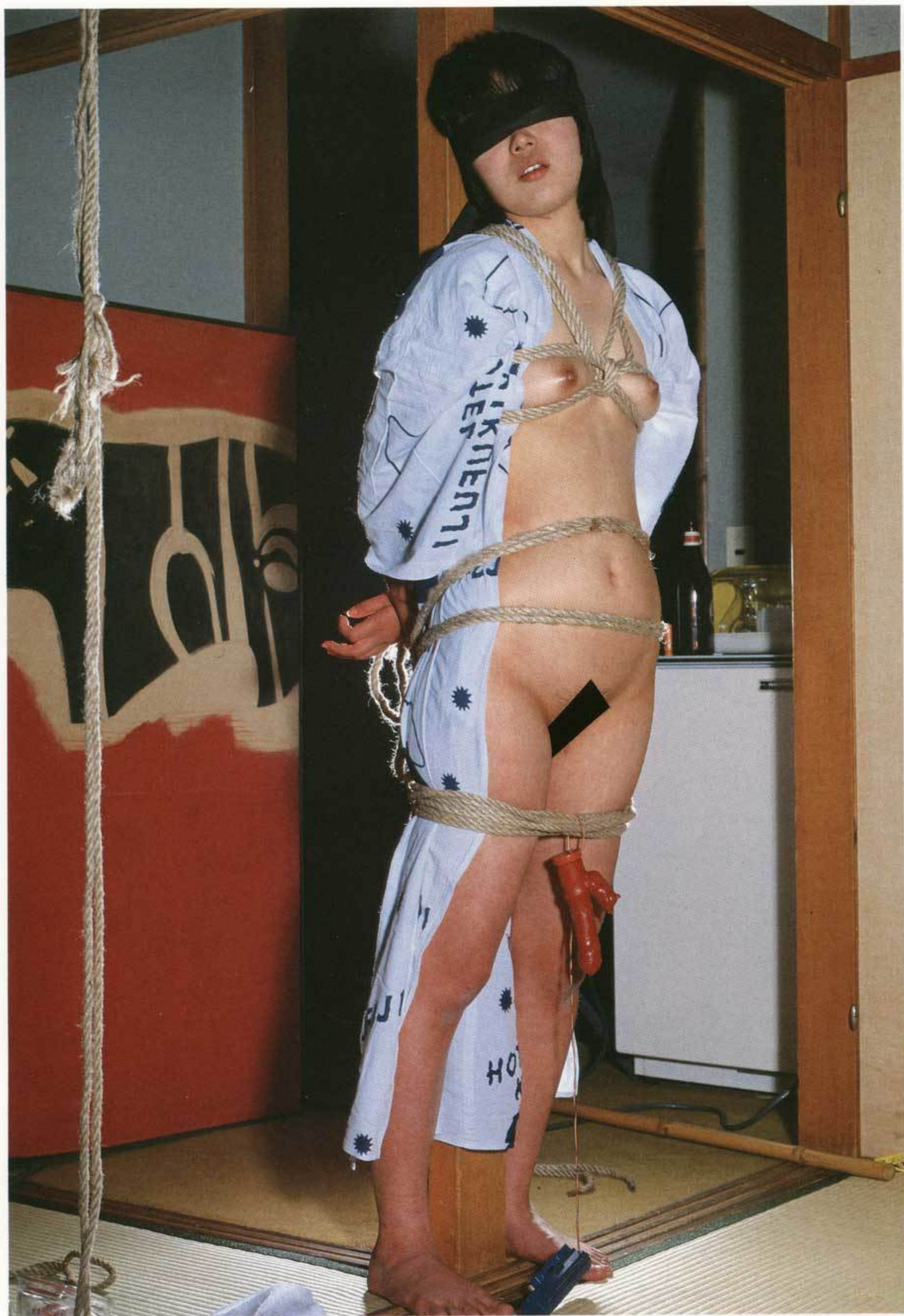




悦楽人形

















# 懐かしの奇ワ嬢たち

## 関谷富佐子





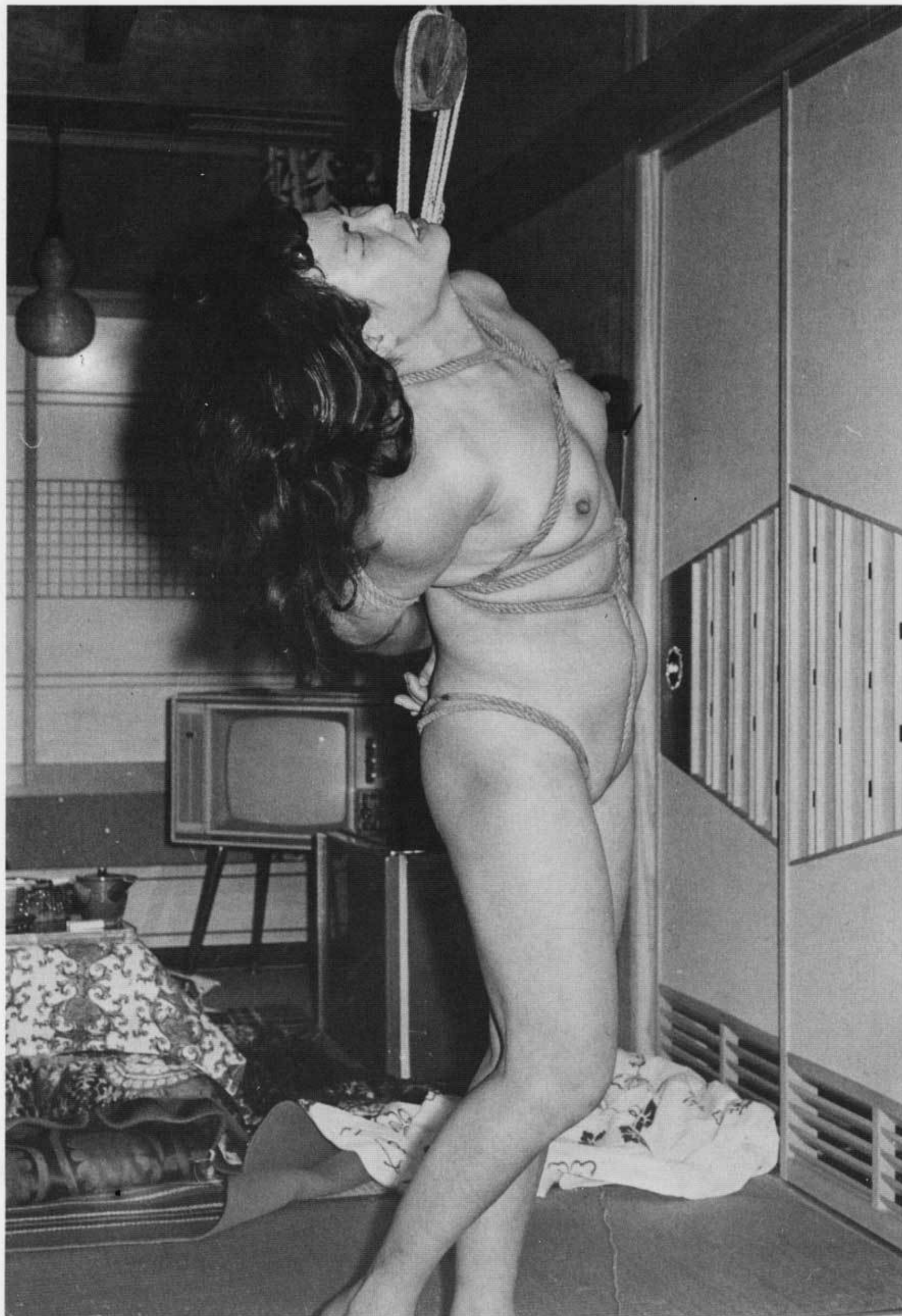


カメラハント  
甘いムチ





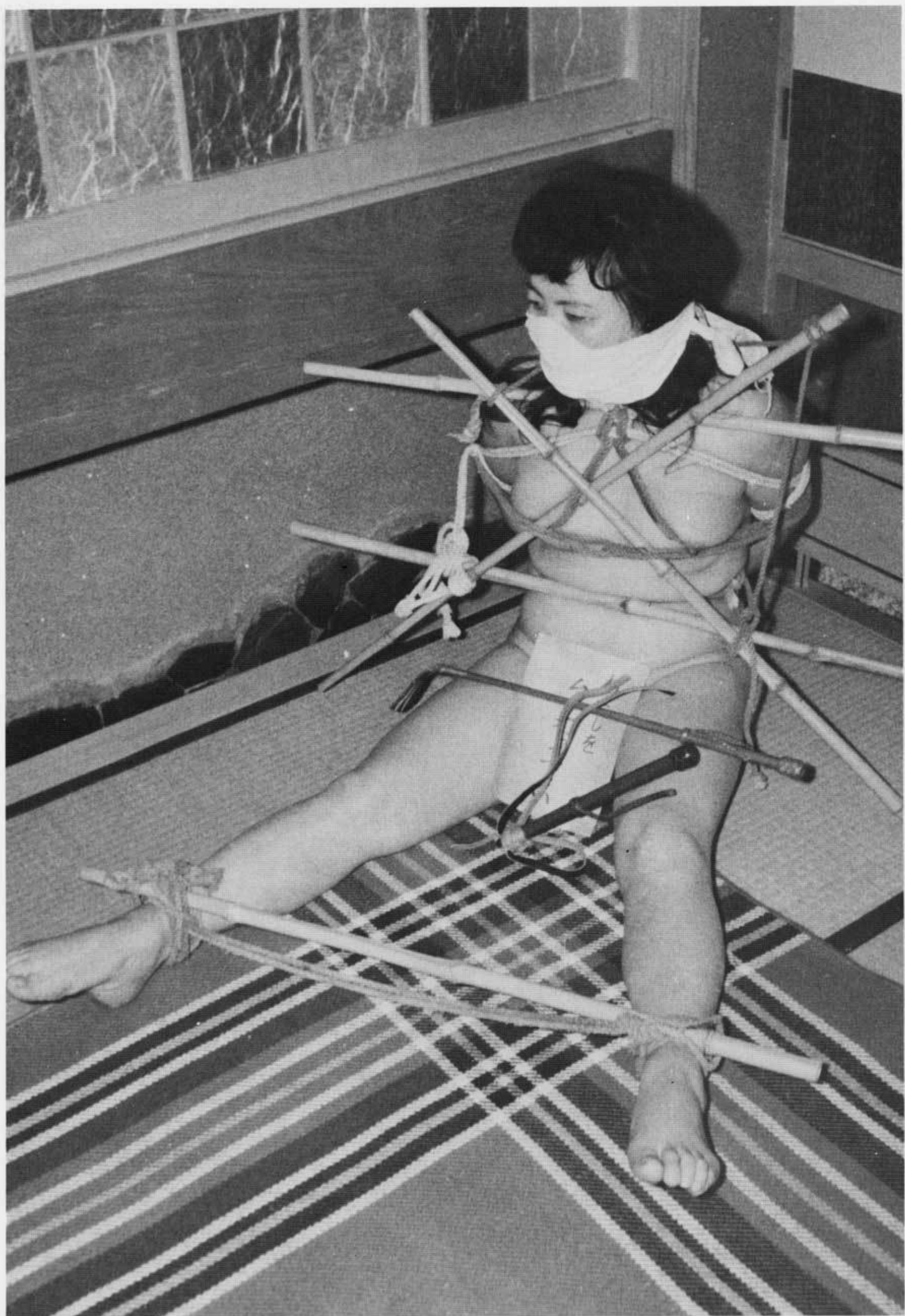




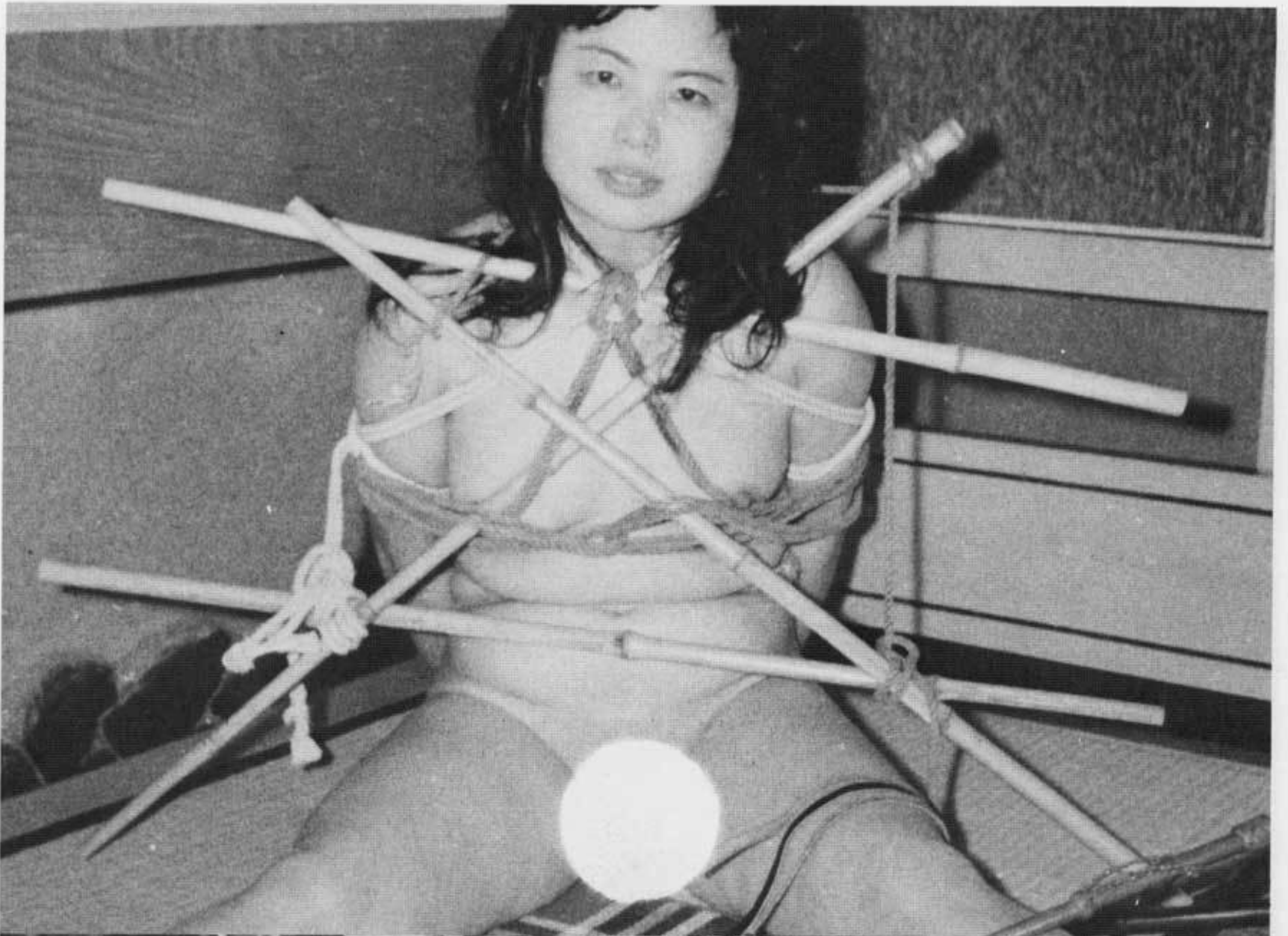
















関谷富佐子

硬肥りの肉体はハードな責めにもよく耐えたが、剃毛して尻を鞭打つと、たちまち達した。かくれたファンを持つ。当時25歳。





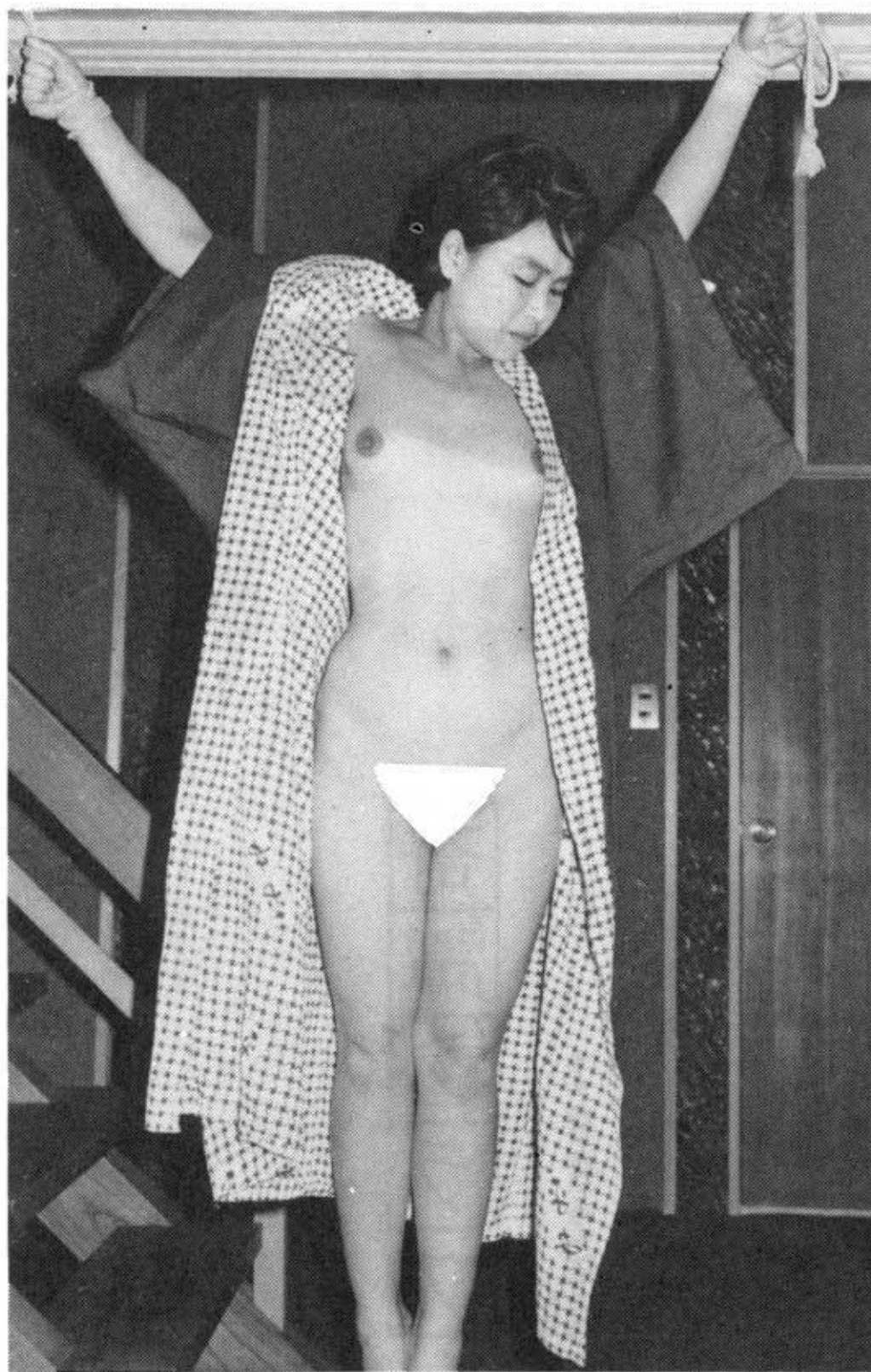
奇譚  
クラブ

1982年5月号



— 繩の魔術師辻村隆氏との交遊記・その3 —

# 倒錯愛の求道者たち 賀山 茂



カメハンのモデル左近麻里子嬢は成熟した匂いが・・・

S M道を極めようと辻村隆氏に弟子入りした筆者は奇クのカメラハント取材に同行させてもらうことになった。

今回のエモノは肉体美の左近麻里子嬢。デラックスな名古屋のラブホテルで楽しい縛り撮影のあと、翌日は、S M夫婦として有名な村上氏を訪問し、その生活の隅々にまで及ぶ徹底ぶりに感嘆させられ、やはり本モノはちがうものだと思改めてS M人生を決意する。



## 待てば海路の……

待ちに待った辻村さんからの便りが届きました。封を切るとパラッと数葉の写真がとび出してきます。それは過日

大阪で撮った梨花悠紀子のものでした。あの日の光景がナマナしく脳裡をよぎり、もう一度彼女とプレイしてみた。いものだと嘆息するのです。辻村さんのお便りの骨子は、週末行われるカメラハントの件でした。四月四日十一時、名古屋構内の喫茶店で待っていると書かれてあり、私が行くのを既定の事実のように断じているのです。

辻村さんに電話連絡しますと、例のダミ声で、  
「手紙はつききましたか？ 左近さんは美人じゃないが、色っぽい女ですよ、名古屋でお会いしましょう」



かくて私は、再び週末S Mの旅にでることとなったのです。

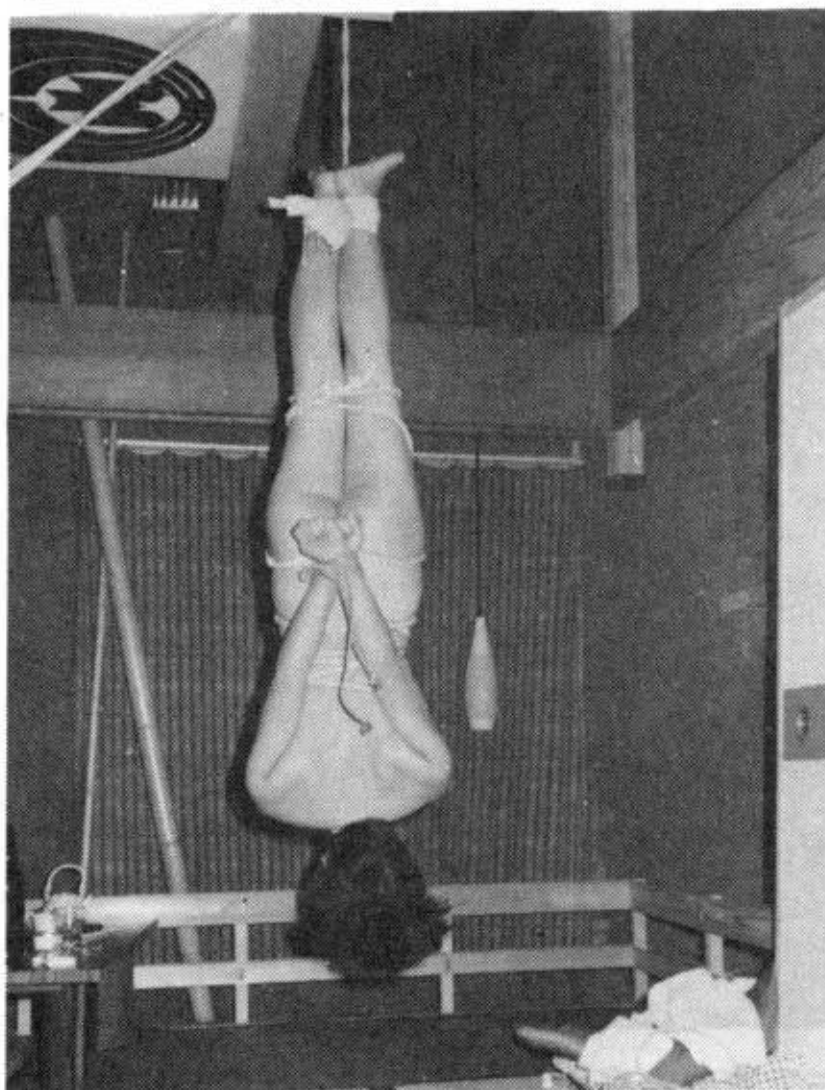
「明日の日曜日は、何か予定がありますか？」  
名古屋で会うなり、開口一番辻村さんはそんなことを聞いてきたのです。

左近嬢の苦痛に歪む顔には悲壮感が漂って嗜虐心をうずかせる





若妻が仕置を受ける観念の図(上)アッという声とともに女体が宙に浮き逆吊りが完成



辻村さんは次の日、SM夫婦として名高い村上夫妻を訪問されるとのことでした。ご主人は大手の建設会社に勤めるまだ、結婚して二年ぐらいの若夫婦なのに、一生懸命SM生活を研究工夫していて、必ずや一見の価値があると言われます。その夜は奈良の辻村邸にごやっかいになり、翌日氏のお伴をすることになりました。

辻村さんと知り合いになってから、急激にいろんな方と面識ができ、ひとりぼっちでの暗中模索の時代とはちがいSM人生に厚味が加わってきた、この道への情熱はいよいよ高まってきたのです。

辻村さんと私の関係は、先生と弟子、先輩、後輩のいずれともすこしちがった複雑微妙なものでしたが、とにかく辻村さんにお会いできたことは、私のSM人生をバラ色にする決定的な要因だったでしょう。

左近麻里子嬢は中日会館の前で待っていました。彼女を乗せた車はひそやかに、和風造りの「ホテル徳川」の前に止りました。部屋に入ると中には階段があり、二階建てなのです。余りの豪華さに啞然としたものです。

「左近さん、この方が東京から見えた賀山さんです。今日



はお手伝いに来ていただいたのですよ。さあ、ひと風呂浴びて下さい」

彼女は無言で立ちあがると、浴室に消えました。

やがてさっぱりした感じで風呂から出てきた左近さんからは成熟した女の色気が滲み出て、早く裸に剥いてみたい欲求でいっぱいでした。

辻村さんは私の気持ちをいち早く察し、さあ、どこから縛ろうかと、部屋の中を見回し、バックから愛用のロープを取出しました。まず左近さんを万才のポーズにし、縛りのエピソードに入りました。

ユカタの前が開いているので、若妻が悪さをしてオシオ



辻村さんは遠慮なく村上夫人の体を押し曲げ後手にして鮮やかに縄がけをはじめた。

キを受ける「観念の図」と見受けられます。続く縛りは何の変哲もない感じで、いささか拍子抜けでしたが、二〇カッとも撮り終えた頃から、辻村さんの顔に赤味がさし、眼に険しさが出てきました。

辻村さんは憑かれたように、部屋の小道具を巧みに利用して、左近さんをビシビシ縛りはじめました。その縄は先刻とはダンチの差で生き生きしており、左近さんも押えた悲鳴をあげはじめたのです。

一息ついた辻村さんは私をふり返り、

「賀山さん、逆吊りをしますから、手伝って下さい」

眼がらんと輝き、心からSMに没頭している男の顔





というのか、一点の妥協もないきびしさです。二人でテーブルを積み重ねて三重の塔を作りました。

「さあ、この上に左近さんを乗せ上げましょう。左近さんいらっしやい」

左近さんは恐そうにテーブルに昇ります。彼女を後ろから抱きかかえるようにして、上段のテーブルに腰かけさせました。

辻村さんは無造作に両脚を持ち上げ、足縄をかけ、その尖端を持って二階に姿を消したのです。やがて二階の手すりから辻村さんの顔がのぞきました。

「左近さんを寝かして下さい」

後手の彼女を不自由な姿勢に倒しますと、彼女は従順に眼をつぶって往生しています。辻村さんに足縄の縄尻を二階の手すりにがっちり縛りつけ、

「テーブルを取り去ると出来上りです。賀山さん、左近さんを抱きかかえて、早くテーブルをとって下さい」

私が辻村さんの命令通り、テーブルを取りのぞきますと「アッ」という声とともに左近さんの体が宙に浮き、逆吊りが完成しました。

左近さんは始めての吊り責めを懸命にこらえていましたが、苦痛に歪む顔には悲壮感が漂います。あわててカメラのシャッターを数回切りました。

プレイを終えて帰りぎわ、辻村さんが、

上半身裸にされた夫人は覚悟をきめてじっとされるままに



「賀山さん、この次は二人でプレイされたら如何ですか」と言ってお下されたので、私は早速左近嬢の電話番号をメモしました。辻村さんの気くばりは相当なものです。

「近日中にぜひまたお会いしましょう」

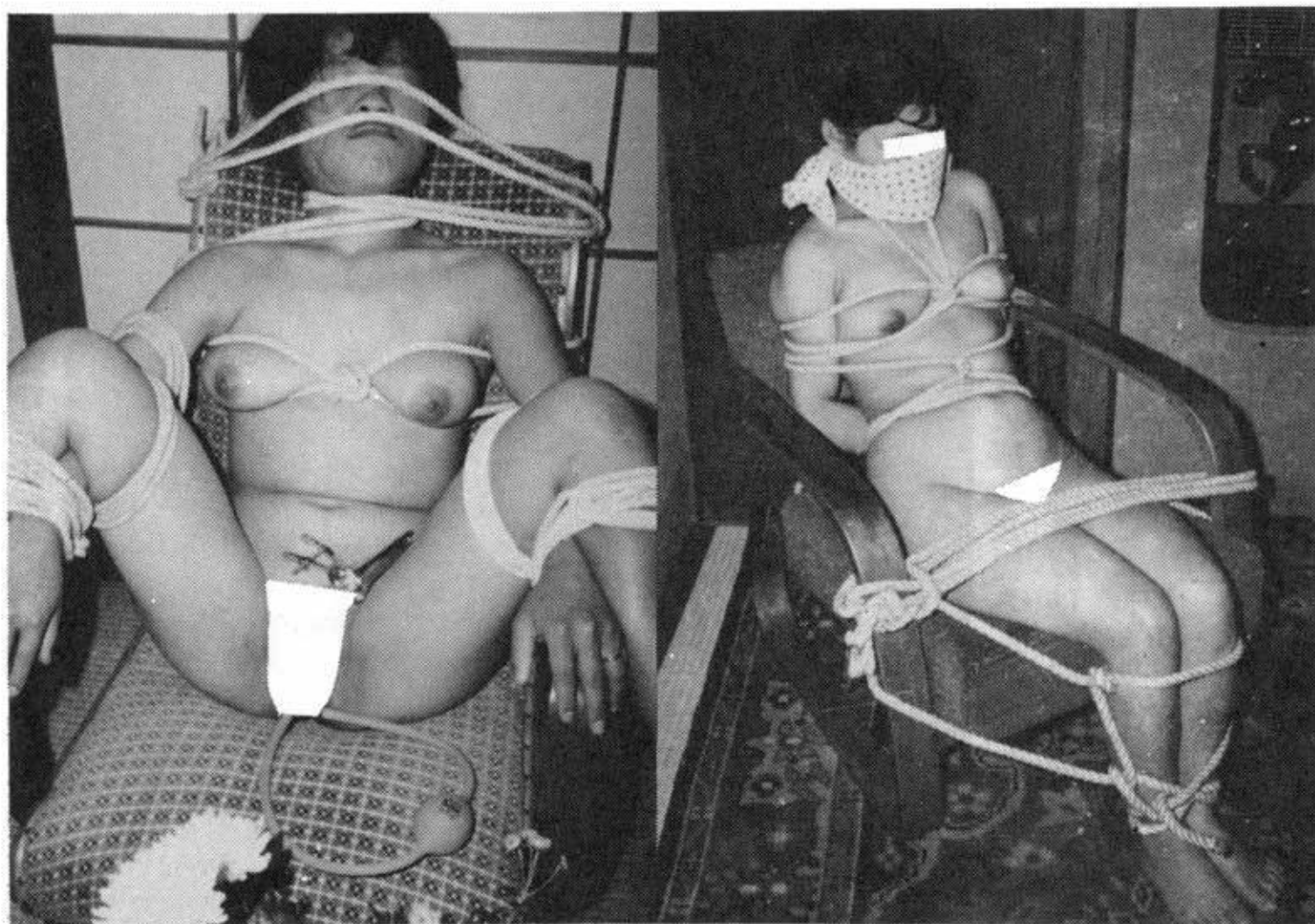
彼女と固い握手を交したのです。

奈良の辻村邸に着くと、早速ウイスキーをご馳走になりましたが、辻村さんがとても面白いものを見せてくれたのです。

テレビ画面に映ったのはマニアのビデオテープでした。

当時はこの機械を持っている人はきわめて稀れだったので





辻村さんは村上夫人を荷物みたいにあられもない格好で椅子にくくりつけた。

す。8ミリとはちがつて登場人物の肉声が聞かれるのですからこたえられません。和歌山のファンである田村先生という方が寄贈されたのだそうです。

## SM夫婦の凄味

村上ご夫妻のお宅は、大阪・高槻の市営住宅の中にあり玄関に出迎えた物静かな奥さんに座敷に通されますと、ご主人と早速SM談義が始まりました。村上さんは想像とちがって朴とつな田舎紳士風の方です。

しかしSMの話になると、とたんに人柄が変わったように情熱な話しぶりになってきます。

「東京からわざわざやってこられた賀山さんにアルバムを見せていただけませんか」

辻村さんの要請で、村上さんは部厚いアルバムを数冊持つてこられ、私の前にドサツと置かれました。

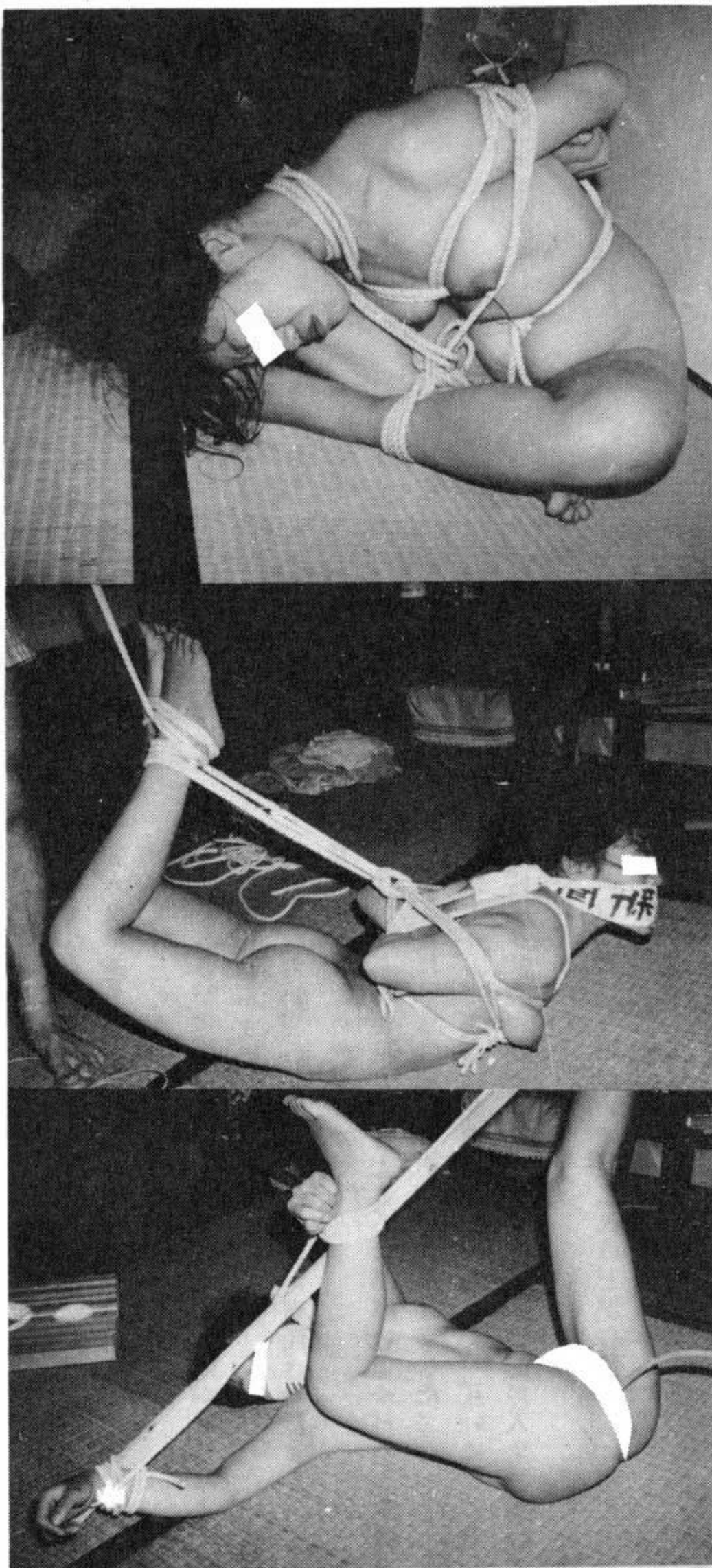
村上さんご夫妻は鼻責めが好みらしく、互いにSになりMになり、凝った道具立てとコンテの設定が入念で感心させられました。

「私の知る限りにおいて、これほど熱心にSMに精を出している人はいません。珍しい方です」

辻村さんが言われますと、村上さんは、自分は酒も飲まないし、他にこれといった道楽もありません。SM一筋で



逆エビに縛られ極限まで折り曲げられた夫人は浣腸を受けさせるためこんどは開股にして縛り直し、まずクスコを使う。



す、と宣言され、隣りに座った奥さんを指して、

「これにも、一緒になる時、自分は一生この趣味を続けるつもりだが異存はないか、と念を押しました」

静かに話を聞いている奥さんに、

「ナオミ、そうだったな」

声をかけられた奥さんは消え入るような小さな声で、ハ

イそうです、と答えるのです。

「辻村さん、家内の奴を責めてやって下さい。楽しみにして待っていたのです」

「そうですか、ではやらせていただきます」

辻村さんは上衣を脱ぎ、大張り切りで奥さんに挑みかかっていきました。



職業的なモデルではありません。辻村さんは遠慮なく奥さんのブラウスを剥ぎ、足でふんづけるようにして体を前に押し曲げ、後手にして鮮やかに縄がけを始めました。

「辻村さん、今日は浣腸をしてやって下さい。そのつもりできのうからトイレを封じてあります」

「分かりました。私もそう思って医療用のカンチョウセツトを用意してきました。洗面器いっぱい位入れて、腸を洗ってあげましょう」

上半身を裸にされたナオミさんは、覚悟を決めて、じつとされるがままになっています。辻村さんは他人の奥さんであることを忘れたのか、自由自在にいたぶりつづけます。

まずナオミさんを椅子に縛りつけてご満悦でした。

やがて責めの舞台が変わり、だんだんハードになってきて苦痛に耐えるナオミさんの呻き声が生々しく私の耳に響いてきます。

自家製の手枷、足枷をはめられて棒でつつかれる姿は、罪人そのもので、あの小さな体でよく我まんでできると思うほどでした。

よほどご主人の調教が立派だったのでしよう。

辻村さんもこのようなプレイは久しぶりと見えて、乗りまくっている感じで、私のいるのも忘れ、きょうの犠牲の料理に専念している様子でした。

## SMの醍醐味を満喫する

辻村さんは猫が鼠をいたぶるように、ナオミさんを好き勝手に責めまくっていましたが、そのうち、ナオミさんを荷物みたいに、あられもない格好で椅子にくくりつけ、しばらくこのままいなさいと宣言して、ひと息つくこととなりました。

それを見たご主人は、映画女優のフォートを奥さんの顔の上に置き、どうです、夢があるでしょう、といいながら、奥さんの尻をポンとたたくのです。

村上さんは、先生、となりの部屋にゴザを敷きました、こんどはとなりで本格的に責めましょう、私も参加します。ナオミはハードにやらないと燃えないのです、苦しいことに耐えているうちに、SMの醍醐味を理解するのですから、氣ばってやりましょうよ、と言って奥さんを椅子ごとかかえ、次の部屋に連れていきました。

辻村さんも、ついにネクタイ、ワイシャツを取り去り、下着一枚の身軽ないでたちで、隣室に入りました。私が続いて入室しますと、村上さんもパンツ一枚になって、こんどは彼女を逆エビのスタイルで縛り上げました。

これ以上曲げることは不可能——という点まで折り曲げられて、奥さんはフウフウ言っています。想像以上に苛酷



に曲げられ、流石に苦しそうな奥さんは、からだ全体で呼吸しています。うるさいので、手拭いで猿ぐつわをしてしまいました。

辻村さんはボストンバッグから、医療用の開口器（クスコ）と浣腸器（エネマ）を取り出し、村上さんは洗面器に石けん液をとかし入れて、それぞれ準備万端ととのえて、ついに浣腸シーンが始まりました。

浣腸しやすいように、ナオミさんは開股にされて縛り直されました。村上さんは、

「私は穴という穴を責めるのが趣味です」

と言って、まずクスコを奥さんの秘めたる個所に挿入しました。ひと押しするたびに、

「アー、アー」

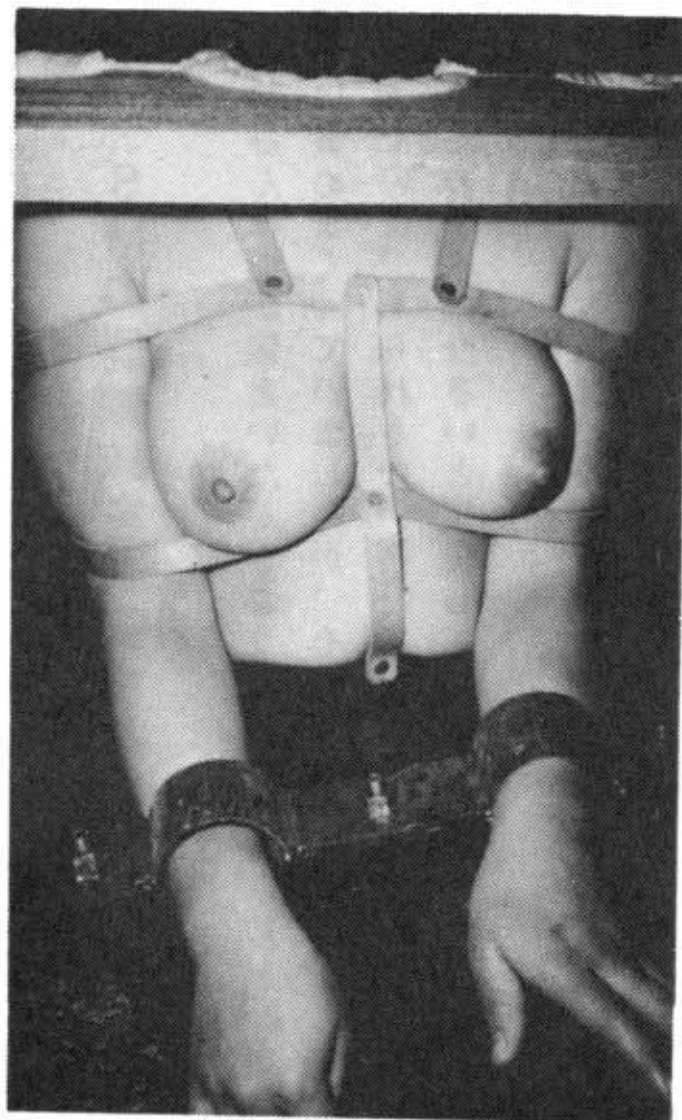
と呻き声が發せられ、異物の侵入に抵抗している様子が窺えます。だがやがて、ネジをしめられると、パツクリと口を開き、内部の全貌を私たちの眼に晒したのです。

一方辻村さんは、エネマの一方を洗面器の中に漬け、もう一方をナオミさんの肛門にあてがい、ぐっと力を入れて進入させました。意外に抵抗なく侵入したようです。いよいよ石けん液を注入するのですが、ナオミさんはもうすっかり覚悟を決め、その瞬間の到来を待っている風情です。

辻村さんの手が動いた時に、ナオミさんの顔が歪み、着実に石けん液が体内に入っていくのです。注射器とちがい



村上家製の手枷足枷をはめられる夫人はまるで罪人のよう





圧力で注入する訳ですから、洗面器の中みが短時間で、菊の花へと吸いこまれていきます。

石けん液はみるみるなくなっていく、それと反比例してナオミさんのお腹がはってきました。彼女の苦しそうな表情を見て辻村さんは、ポンプでの注入をやめ、菊の花にエネマをつき刺したまま、じっと見守っています。

やがて奥さんの顔が土気色になってきました。あわてて解放しますと、倒れ込むようにトイレにかけこんでいきました。

モデルさんとのプレイとは大ちがいです。本モノはやはり迫力があります。私はこのご夫婦を心からうらやましく



夫人の顔の上に女優の写真を置く村上氏

思いながら、かたずを呑んで見守っていたのです。

応接間に戻った辻村さんは、

「たいしたご夫婦でしょう。この二人の生活の中には常にSMがあるのです。これから仲良く延長戦が行われるのですよ。われわれはもう退散しましょう」

村上さんと、恥ずかしそうな顔をして出てこられた奥さんに見送られて、私たちは夕ぐれの街を大阪へと向いました。酒に酔ったようにボーッとしている私に、辻村さんは、

「賀山さん、ご感想は如何です」

「すさまじいですね」

ただひとこと申し上げただけでした。

「賀山さんは本当にSMが好きですね。それに行動力もある。どうですか、これから私に協力していただけませんか」と重ねて辻村さんに依頼されました。東京方面にも辻村さんのハントへの希望者がたくさんいるが、なかなか手が回らないので、私に面接係をつとめろというのです。写真とそのプレイ相手のコメントを送ってあげると、辻村さんはとても助かるというのです。

私に異存がある訳がありません。これから自由にパートナーを得ることができるようのです。

「辻村さん、一生懸命やってみます。でも辻村さんも、是非一度東京へ来て下さい。お待ちしております」

これから展げてくるSM人生を思うと、興奮を抑え切れない私でした。



# 『縄妾志願』の るみ子(4月号・NO7)が 読者とSMデート!



本誌4月号の「縄妾志願」に登場した「るみ子」さんが、読者の一人であるK県在住のYさんとSMプレイを交えたデートをするようになりました。

本誌ではさっそくお二人の了解を得て、SMプレイの様子などを取材させてもらい、誌上公開することになりました。

他の女性のSMデートも取材を了解してくれていますので、次号に掲載を予定しています。

4月号に掲載された「るみ子」さんの写真は水着姿で、全身が写っていたせいか、大変な数のお手紙が届いたそうです。細身の体なのに、見るからにポイン、そんなところに人気があった



二人ともコチコチの初対面だったが……



のかもしれませんが。

「るみ子」さんのメッセージは次のようなものでした。

「どなたか私を思いっきり飲ばせてくださる方、いらっしやいませんか？首を長くしてお待ちしております。私のサイズはS一五八センチ・B八十三センチ・W五十八センチ・H八十五センチ・T四十五キロ、お気に召しまして？（No・7 るみ子・28才）

このメッセージに全国から殺倒した

読者からのお手紙の数は、なんと五十三通（るみ子さんの話）もあったとのこと、とても全部にご返事をさしあげられないので、誌上を借りてお詫びしたいとのことでした。

一方、Yさんは某商事会社にお勤めの二十七才のサラリーマン、とのこと、拝見したところ、マジメ一筋の男性に思えるのだが、SMに興味を持つてから3年になるそうである。

プレイに入る前に、どんなところが

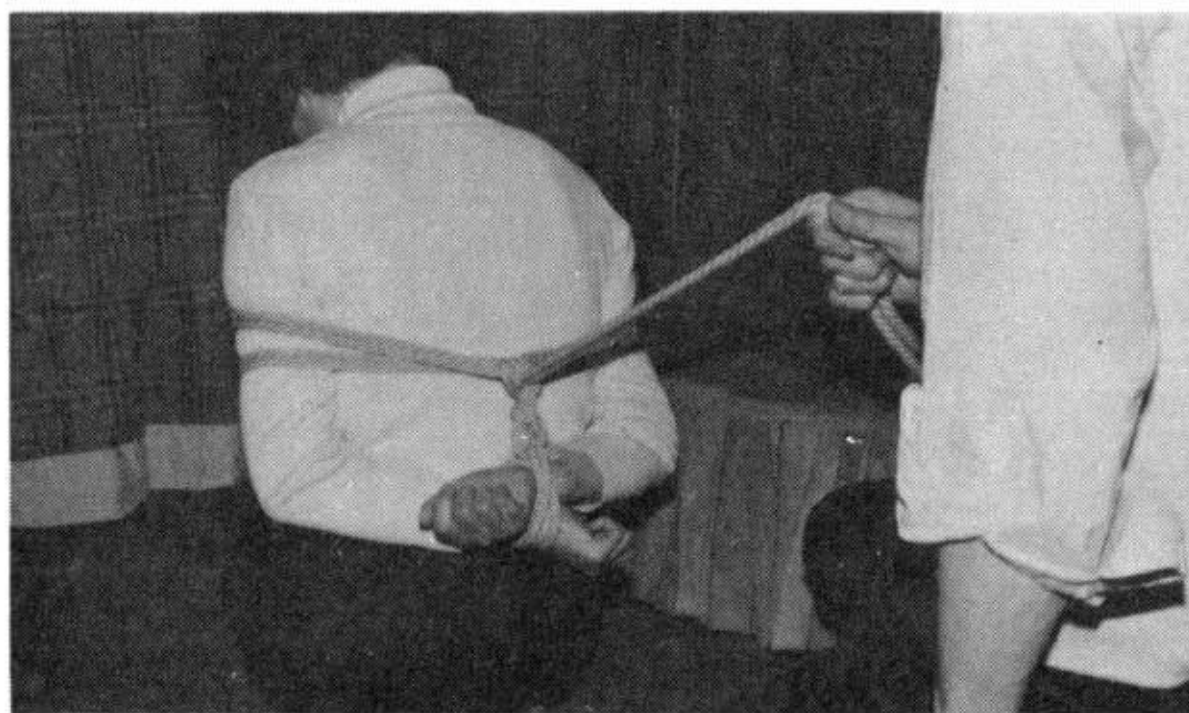
気に入って選び、選ばれたのかなどを訊ねてみた。

——るみ子さんのどこが気に入ったのですか？

Yさん「やっぱりスリムなところ、それに写真でみると、すごいボー



「ハイ、両手を後ろへ回して……」



「ウン、われながらうまく縛れた」

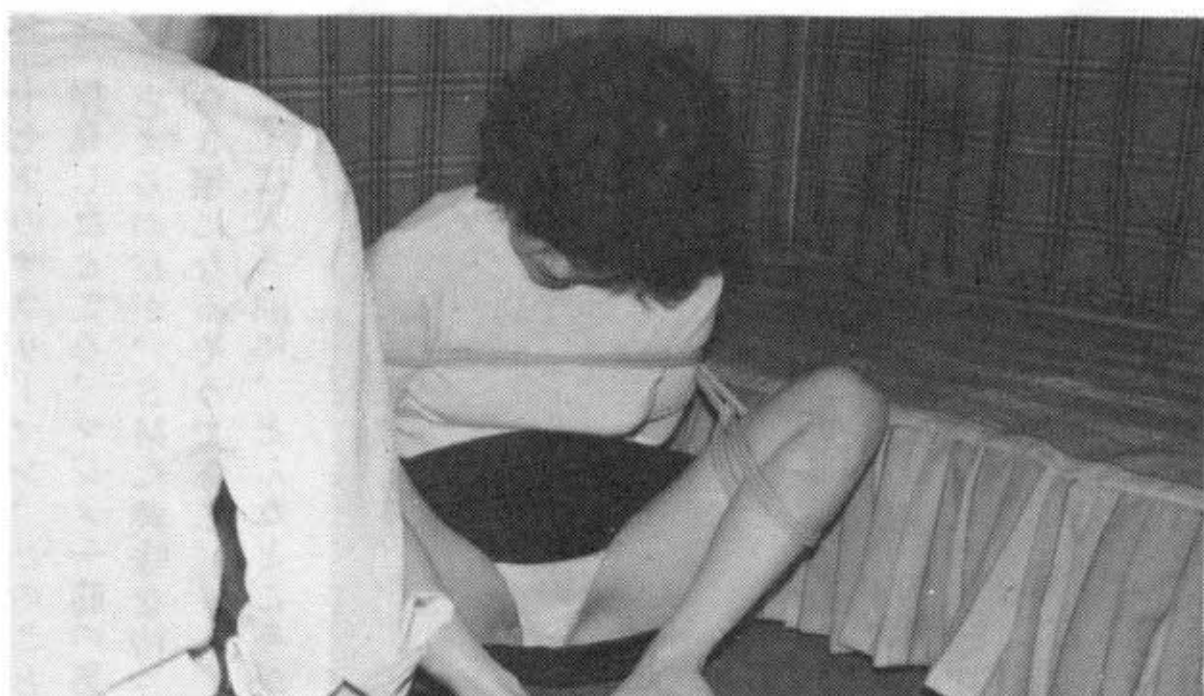


ンなんで……、ボクはそういうのにヨワイんです」  
 ———  
 るみ子さんから返事がくると思  
 っていましたか？  
 Yさん「いやア……、多分ダメだろう  
 と思ってました。ボクは字もへ



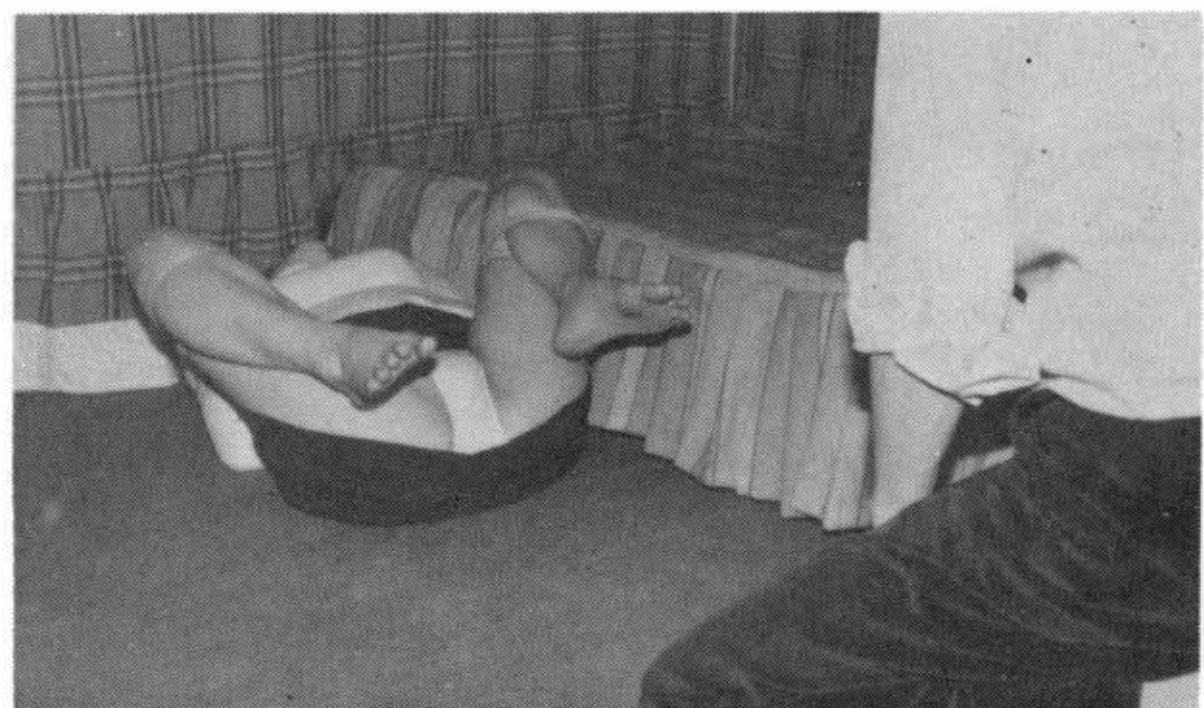
「SMプレイって、こんなにきつく縛るの？」

ただし、文章もヘタなんで。学  
 生時代にラブレターもずいぶん  
 書いたけど、返事をもらったこ  
 とは一度もありませんからね。  
 だから、るみ子さんに返事をも  
 らったときには嬉しいよりも、



「こんなに開いて……、恥ずかしい！」

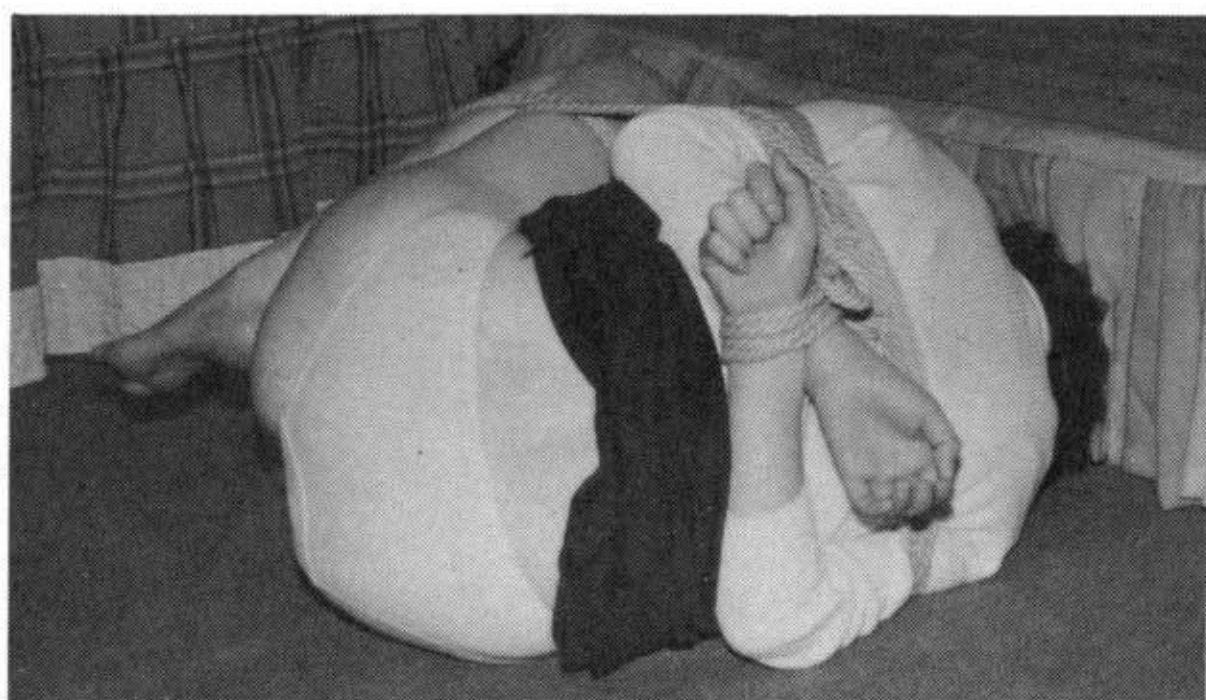
まずビックリしました」  
 ———  
 るみ子さんは、Yさんのどんな  
 ところがよかったんですか？  
 るみ子「卒直なところ、かしら。クド  
 クド書かずに、ボクはボインの  
 女性を見ると興奮します。だ



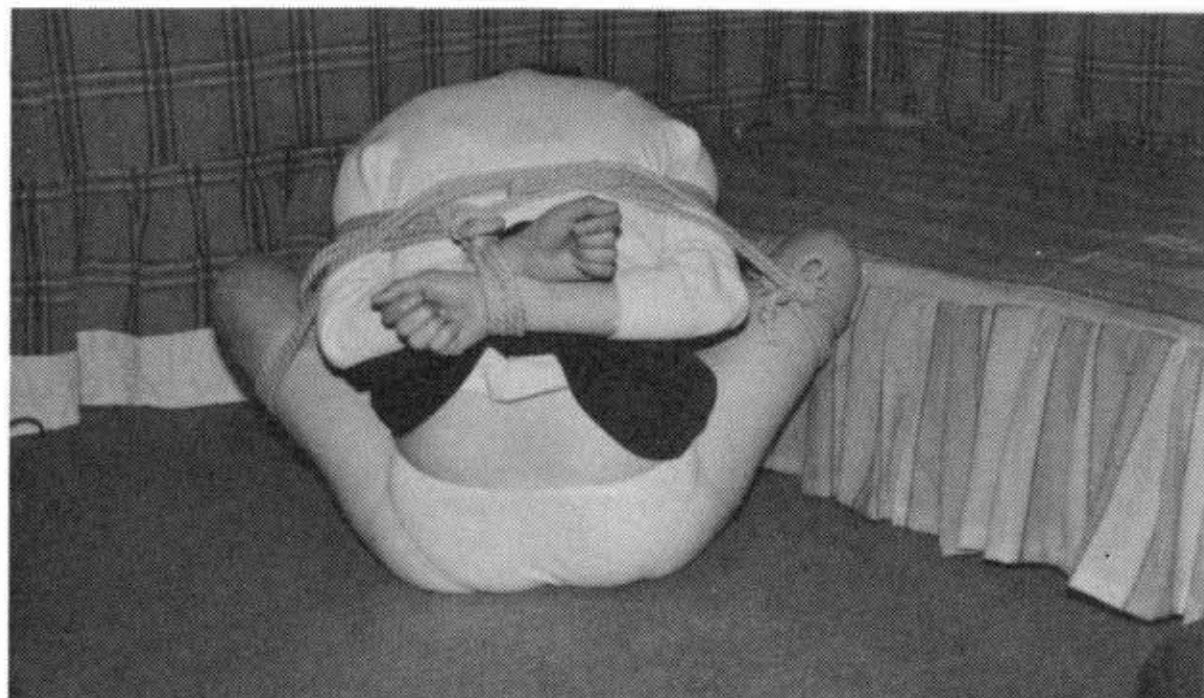
「キャーッ、転ばすなんてズルイ！」



「ウンシヨ……、アレ、起きあがれないわ」



「アアーン、ねエ、起こしてエ！」



「なんだか、すごく恥ずかしい格恰……」

んて書いてあって、ウッフ。字がヘタだなんて仰言ってるけど崩してないし、とっても読みやすかったわ。字を見て、ア、この人は男らしい人だわ、と思ったの。どうしてだか、よくわか

んないけど……」

どんな返事を出したんです？

るみ子「ワタシ、SMプレイとかいう

の、よく知らないんです。縛られるのだってことはわかっていたけど……。で、乱暴なことし

ないって約束してくれるなら、  
と手紙に書いたんです。だって  
恐いんですもの、なんだか」

というわけで、Yさんが上京し、Sデートとなったのであるが、初対面



の二人はコチコチ。それでも、いざプレイが始ってしまふと、気に入った者同志ということもあってか、緊張のうちにも和やかなムードが漂い始めた。

「坐って……、両手を後ろへ……」

Yさんの命令に、るみ子はおとなし

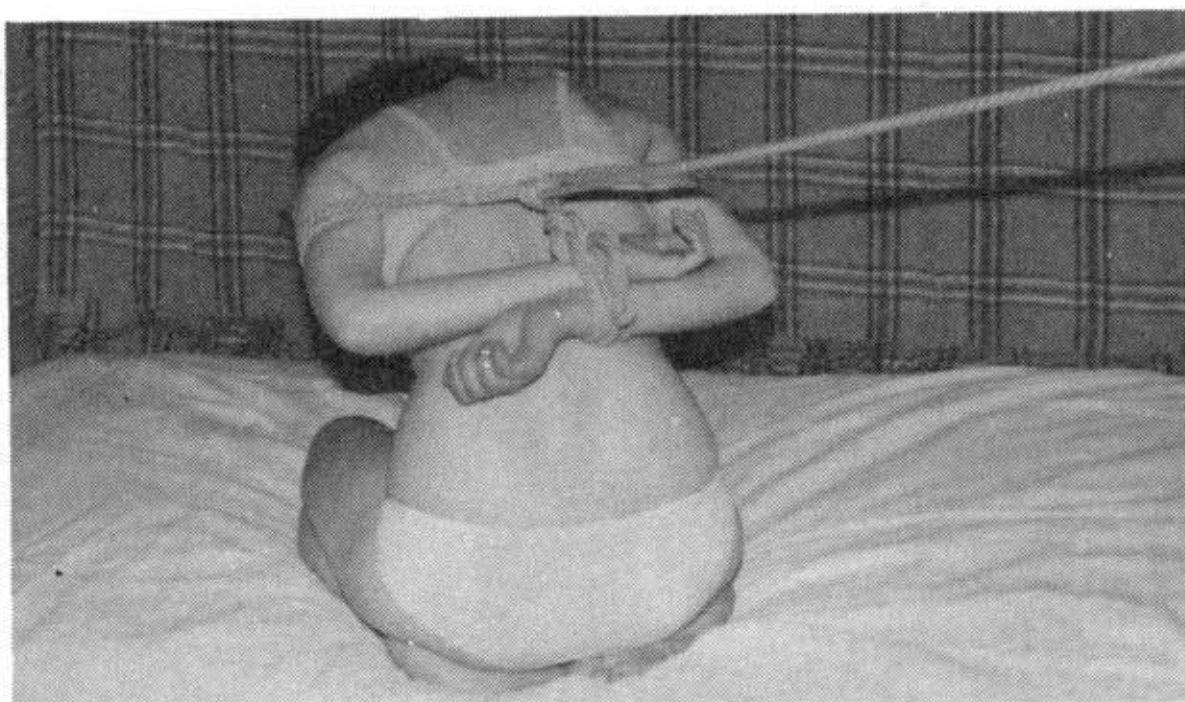


「もう一度、後手縛りにして……」

く両手を後ろへ回す。

Yさんの手つきはなかなか堂に入ったものである。女を縛るのは始めて、ということだが、とてもそうは見えない。

後手縛りから乳房の上下にロープを



「ウン、上出来だ。いいヒップだぞ！」

回して、グッと絞る。

「アッ」

るみ子が小さな悲鳴をあげて、ちょっと顔をしかめる。

「オツと、きつ過ぎたかな……」

Yさんは詫びるように声をかけたが

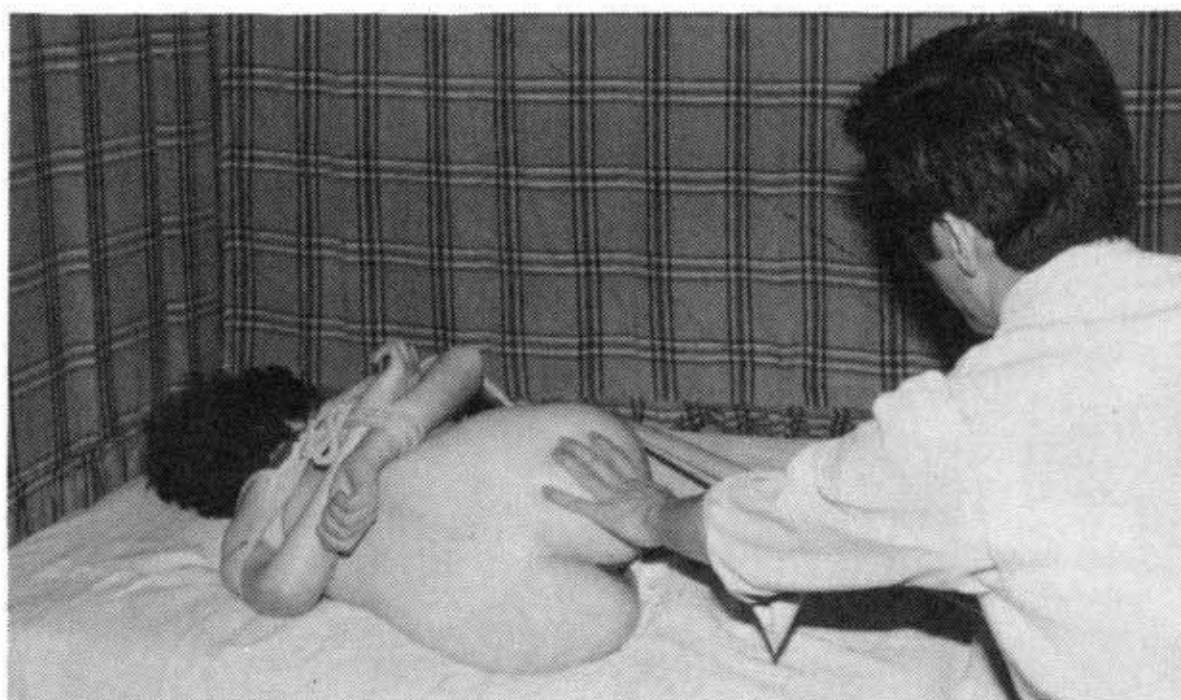


「もう、たまらん、脱がしちゃエ！」「ヒーッ」



「逃げようたって、そうはしません!」

ロープをゆるめようとはしない。おとなしそうなYさんだが、やっぱりサドっけはかなり強いのだろう。  
着衣の上からの縛りなので、るみ子にしても、痛いというより始めて縛られたことにたじろいだのかもしれない。



「柔らかいなァ、プリプリしてる!」「アーツ」

「SMプレイってこんなに強く縛るんですの?」  
「こんなものじゃないですよ、股間縛りなんてのもあるし……」  
「コカン縛り?」  
「ええ、あとでやってあげます」



「さァ、いろいろ股間縛りだ」

Yさん、だんだん調子づいてきたようだ。  
「ここをこうして……」  
などといいながら、るみ子の両膝を立てさせて縛る。開脚縛りだ。  
「アアツ、もうこれ以上は開かないわ」



「じゃ、こう押せば……」  
Yさんにトンと押されて、重心を失ったみ子は簡単にひっくり返ってしまった。パンストをはいてないみ子の股間にベージュ色のパンティがはりついてた。



「アッ、アッ、食いこんでくるウ！」

「きゃーッ、ひどいわよーッ、起きられないわッ、ねエ、起こしてエ！」  
仰向けにされた亀のようにるみ子はジタバタするが、自分では起き上がることはできない。Yさんの熱い視線がるみ子の、晒けだされたパンティの中心



「そらそら、ッ…としてないともっと食いこむぞ」

を照射する。もがけばもがくほど、スカートはめくれ、太ももやパンティに包まれたヒップが露出してしまふ。  
「両手が使えないとなると、自分じやなにもできないのね」  
やっと引き起されたるみ子が赤い顔



「さア、これで完成だ」



をして恥ずかしそうにいう。スカートの中味をすっかり覗かれてしまったのを知ったからだろう。

「脱いでくれますか？」

さりげなく声をかけるYさんに、るみ子はいっそう顔を赤くして、つと背

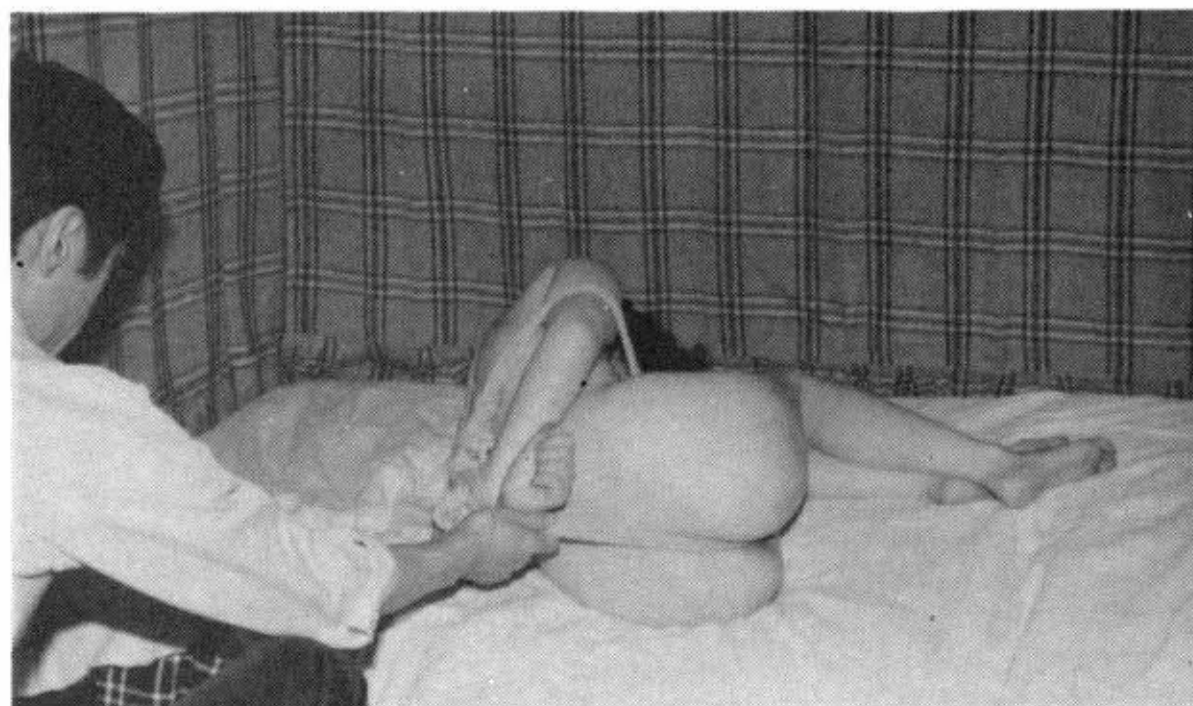
「アーッ、動くところすれて……」



を向けた。いよいよヌードに、と思いきや、ブラジャーとパンティはまだ脱いでくれない。

そのまま、また後手縛り。下着姿だが、やはり着衣の上からよりもグツと色っぽいムードが漂ってくる。

「どうしよう、はさまっちゃったわ」



後手縛りにされたるみ子は、急に恥ずかしさがこみあげてきたのか、ベッドの上へ逃げだした。

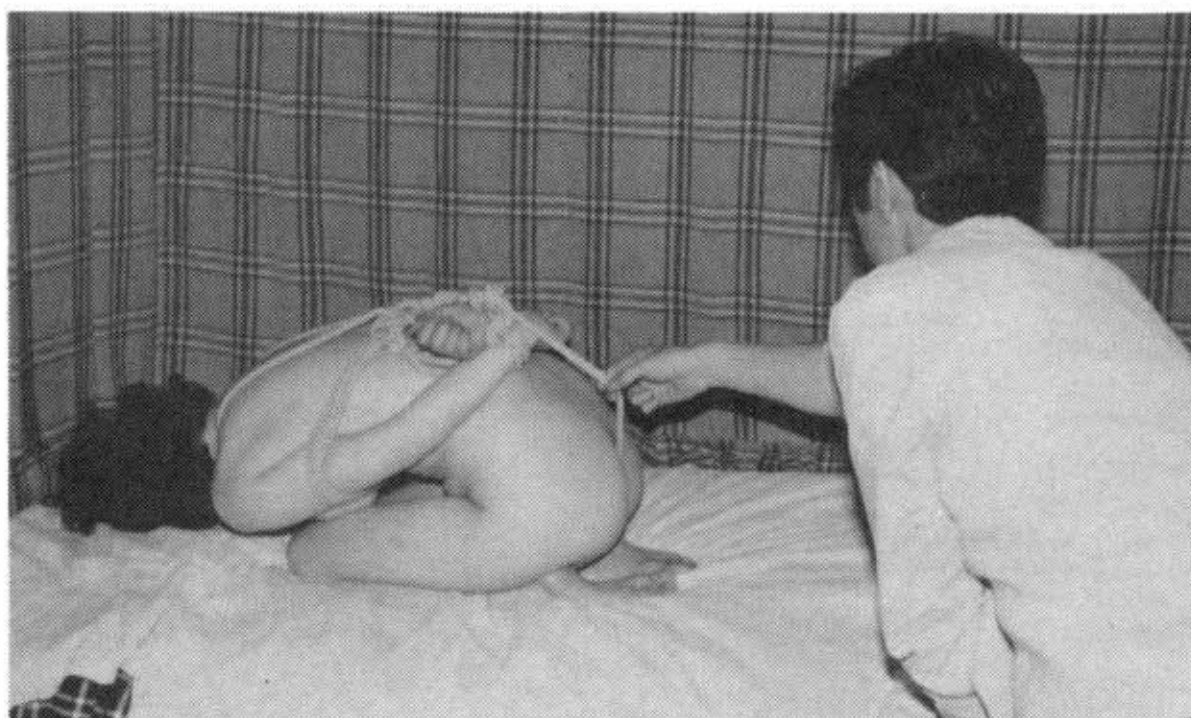
「待て、待て。逃げようたってそうはさせないよ」

Yさんも今はすっかりSM小説の主

「ヒーッ、そこ引っぱっちゃダメエ……！」



人公気取りだ。縄尻をつかんで、るみ子が逃げられないようにすると、  
「さアて、そのパンティを脱がしちゃおうかな」  
などと、るみ子を脅かしている。  
「イヤ―ッ」



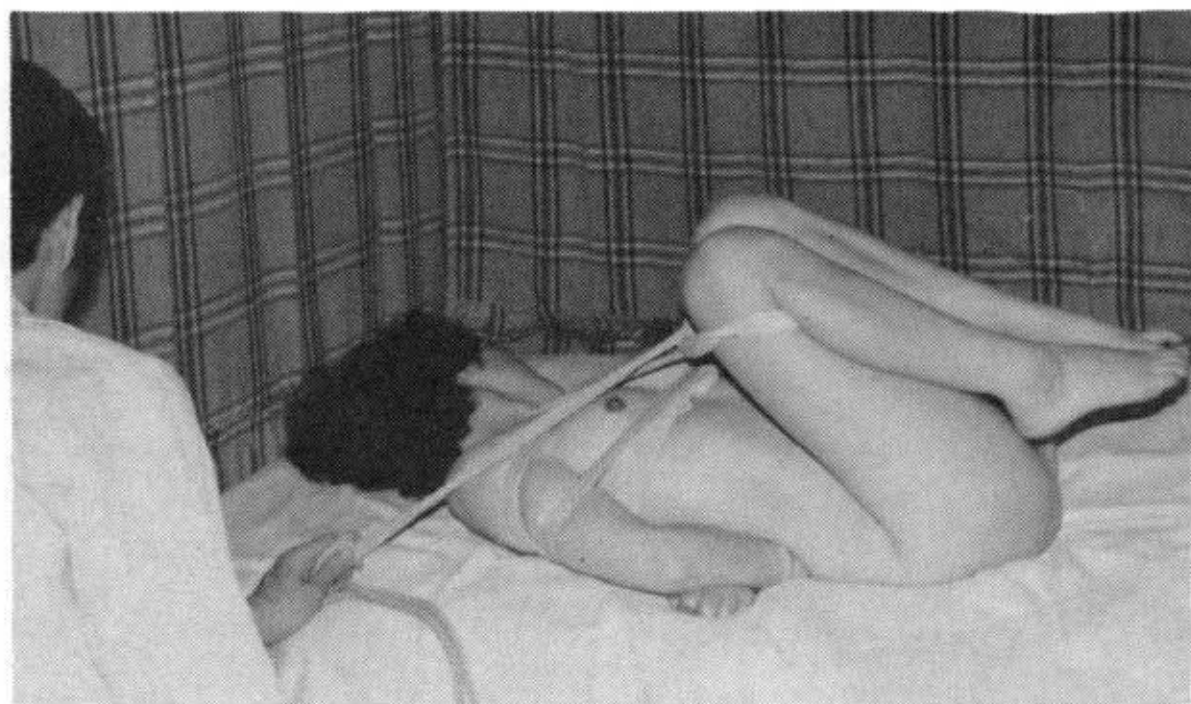
「じゃ、こうしてチョンチョンと……」

黄色い悲鳴をあげるるみ子。だが、Yさんの片手がスイと伸びて、パンティをスルリッと……、可愛いらしい半円球が二ツ、顔を出す。  
「そらそら、お尻が見えてきたぞオ、そら、全部脱がしちゃお」

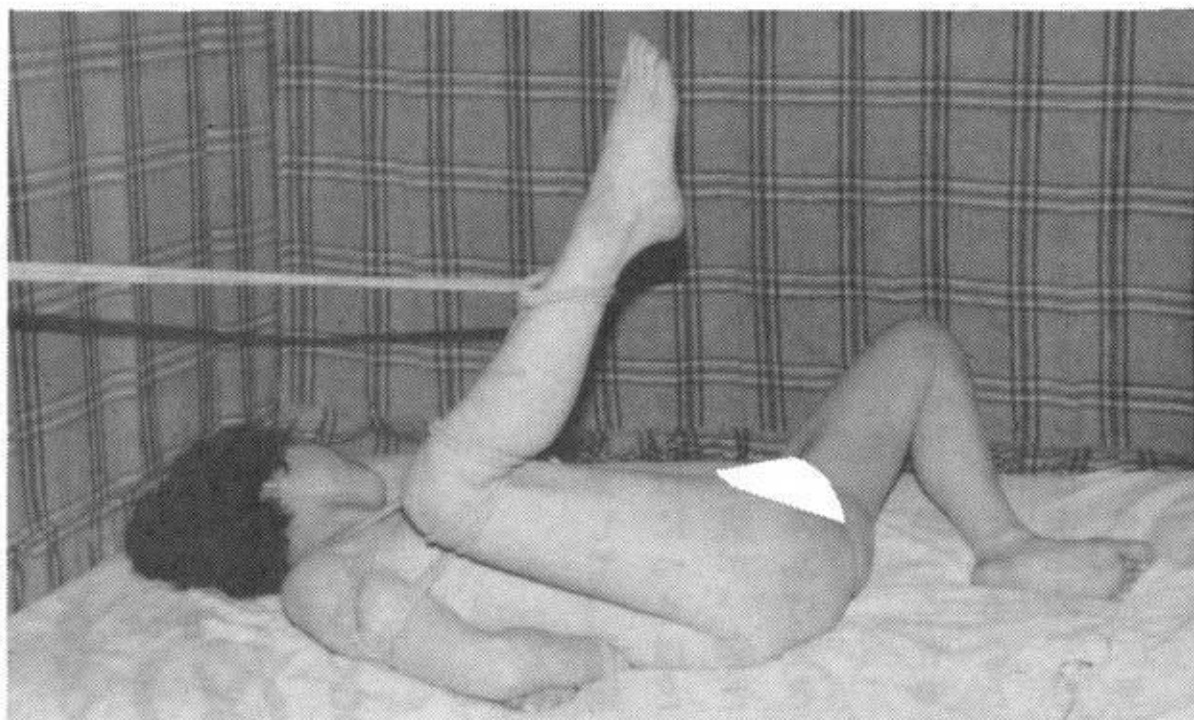


「もうダメだわ、気がヘンになりそう……」

Yさんがからかいながら、るみ子のパンティを脱がせていくと、  
「ア―ッ、駄目エッ、許してエ！」  
と腰を振って逃げまどう。とうとうるみ子は裸にされてしまった。  
「さて、いよいよ股間縛りだ。エーと、



「最後に、片足を縛って……」



こうして……、アレ、これでいいのかな？」  
Yさんのロープさばきが怪しげになってきた。経験がないのだからやむを得ない。苦心して股間縛りを完成する。「できたッ。どう、このロープの味？」

「アーツ、引っぱっちゃ、裂けちゃう！」



股間を通るロープをグイグイ引っぱったからたまらない。  
「ヒエーッ、駄目よオ、そんなのッ。キャッ、はさまってるのよオ！」  
るみ子はびっくりしてキャアキャアと悲鳴をあげる――。

「どう、よかった？」「ウン、すごく……」

るみ子とYさんのSMデートは約3時間で無事に終わった。

もちろん、この実況報告のようにスラとコトが運んだというわけではなく、途中でるみ子が小用をたしに行ったり、一休みしてサンドイッチをつまんだりしたのだが、紙数の関係ですべてを報告はできなかった。

特に、興にのったYさんが、指や舌でるみ子を愛撫するなどのシーンはポルノチックな写真しか撮れず、誌上で公開できないのは残念である。

プレイの感想は、それぞれ、

Yさん「やってみると、縛るのはそれほど難しくないですね。自信がつきました。また、るみ子さんとデートしたいです」

るみ子「こんなに興奮するとは思わなかった……、Yさんたら、アヌスちゃんにもイタズラするんですもの……。ほかの男性はどんなことをしてくれるかしら？」

というわけで、るみ子はすっかりSMプレイが好きになった様子。プレイの内容を書いたお手紙をください、とのコトでした――。



投稿作品

# 秘められた密儀

近藤 隸

一

すっかり春めいてきまして、通勤の電車の中でも、半ソデ姿の女性がチラホラ目につくほどです。

冬の間、隠されていた肌が、春とともに急にあらわになると、なぜか懐しさがこみあげてきて、気持ちが高ぶります。

実は私、都心の銀行に勤める者ですが、この十年来、自分がすっかり変わってきていることに気づき始めたのです。と申しますのは、ほぼ十年前、ひよんなきっかけから、私は自分の性格の中に、マゾヒスティックな面があることを発見しました。

ひよんなきっかけといいますのは、その時、新入行員の歓迎パーティを開いていたのですが、その新入行員の女の子の中に、飛びぬけて目立つ美人がいたのです。

美人といっても、キリッとしていて、なおかつ上品さを備えていて、それでいてかなり陽気なのです。

私は彼女をひと目見て、ゾクツと背筋に電流のようなものが走るのを感じました。

スラリとした体つき、長くのびた足。短かめの皮のブーツが、また私を酔わせました。

水割りを飲みながら、時々席をたって歩く彼女の姿を、私はゾクゾクする思いで眺めたものです。

あのムチツとひきしまったお尻が、私の寝ころがった顔の上にのっかって、私は息もつけなくらい、あたたかいぬくもりのある二つの丸い肉の下で、フガフガと喘いでいる……。

そんな情景を想い浮かべて、私はもう気が遠くなって、やたらと想像をたくましくしていました。

「近藤クン……」

隣りに坐って一緒に飲んでいた、同僚のMクンに肩をたたかれ、私はフツと我にかえりました。

「近藤クン、見ろよ、あのS子って新人、なかなかの美人だな。誰が最初にデートに誘い出すか、今から楽しみだな……」

Mはニヤニヤと妾いながら、さも自分がデートに誘いたいかのように、かつ誘える自信があるかのように言いました。

私はMの言葉に、別に返事もせずに、興味がないかのよう、水割りのグラスを口にしていました。

十才以上も年下の女の子に、それも単に性的な女としての魅力以外のものを感じてしまった私は、その夜から、別人になってしまったのです。

そして、マゾヒストとしての生活が、次の日から始まったのでした。

男なら誰でも、きっとそのS子を見たら、一度でもいいからセックスがしたい、と思うでしょう。

また、一緒に連れて歩いて、ペットとして可愛いがりたいと思うでしょう。

それが、私はまったく違うのです。S子の細くしなやかな指で、私の顔をつねって欲しいとか、あのスラッとのびた足で蹴って欲しいとか、そんなふうな痛めつけられることばかりを願っているのです。

S子が勤めて間もない頃でした。休み時間に、S子がトイレに入っているのを見かけたのです。私はまた、とんでもない空想を描いてしまいました。

S子がオシッコをしている。その股の下に、私が仰向けになって、彼女の黄金のような小水を飲んでいる場面をで

す。

男子便所に入行って、出もしないのに小便をするふりをしていると、S子のシャーシャーいうオシッコの音が聴こえてきました。

妻とセックスする時にさえ立たない私の息子が、その音を聴いたとたん、ムクムクと起き出したではありませんか。それも、S子のオシッコが、自分の口の中に入っていることを想い描いてのことです。

「ほら近藤、あわれなオス犬め、飲め、飲め、私のオシッコを飲め！」

そんなS子の声が聴こえてきそうです。S子なんて、呼びつけにしたらいけません。S子様、S子女王様です。

S子女王様がトイレから出ると、私はもう夢中になり、彼女が用を足した女便所に飛び込んで、内側からカギをかけました。

見ると、彼女は水を流し忘れていて、便器の中に、オシッコがたまっているではありませんか。

そればかりではありません。生理だったらしく、赤く汚れたナプキンがオシッコにひたされて、捨てられているのです。

私は胸が高鳴って、まるでひもじいオス豚のように、その汚れたナプキンをつかむと、顔に押しつけてクンクン匂いを嗅いだり、また舐めたりしました。



それは、女王様が私に下さった、聖なるプレゼントだったのです。

狂ったようにムシャブリついて、私は女王様の聖なるプレゼントを、心ゆくまで味わいました。

私の銀行の中での立場は、S子に従えるような身分なのですが、それは表向きだけです。心の中ではいつでも、逆にS子女王様に、私が従っているのです。

## 二

現実にはあり得ないことまで、想像したことがあります。女子銀行員と男子銀行員が、立場を逆にしたらどうなるか。

私たち男は、若い女の子の言いなりになって、ズラッと並んだ彼女たちの足もとに膝まづいて、ちよっぴり汗臭い足の裏を舐めさせてもらうのです。

ちよっつとでも め方が下手だと、鼻つつらを足蹴にされて、後ろへひっくり返るのです。

蹴られた鼻から血が出て、みるみるうちに腫れあがってきます。

それでも、女王様の足を めたくて、蹴られてはひっくり返り、また膝まづき、蹴られては……。

もう、そんな想像をしていると、女子行員を指図してる

のが嫌になるくらいです。

私が仰向けに寝そべると、制服を着た女王様が、顔の上に股がって、スカートの中に私の顔を隠します。

そして、顔にお尻を乗せるのです。もちろん、いくら小柄な彼女でも、全体重をかけるのですから、顔は押しつぶされます。

同じようなことを、他の同僚や上役、後輩もされているのです。呻いているのは私だけではありません。

いつも女の子をアゴで使っているような上司さえも、飲みの呻き声をあげているのです。

S子様は、また私の体についてさえも、いろいろと口うるさく言うのです。

「おまえは、醜い体をしてるねエ。どうしてそんなにブヨブヨ太ってるんだ。私が無視したら、おまえなんか、どこへ行っても見向きもされないんだよ」

そんなふうに言って、私をいじめるのです。でも、女王様に口ぎたなく罵られると、私はそれだけでも、嬉しくなってしまうのです。

もつと、もつと激しく罵りて欲しいくらいなのですから……。ペツと唾を吐かれて、それが顔にかかる、えもいわれぬ飲びが体中に走るのです。

こんな想像もしてみました。私と妻とそれにS子様の三人で暮らしているのです。私にとっては、二人とも女王様

です。

二人の女王様に奴隷にされている私は、とても幸せです。朝は私が二人よりもずっと先に早起きして、朝食の仕度です。真冬でも、まっ裸でなければいけません。

二人が食事をしている間、私はジッと床に正座させられているのです。

食事が終わると、お二人の口をナプキンで拭いてさしあげます。拭き方がまずいと、

「おまえは誰のために、こうやって飼われているんだ」

と怒鳴られて、ビンタが頬つぺたに飛んできます。そして、頭をゲンコツでこづかれるのです。そのたびに私は、

「女王様、ありがとうございます」

と必ずお礼の言葉を申しのべるのです。それをしないと、私は豪華な朝食にありつけないのです。

私の素晴らしい食事は、お二人の去った後、皿に吐かれた女王様たちの唾の混じったものを食べることです。

それはもう、この世にあるものとは思えないような、贅沢な食事です。

私は吐かれてドロドロになった、女王様たちからいただいた食べ物を口にとると、嬉しくて涙が出てくるのです。

その日は特に贅を凝らした朝食で、ライスと肉と野菜がドロドロになって、まるでゲロのような素晴らしいものでした。

それに、私が昨夜とってさしあげた、女王様二人の女性器の中についているスメグマが、ほんの少し皿のはしについているのです。

こんなご馳走はめったにいただけません。ふだんは、スープとライスの混じったものだけなのです。

ですから、ご馳走の出た日は、いつもよりもっと女王様に仕えなくては、という気持ちになるのです。

女王様たちは、とてもよく私をいじめて下さいます。靴がそろえてないといわれては平手打ちされ、食事がまずいといわれてはゲンコツです。

そんなふうに私を可愛いがって下さる女王様のことを、私はとても慕っております。

慕っているばかりでなく、あがめたてまつっております。女王様がいなければ、この私も存在しません。お出かけの席でも、私を胡散臭そうな目つきでジロツと見て、

「おまえなんか、どっかへ行っておしまい。もう用はないんだから！」

と言って出て行くのです。二人は私をかなり嫌っているようです。

本当に私なんかなくてもいい、そう思っているようなんです。

私はとっても惨めな気持ちになるのです。とっても暗い気持ちになるのです。



そして、私なんか、いつそのこといいない方がいいんだ、などという自虐的な気分になるのです。

そして、どういうわけか、そんな気分になっている自分の胸の中で、ゾクゾクとした妙な快感が躍りあがるのです。

そんなものですから、私はいよいよ女王様二人にいじめられ、罵られては幸せな毎日を送っているのです。

ある時、私が留守番をしていますと、女王様二人から電話がありました。

今、名古屋に来てから、忘れた荷物を持って来てくれ、と言うのです。

私は早速、その忘れた荷物というのを持って出かけました。

何が入っているのか、それはとっても重いのです。四才ぐらいの子供の重さがあります。

夏ですから、私は汗をタラタラかきながら、辛い思いをしながら、それでも女王様のためならと、重い荷物を届けました。

しかし、約束のホテルへ行ったら、案内人がそういう人たちは来ていない、と言うのです。

私は惨めな思いをしました。ホテルの人たちに、変な目で見られたのです。

それというのも、荷物が二つに割れて、中から漬物の石

と、女物のパンティがゴッソリ出てきたからです。

ホテルの人たちやお客の目の前で、私は大恥をかきました。もう泣きたいくらいでした。

そうして、女王様たちに感謝したのです。私をいたぶって下さって、ありがとうございました、と……。

私は、みんなが見ている前で、荷物をまとめ直すと、顔から火の出る思いで、そそくさと帰って来ました。

そうすると、部屋では二人が待っていて、ケラケラと私を笑うのです。

「おまえのすることは、何もかもドジなことばかりだね、もっと真面目にヤレ、真面目にね」

「そうだよ。おまえみたいなオス豚は、丸焼きにしても喰えないよ」

二人はそう言って、また私を見ながら、大笑いするのです。

まあ、以上のようなことは、あくまで私の空想なのですが、本当にあったらいいなあと、いつも夢を見ているのです。

### 三

ところで、S子様のことですが、確か入行して三年目のことでした。

私は、S子様がその年に新しく入いった後輩の男子行員を、からかっている場面を目撃して、ギョッとなったことがあります。

なんでも、男子行員が計算の仕方をまちがって、何度やっても正しい数字が出てこない。

S子様は知っていながら、わざと意地悪く、教えてあげようとしませんのです。

その男は、ドギマギして本当に困っている様子でした。

それをS子様は、ケタケタ笑ってそばで見ているのです。

私はまたしても、背筋がゾクゾクしてきて、たまらない快感に酔いしれました。

まるで、自分がからかわれているように錯覚したのです。

ああ、あれが自分であつたらなあと、つくづく思いました。そして、自分の立場がうとましく思われました。私は注意する立場にあつたからです。

「S子くん、からかってないで、教えてあげなさい」

私がS子様に注意すると、彼女はムキになって、

「係長、お言葉ですけど、Kさんは何回やってもわからないんですよ。私が教えてもですよ」

といって私に刃向かって来たのです。

私は顔にこそ出さなかったのですが、そんな始めての体険に、思わず身ぶるいました。

私は始めて、S子様の女王としての顔や態度を、そこに

見たのです。

その時のS子様の見るからに意地の悪そうな顔を思い出すと、私は、S子様、もっと私に刃向かってきて困らせて下さい、と哀願したくなるほどだったのです。

けれど立場上、そんなことは言えません。想いを胸に秘めていなければならないことほど、辛いことはありません。私が注意したことでカチンときたのか、その後のS子様の、私に対する態度が変わってきました。

今までよく話しをしたりしたのですが、話しかけてもすぐに返事をしなくなりました。

キリツと目をつり上げて、私を睨むのです。そんな時のS子様の顔に、私はサディスティックな女王様の一面を見るのです。

そんな状態がしばらく続いたのですが、その間の私の気持ちちは、それはもうただ嬉しくて嬉しくて、毎日銀行へ出かけるのが楽しくて、浮々するほどでした。

S子様に声をかけて無視された時の、あのなんとも言えない戦慄は、私のマゾヒスティックな性格の中で、はじけ飛んだり、ブルブルとふるえたりして、それはもう強烈なものでした。

いっそのこと、その場で、

「S子様、私に口をきいて下さい。お願いします。女王様！」



と、土下座して、S子様の足もとにすがりつきたくなるほどののです。

S子様に無視され、軽べつされるほどに、私の気持ちは高ぶり、おののいて、マゾヒスティックな夢想は激しくなるばかりでした。

一度、私の机にお茶を運んできたS子様が、熱いお茶の入った茶碗をひっくり返したことがあります。

それはきつと、あくまでまちがえてひっくり返したのでしようが、私はそれを、私に対するS子様の熱い思いやり、と受けとったのです。

まさにそのお茶は、ズボンの上から腿にひっかかって、思わず悲鳴をあげたほどです。

そこで私は、S子様が何くわぬ顔をして、というよりも、ニタツと笑ってくれて、それ見ろッ！、というような態度をとってくれたら、と願ったのですが、S子様はすぐに私の所に寄ってきて、ヤケドの手当てをしてくれました。

私はガッカリしましたが、そのヤケドがいやがうえにも、私の気持ちをくすぐったのです。

自分で勝手に

「これは、S子女王様が、私にくれた唯一の奴隷としての証明印なのだ」

と、解釈して、一人で悦に入っていました。ですから、ジクジクとしたヤケドの痛みは、私にとってかけがえのな

い、大きな歓びだったのです。

痛みが続いている間、私は幸せでした。その痛みがもつと長く、ずっと続いてくれたらどんなにいいだろう、と思ったほどです。

他の女には少しも感じないのに、どうしてS子様だけに、私はマゾヒスティックな感覚をおぼえるのだろうか、ということも考えています。

ふと想いは、遠い生まれる前の世界にさかのぼって、もしかしたら、私とS子様は、前世でも深く結びついていたのではないか、などと不思議な気分になったりします。

そして、そんな昔の二人のサドとマゾの関係に想いを馳せると、まるで現在の二人の関係が、当然のことのように思えてくるのです。

きつと、その前世でも、私はS子様にさんざんいたづらされたのでしょう。

その記憶が無意識のうちに、私の頭の中によみがえってくるのでしょうか。

そして、体にしみついたマゾ感覚が、ときどき目ざめて、私を揺り動かすのです。

「おまえって、ダメな男だねエ。何をやらせても、愚図でノロマで、何ひとつ出来やしないんだからさア。私が叱り飛ばしてもしないと、おまえはシヤンとしないんだから」  
そんな女王様の罵声が聴こえてきます。

私は仕事場では、自分で言うのもおかしいのですが、とても評判がいいのです。

上役からもかなり信頼されてますし、几帳面な性格は、今の仕事に適していると自負しております。

ただ、完璧でないと気がすまないような一途なところが、長所でもあり短所でもあると思っております。

ですから、仕事場では私はかなりカタブツで通っております。

S子様も今では三〇才を過ぎて、ぐんと女っぽくなってきました。そんなS子様は、まだ独身なのです。

まるで、私のために独身でいてくれるような気がしてなりません。

やはり、美人には冷たいところがあって、男は特に若い男は寄りつきにくいのでしょうか。

私にしてみれば、S子様が独身でいてくれるのは願ってもないことで、もし結婚でもしようものなら、私はきっとショックで寝こんでしまうに違いありません。

S子女王様は、私だけのものです。他の誰のものでもありません。

S子様のためなら、私はどんなことでもします。女王様のはいている靴の裏までも、舐めてさしあげます。

最近のS子様を見ると、以前にも増して、その美人さゆえに、ツンとお高くとまっているのです。

若い男子行員などは、近寄りがたいといって毛嫌いしますが、私はもう、そんなお高くとまって、オツにすましているS子様を見るたびに、

「女王様、私をいたぶって下さい」

と、手を合わせて膝まづきたくなるのです。そんな私の切実な気持ちを、S子様は感じているのか、いないのか、私とすれちがう時に、キリッとしたきつい目を流します。

S子様も、もう十年のベテランですから、私にさえズケズケとものを言います。

そんな時、私は内心ゾクゾクとしながら、S子様の顔を拝んでいるのです。

行員の誰にも気づかれずに、私とS子様のSM行為は、毎日のように行なわれているのです。

秘かに、二人だけの、女王と奴隷の密儀は、今日も始まるのです（つづく）

### 「秘められた密儀」イラスト募集！

投稿作品「秘められた密儀」（近藤隼）はMの世界をイメージふうに描く連作です。ファンタジックな世界に浮遊する主人公は近藤隼氏自身でもあります。あなたでもあります。この作品のイラストを描いて下記へ送ってください。

《宛先》 風俗資料保存会・編集部



投稿作品

# 犬と私と夫——上野悦子

……とうとう私は、オス犬と交わってしまいました。

夫の強い求めに負けてしまい、人間の女の私が、獣の犬と交わってしまったのです。でも、それが本当の獣姦と言えるかどうか、私達夫婦には今でも疑問です。

何故なら、通常世間で言われているように、オス犬の生殖器の瘤が、私の体の中に入いつてきませんでしたし、犬の瘤が入いつて私のお尻と犬のお尻とが絡がらず、抜けなくなるようなこともなかったからです。

犬のペニスが私の体の中に入り、交わったことは事実です。それに、犬が私の中でおびただしい精液を出して私の体で性感を味わっていたことも事実です。終わって気持ちよさそうな顔をしている犬の顔も、その裏付けで解

りました。

夫の獣姦への期待は、私が犬とつがい、犬の瘤が私の中へ入り、三〇分も一時間も抜けなくなってしまう、犬のお尻と私のお尻が連なることでした。獣姦への執念のような夫は、私に迫ってきました。獣姦に関する本や雑誌を集め、それを読み上げて、私に迫ってくるのです。

一年ぐらいの間でしたけど、夫は私と犬との獣姦に憧れて、熱病のような毎日でした。

「なあー、悦子」

「何ですの」

猫なげ声の夫の言葉に、  
（また、何かエッチなことを、私に求めて……）

私達は夫婦ですから、夫の言葉と目

付きですぐピーンとききます。言いにく

そうな顔をして、

「人間の女のお前と、オス犬とをつがわせたい」

「何ですって！」

「お前が犬と、つがうのだ。〇〇〇〇するのだ」

「……」

エッチで好色な私の夫。夫が喜んでくれれば夫婦仲も良いという、SMに夫婦交換にと、夫に従ってきた私ですけど、この獣姦ばかりにはあきれて次の言葉がでなく、ぽーと夫の顔を見つめているだけでした。

一度言いだしたら後へ引かぬ私の夫ですから、私が犬と獣姦するように迫り、毎日のように口説きました。

本や雑誌、それに外国のポルノの獣姦の写真まで持ち出してきて、見せたり大きな声で読み上げたりして、私を

口説くのです。

「……今日は四〇分もの間、私の〇〇〇〇の中に瘤が入り、抜けませんでした」

どなたかの体験告白記らしいのですけど、こんな調子で大きな声をあげて読み上げ、私に聞かせるのです。

そうして読み終えると、

「この奥さんのご主人は幸せだな。それに引き換え俺は……」

こんな言い方をされたら、私も面白くありませんので言い返しました。

「私、何でもあなたの言うこと聞いてるわ。ただ獣の犬と交わるのだけは嫌と言ってるの」

続けて、

「あなた、他人の前でも私にオナニーさせるじゃないの。オナニーって内緒にするものよ。私、恥ずかしいのに他人さまの前でオナニーして、それに写真まで撮られて、恥ずかしい……、そんなに協力しているのに……」

「そのくらのことは、どこの奥さんでもしている」

私が最後まで拒んでいまずと、ぷーとふくれて自分の部屋へ行ってしまい

ました。

翌日から夫は、私をイジメにかかりました。それも会社まで休んでしまいますし、一日中家にいるのに、一言も口をきいてくれずに自室にこもり、私が声をかけても返事もしてくれません（なにしているかな、夫は……）

そして、夫の部屋をのぞくと、私の大きな秘写真が机の上に並らべてあります。

「どうするの、そんなものを出して……」

はじめて夫が口をききました。「かねて、お前の秘写真を欲しがっていた彼に送ろうかな、と思い整理しているのだ」

どんな写真かと見ると、なんと私の女性器のアップで、剃毛してカワラケの写真です。それに、私の顔も写っていますし、さらに花芽の皮をめくり、尿道口まで写っているという写真だったから、私は慌てました。

「やめて！ そんな写真」

そんなわけで、私の秘写真を送るのをやめさせる交換条件として、とうとう獣姦を引き受けてしまいました。

私がOKしたので、夫は盆と正月が

一緒に来たような張り切りようです。

「悦子がつがうのはセパードかな？ それとも、もっと大きな秋田犬のほうがいいかな」

つがう、つがう、なんて言葉がどんどん出て来て、まるで私をメス犬扱いです。

「つがうなんて言葉を使わないで」「お前、マゾ女だろ。それならメス犬だ。つがる言葉が駄目なら、さかると言うか……」

つがるもさかるも一緒です。

「もっと他に使う言葉がないかしら」「それなら、交尾でどうだ、では悦子を犬と交尾させよう」

もう完全に獣姦の世界に気が行っている夫。

そうして、毎日、つがる、さかる、交尾するなんて聞いていると、いつのまにか私まで、

「悦子はメス犬ですから、オス犬とつがるのです」

と、被虐のうちにオス犬に犯されるメス犬としての私に奇妙な快感すら生れてくるのでした。



獣姦は承諾したものの、私に不安が湧いてきました。

「犬と人間のアイノ子が生まれてこないかしら、心配だわ」

「妊娠したら、堕せばいい」

私もそうでしたけど、夫も犬と人間との交わりで、妊娠の知識はありませんでしたから、こんな話の調子です。「抜けなくなってしまうたら、どうしよう、怖いわ……」

「お医者さんに頼んで、犬に注射を打ってもらえば抜けるよ」

「そんな恥ずかしいこと……」

そんな幼稚な知識しかありませんでした。

「近所の人に、私が犬とつがったことが知れたら、もう私はこの家にいられないわ」

「大丈夫だ。犬はシャベラないから、お前と俺とがだまっていればわからない」

「それも、そうだけど……」

こんな毎日の環境が、私を獣姦へと追いやっていくのでした。

犬の瘤が私の中から抜けなくなってしまったら……、これが私の一番の心

配ごとでした。

私も犬同志の交尾を、何回かこの目で見たことがあります、その時も長い時間、四、五〇分もつがったまま離れませんでした。

露地裏や公園など、いつもはたとえ犬同志の交尾でも、やはり恥ずかしいのでチラリと見ただけで、横を向いて通り過ぎていました……。

ところがある日、私の家の二階から犬の交尾の最初から最後まで、この目でシッカリと見てしまったのです。何の目的もなく、二階の窓から外を見てみると、露地に二匹の野犬が戯れていました。

「キャン、キャン」

その鳴き声に、私の目が二匹の犬のほうにいくと、オス犬でしよう、メス犬のお尻の上にのぼり、腰を使っているのです。一瞬、

（犬の交尾……！）

と、すぐに解ったので、私の目は二匹の犬に釘付けになりました。

（どうして交わるのかしら……）

誰もいないので、犬の交尾に注目です。

メス犬が逃げ廻っているのに、さかりのついたオス犬は捕えてしまい、文字通りドック体位でのしかかっています。

「キャン、キャン」

と、メス犬の鳴き声に、（犯されているみたい……）

マゾっ気の私は、自分が犯されているような錯覚に落ち入り、このメス犬に嫉妬さえ感じて見ていました。

人間の女だってそうですけど、犯されるまでは抵抗していましたが、つがってしまうと気持ちがいいのか、メス犬の鳴き声も止みました。

オス犬がメス犬の後ろから押さえ込んで、腰を使っていると、痛いのかキャンキャンと鳴いています。それが終わってしまうと、メス犬が静かになります。

今から思うと、オス犬の瘤がメス犬の性器に入っていく時に、痛いので鳴いたのだと思うのですけど……。

瘤が入ったのでしよう。抜けられなくなったと知ったオス犬は、ぐると廻り、二匹の犬がお尻とお尻を絡めたように互いに顔を反対のほうを向い

て交尾を楽しんでいるようでした。

時計で計ったわけではありませんけど、約三、四〇分は抜けないで絡っていました。ときどき、メス犬が逃げようとするのですが、オス犬の瘤が入っているので抜けずにいるのです。やがて、オス犬が射精したのです。う、急に抜けると、犬はどちらへともなく行ってしまいました。終りはあつけないほどの終幕でした。

(あら、私って……)

どうしたことなのでしょう、犬の交尾を見ている間に右手の中指がショーツのゴムの横から入り、花芽を慰んでいたのです。

(恥ずかしい……)

右手の指を慌てて抜いて、そして、自分の鼻へ持っていく、嗅いでみると女特有の性の匂いがプーンと匂ってきましたので、ますます慌てて洗面所へ駆けこみ、指の匂いを水で流したのです。

「おーい、悦子、コリーだよ」

「まア、可愛い犬、コリーちゃん」

これから私が、この犬と獣姦させられることも忘れて、その可愛い犬に抱きついていました。犬の交尾を見てから数日後のことです。

このコリーの名前は「チェリー」といいます。夫の話では、コリー犬はおとなしいので、それに決めてきた、というのです。

「まだ生れて一年だ、勿論、童貞だ」  
「童貞だなんて……」

童貞という言葉聞いただけで、すぐ獣姦のことが思い浮びました。

「少し慣らせよう」

私たちの寝室にチェリーが加わり、人間の男女とオス犬の生活が始まりました。

そして、一週間ほどたって……

「もう、悦子に慣れた頃だ、そろそろつがわせてもいい頃だな」

夫の言葉から、私はとうとうその時が来たことを知りました。

もうその頃には、夫は犬の交尾についてかなりの知識を得ていて、私にいろいろ教えてくれました。

夫の話では、犬のペニスが私のXの中へ納まると、根元の瘤が私の中へ移

動して膨み、抜けなくなるといいます。そうして、射精が終ると瘤もだんだん小さくなくなって抜けてしまうというのです。

「そういえば、あなたの袋のXだって射精しそうになると、急にどこかへ行ってしまいますわ」

「つまり、移動しているわけだ、犬だって同じなんだろうな」

瘤の話をしているうちに、ほんとうに抜けなくなったらどうしよう、とまた不安になってきて、そのことが私の頭から離れません。

そんな私にはお構いなく、夫は獣姦の準備を始めていました。チェリーの性器を慰んでいるのです。

「おい！悦子、チェリーがおやしてきたぞ！真赤なソーセージを出して筋を立てているぞ、おまえの中へ入れたがっているんだ」

「……」

「おい、見てみろ！」

「……」

「見ないか！犬のチンポを……」

夫に叱られて、チェリーのペニスを見てみると、人間とは違うグロテスク



な肉塊には筋が立っているのです。

（これが私の中へ入り、そして、あの瘤が……）

「おッ、この犬、腰を使っている、もう一人前だな」

恥かしい……、夫のしごきに気持がいいのか、本当に腰を前後しているの、とつてもエッチに見えました。

「あまりしごいて射精してしまうといけない、早くベッドへ上れ！」

夫にせかされ、不安でしたけど、ベッドへ上り、裸で横に寝ると、

「バカヤロー！ ドッグスタイルだ、バックからだ。おまえ、いくつになるんだ、犬とつがう体位ぐらい知らないのか、バックだ、四つん這いになれ！」

犬とつがうのですから、そんなことぐらいは知ってます。でも、あまりにも異常な行為に私はうろろうしてしまつたのです。

「早く！ メス犬悦子！ お前の旦那のオス犬が、チンポを立てて待っているではないか、早くしろ！」

夫はSMプレイの時のように私をメス犬呼ばわりしてサディスチックに叫んでいます。

「すみません、今、メス犬の私が四つん這いになりますから、あなた（チェリーのことです）、もうすぐですから……」

私はとうとうメス犬にされ、旦那さまになるチェリーを、あなた、あなたと連呼したので、夫はとても上気嫌になりました。

どーッ、と毛むくじやらの犬の体重が私のお尻の上から背中へかけてかかりました。続いて、それが犬の本能なのか、私の体の一番細いところ、ウエストを両方の前足で抱きつきました。

獣姦……

人間の女の私と、獣の犬とが結合するのだと思うと、罪悪感が湧いて怖しくなりました。今は、私の両親は他界していませんけど、自分の娘が獣の犬と結合するなんて知ったらどう思うかしら、とそんなことまで考えてしまいます。

その反対に、

（私って、犬に犯されるのかわ、仕方がないの、私はメス犬だから……）

と、獣姦されるマゾヒチックな快感も湧いてきて、とても複雑な気持でした。

そんな私の気持なんか関係ないかのように、夫はチェリーのペニスをしごいているらしく、ときどき、私の中心に当たります。

「今にな、悦子と犬とがつがつて、犬の瘤が中へ入って抜けなくなるぞ！」

「……」

「いいか、チェリーとつがつてよくなつたら、思いっきり……」

登りつめろ、と夫は興奮しているのです。その声は私のお尻のほうから聞えてきましたが、不安ばかりの私は返事もしませんでした。

「痛い！ あなた、チェリーが前肢で私の肌を引っ掻くの」

「つがうまで辛抱しろ、瘤が入って抜けなくなつたら、尻と尻とを合わせてやるから」

私の痛いのも、つがわせることに懸命な夫には聞こえないのか、勝手なものです。

「おかしい、犬が腰を使っているのに駄目だ……」

「でも、入口に当たっているような……」

「そうか、でも、駄目なんだ」

私は自分の足の開きが足りないのか  
と思い、更に両足を開いて迎えよう  
としたのですが、夫はやはり駄目だとい  
うのです。

そうになると、それまであんなに張り  
切っていた夫がなんだか可哀想になっ  
てきてしまいました。

「あなた、落着いてください。焦らな  
いで……。入口を間違えてない？」

そういいながら受け入れやすいよう  
にいろいろ体を動かしてみたのですが  
どうしても駄目なのです。

とうとう夫は怒り始めました。

「この犬、バカ犬かな。それともイン  
ポかな。でも、立っているからな、す  
ると、バカ犬かも知れない……」

犬とつがったまま一時間も抜けなか  
ったというある奥さんの体験記事を読  
んだことのある私は、

（犬でも相手を選ぶのかしら……）

とさえ思えてきました。

私がこんなに待っているのに、ちっ  
とも入ってこないチェリー。

（チェリーは私を嫌いなのかしら）

それとも、チェリーはやっぱりほん  
とうのメス犬とつがいたいのかしら。

せっかくここまで来たというのに、  
私はなんだか夫がとても可哀想になっ  
てしまいました。

「もう一度やりなおしてみたら？」

私の言葉に、夫は再度挑戦し始めま  
した。でも、結果は前と同じで、どう  
してもつがうことができません。

「駄目だ、入らない！」

すっかり落胆している夫を見るに見  
かねて、

「私、自分でやってみますわ」

勿論、夫は反対しませんでした。私  
は、人間と同じく正常位を試みよう  
と思ったのです。

仰向けに寝た私は両足を大きく開い  
てチェリーをおなかの上へ抱きあげ  
ると、片手を伸ばして愛撫してやりまし  
た。興奮しているのがわかった、私は  
少し腰を浮かせて近寄せました。

「どうだ、つがったか？」

犬の毛が邪魔をして様子がわからず  
にいる夫はイライラしながら訊いてき  
きました。

「柔かいけど、大きくはなっています

わ」

「それなら、早くつがえろ！」

私だって、どうせここまで来たので  
すから、立派につがってさせて、夫を  
喜ばせてあげたいのですけど、どうし  
ても駄目なのです。位置が悪いのか、  
どうしてもつがった感じにはなれない  
のです……。 (つづく)

### 「犬と私と夫」イラスト募集！

投稿作品「犬と私と夫」（上野  
悦子）はアニマルとの交情を描い  
て秀逸です。この作品に花を添え  
るべく、「犬と女」を題材とする  
イラストを募集します。

※スミ、黒インク、鉛筆で描く。

サイズ (1) 17.5センチ×6センチ

(2) 5.517.5センチ×27.5センチ

タテ長、ヨコ長どちらでも自由で  
す。優秀作品は「挿絵」として掲  
載（画料1枚5千円）。応募点数  
自由。掲載不要の戯画もお待ちし  
てます。



# 妊婦ハント 膨満の快樂(二)

前田八郎

「あなたがあんまり可愛いから、私の体がこんなに熱いんですよ」

私は、美子の肩を抱き寄せ、彼女の口の中へ舌を差し入れながら、片手で茂みの中の湿地帯を探りました。

蜜のようなトロリとしたものがあふれて、私の指からしたたり落ちます。美子は鼻穴をひろげてハアハアと喘いでいましたが、もうどうにも辛抱できなくなったのか、握りしめた私のものを自分の裂けめへグイグイとこすりつけます。

無理矢理に奪ってしまうよりも女のほうもその気になっていてくれたほうが、楽しみも倍加するものです。

「いいですね……」

耳の中へ熱い息を吹きこみながら許しを請うと、美子はガクガクと首を傾かせて、待ちかねたように腰を揺すってきました。

膨んでいる腹を抱く正常位は無理だと思い、彼女を膝の上へ抱きあげて座位でインすると

待ってましたとばかりに腰を揺すり始めるのでした。

「ああ、感じる、感じるッ……」

こんな感じになるのは久しぶりだわ、などといっているところを見ると、ここ一、二カ月、夫とのセックスはまったくなかったのではないのでしょうか。

重い体でドスンドスンと揺すられると、私の方が参ってしまうので、じっとしているようにいい、私が腰を揺すってやりました。すると、美子は体をエビのように反らし、口を開けて息遣いを荒くしながら、しきりに悶えています。

そんな様子を眺めているうちに、熱いものが下半身を貫いて、とうとう噴出してしまいました。美子のほうも、妊娠して器管が敏感になっていいるせいか、私と同時に達してしまったようです。

二人とも満足して、跡仕末を始めたのですが、よほどよかったとみえて、美子の股間は

あふれたものですっかり濡れていました。

「気持ちよかった？」

と私が訊くと、彼女はニッと笑うだけでしたが、紅潮した頬は激しく燃えたことを物語っていました。

最後にもう一度、美子の妊娠腹を觀賞したくなり、ベッドのわきに立たせて、臍を中心に膨らみだしている腹を撫ぜまわしてみるとはつきりと胎動を感じました。

美子は細身の体をしていますが、プックリと膨んだ腹を突きだした姿はとても可愛らしいものです。白い乳房はグツと盛り上り、大きな乳首と乳輪は早くも濃い褐色に着色しており、特に乳輪には多数のモンゴメリー線が小隆起して、すばらしい眺めです。

こうして、すべてを許してくれた美子に特別の感情が湧き、私は再び彼女を膝の上へ抱きあげて口吻をしました。この時、ふと思ったのですが、女はやはり細身に限るということでした。すっぽりと腕の中に収ってしまう

女は可愛らしいものですし、性感もよいように思うのです。

そんな美子が、これからどんどん腹が大きくなるのだ、と思うとワクワクしてしまい、次に会える時は、もっと具合がよくなっているに違いないと思いながら岩田帯を元どおりに締めなおしてやりました。

私も身仕度をしながら、

「この次はいつ会えますか？」

と訊くと、美子は少し考えてから、

「病院の帰えりなら……、病院の近くの喫茶店で待って……」

と、私の申し出を承諾してくれました。いつ、病院へ行くかは決めてないようでしたが毎日、昼の十二時に電話してくればお知える約束してくれたのです。

私は内心でシメタと思い、美子の気持が変らぬうちに退散することにしました。その帰り道で、私は、念願の妊婦を、しかも全裸にして好き放題に楽しめたことで、この上なく満足して、こんなに楽しめるなら多少のお金を使っても惜しくない、と思い始めていたのです。

それにしても、細身の美子のお腹がプックリと膨んでいる様子は、何度思いだしても私

を興奮させずにおかず、自宅へ戻ってから彼女の絶頂時の姿態や声を思いだしてオナニーに耽ってしまうほどでした。

普通、妊娠とわかるほど腹が膨むのは六カ月頃からで、五カ月では目立たない女もいます。以前、近所の奥さん（三〇歳ぐらい）が妊娠していると聞いて、夜中にこっそり風呂場へ覗きに行ったことがあります、それほど目立って大きなお腹をしておらず、後で聞いたら五カ月とのことでした。やはり、目立つほどになるには六カ月ぐらいからなのでしょう。

妊娠六カ月の美子もいづれは巨大な腹に膨らみ、胎児がこぼれ落ちそうになるのかと思うと、女体の神秘に今更のように感心せずにはいられません。

それから十日ほどして、美子がまた産婦人科へ行くことがわかり、約束どおり、病院の近くの喫茶店で会いました。

今度はもう面倒なことは何もなく、すぐに喫茶店を出て、近くのラブホテルへ入り、二人きりになると、私は美子を抱き寄せて、会いたかった、待ち遠しかったよ、といいなが

ら口吻をしてやりました。

そして、すぐ美子を全裸にして妊娠腹の觀賞です。彼女は、この前は始めてだったからすごく恥ずかしかったわ、といいながらも私の前に妊娠腹を突きだしてきました。

たった十日ほどの間ですが、なんだか膨らみが増しているように思え、私は手を差しのべると、丸々とした腹を撫ぜまわして、その感触を味わいました。

なんといっても、妊娠は始めてという美子です。その新鮮な妊娠腹は私を興奮させずにはおきません。

美子の全裸妊娠腹を眺めたり触ったりしているうちに興奮してきたので、彼女をベッドへ仰向けに寝かせ、立膝をした両足を左右へ開いて指で愛撫してやると、たちまち呻き声をあげて悶え始めました。

たとえ妊娠しているとはいっても、美子は成熟した肉体をしているのですから、十日も男と接していなければ、体が欲しがるのも無理はありません。

美子のそんな様子に、今日は徹底的にやってやろうと心に決めて、ラブホテルでの二時間を彼女への指技、舌技、そしてファックにたっぷり費したのです。



美子も、膨んだ腹を波打たせて私の愛撫に応え、絶頂を迎えるたびに、まるで分娩時の妊娠のように声をあげ、顔をゆがませていました。

絶頂時の彼女の口癖である、

「感じちゃうッ、感じちゃうッ」

を連呼しながらしがみついてくるのを、何度もひき離して焦らし、その敏感で滑りのよい女芯を楽しんでいるうちに、私もとうとう我慢できなくなって、ブルブルと歓喜に震える手足に力を入れながら一気に噴出させたのでした。

終ってから、美子の股間を覗いてみると、一面に白滴が付着しており、彼女の遊びがどれほど強烈だったか知ることができました。

「嬉しいよ、こんなに飲んでくれて……」

「恥ずかしいわ、そんなに開いちゃ……」

激しい運動の後の心地よい快感に浸りながら、私は、ふと興味が湧いて、大型の子宮鏡を手にとると、美子の女芯に装着して内部を覗いてみたのでした。

美子は、産婦人科でいつも子宮鏡を使われているので、全開にしても苦痛を訴えるようなことはありませんが、セックスの直後をそんなふうに見られるのが恥ずかしいのでし

よう、しきりに恥ずかしがって顔を両手でおおっていましたが、子宮鏡を抜いてくれとはいいませんでした。

もしかしたら、子宮鏡を入れられることで

すでに快感を得ているのではないかと思い、

「こういうモノを入れられるのは好きじゃないんですか？」

と訊くと、

「好き、というわけじゃないけど……、お医者さまにいつも入れられてるから慣れてることは確か、ね……」

と妙にあいまいな返事をするので、

「ほんとうは気持ちいいんですよ、こうして中を覗かれると……」

「うふふ……、でも、やっぱり恥ずかしいわよ」

美子は赤い顔をして笑っていました。

多分、彼女に限らず、妊婦は産婦人科で子宮鏡を使われて女の一番恥ずかしい部分の、そのまた奥をじっくり覗かれることに興奮を覚えているに違いないと思います。

私は女の体についてよく知っているというわけではありませんが、体の中を覗けるといふのは恥部があるからで、男の体ではそうはいきません。

体の奥深くを覗かれる、しかも、女にとって最も恥ずかしい部分から覗かれる、ということが、結局、刺激になり、興奮することになるのでしょう。

その特権を握っているのが、産婦人科医というわけで、私が彼らを羨しく思うのは、その点です。

毎日、次から次へと女の体内を覗いて、しかも診察料まで貰えるのですから、こんなにいい商売はありません。その上、体つきや乳房の変化、腹の膨み具合、女性器の変化などをつぶさに観察し、必要とあれば触ったり指を入れたりすることもできるのです。

苦勞してでも産婦人科になるべきだった、などと思うのですが、私の趣味が「妊婦」だからであって、実際の産婦人科医たちはなんの楽しみもないのかもしれませんが。何事も職業ともなれば傍目で考えてるようなものじゃないのでしょうか。

それを考えると、むしろ、私のように趣味として妊婦とつきあったほうが、楽しみもあるというものかもしれません。

それにしても、女というイキモノは考えれば考えるほど不思議に思えてきます。

子宮鏡で恥ずかしい部分を思いきり開かれ

ているくせに、セックスなんてしたこともありません、といった顔をしている人妻がいるのですから。

セックスをすれば妊娠し、妊娠すれば産婦人科で子宮鏡で覗かれる、こんな理屈が女の世界では通用しないというのも不思議です。

私などは、街で大きな腹を抱えながらヨチヨチ歩いている妊婦を見ると、すぐにその女の性交場面が浮んできてしまいます。

それとも、そんなことは知らぬ存ぜぬといった顔の妊婦に、タネを仕入れた場面まで想像してしまう私の頭が変なのでしょうか。

それはともかく、セックスの好きな妊婦美子を得た以上、彼女が出産するまでの3カ月はたっぷり楽しんでやろうと、私は心に決めて、次のデートを約束させたのでした。

毎日、セールスや集金に忙しく歩き回っていると、半月ぐらいいはすぐたってしまうもので、五月の節句も過ぎる頃、美子は妊娠七カ月になる筈でした。

七カ月の妊娠腹はどんなものかな、と思って電話すると、

「いつもの喫茶店で、お昼に待っていて」

という返事でした。その日は、丁度、彼女が産婦人科へ行く日だったので。

喫茶店で待っていると、美子が少し疲れているような顔をして現われました。病院で長い時間待たされたというのです。私はすぐ、病院の待合室のイスにズリと並んだ妊婦たちの光景が頭に浮かびました。妊娠かどうかはまだわからない、不安と期待で落着かない新婚間もない若妻。よくやく膨らみの目立ち始めた六、七カ月の女、そして、分娩が間近い、太鼓のような腹の女……、そういう女たちが、それぞれほかの女の腹をチラチラと盗み見しながら診察の順番を待っている……、妊娠は病気ではないだけに陰気臭さはないものの、女だけがかもしだす奇妙に生臭い光景に違いありません。

そんなことを想像すると、矢も盾もたまらず、喫茶店での話もそこそこに、私は美子の手をひかんばんかりにして、この前に利用したラブホテルへ向ったのでした。

部屋へ入ると、すぐに美子を裸にして、妊娠腹を眺めました。

「七カ月になったら、急にこんなに大きくなっちゃって、恥ずかしいわ」

美子のいうとおり、六カ月の頃とは段違い

に腹が膨んでいました。

確かに、それだけ膨んでいると、外を歩いても人目につくし、それが男であれ、女であれ、この女は夫の肉棒で突っつかれて、こんなに腹が膨んだのだ、と思われてしまうわけで、それを考えれば、美子が恥ずかしがるのもわからないではありません。

でも、美子の話しぶりでは、夫とのセックスが世間に知られるということよりも、自分の体が不格恰になったことのほうが、恥ずかしいことのようにでした。女の心理はどうも男にはわかりにくいものです。

しきりに体形の悪さを恥ずかしがる美子でしたが、私にはむしろ、腹がだんだん膨らむにつれて、彼女の魅力も増してくるのです。

妊娠腹を　めたり、撫ぜたりしているうちに私はすっかり興奮して、美子をベッドへ仰向けに寝かすと、左右へ開かせた両足の間へ顔を近づけていきました——。(つづく)

妊婦を題材にしたもの。スミ、インク鉛筆で描く。サイズは自由。掲載分には画料進呈します。



# 百恵の太腿

そろそろトウが立ってきたタレント歌手が失地回復のため芸能プロデューサーに肉体を投げ出す。しかししたたかな仕事師は先頃人気絶頂時に結婚引退した山内百恵を復帰させる為の淫靡な計画に往年のアイドル歌手を利用しようとする。

笛吹童子

## 最高の収獲物

これまでの最高の獲物だった。

松方貴嗣はソファに寝かせた美しい獲物を眺めながら、景気づけにバーボンを一口ビンごとあおった。

上が名曲喫茶になっているその地下室には、マニアなら思わず嗜虚心を煽られるような種々の責め具が飾られてあった。

彼は以前、小さな芸能プロダクションの社長をしていたのだが、或る事件をきっかけに、その世界から足を洗って、今はどうにか喫茶店のマスターに収まっていた。

その彼の前に、CBAレコードのチーフ・プロデューサーである酒田政義が姿を現わしたのは、年も押しつまったある夜のことだった。

「実は折り入って君に頼みたいことがあるんだ」

松方は首をかしげた。この酒田とは何度か顔を合わせたことはあるが、それほど親しい間柄ではない。いやそれ以上に、どうしても頭の上がない義理があったのだ。

プロダクションの社長をしていた頃、彼は

芸能界の人間がやりがちな悪質な仕事に手を染めていた。新人タレントや芽の出ない歌手に、甘いエサをちらつかせて肉体関係を迫ることは茶飯事で、街でひっかけた少女たちをホテルに連れ込み、好きなように弄んで、テレビのプロデューサー達に献上したりもした。

その際に、彼は度々酒田の名を使ったのである。素人の少女たちは、実際に酒田が育て上げたスターの名を二つ三つ挙げると、たちまち眼を輝かせて、彼の云いなりになった。

最近の歌手や女優志望の少女たちは、有名になるために、自分の若い肉体を利用することを、躊躇らわれないのが普通である。中には、自ら積極的に提供しようと申し出る子もいた。

悪運が尽きたのは、一年半ほど前のことだった。以前新宿で拾って、好き勝手に弄んだ少女の父親が、事情を知って酒田政義のところへ怒鳴り込んでいったのである。酒田は知らないと言ったが、父親は一層腹を立て、訴えてやると息まいた。それでは会ってみようと云うことになり、酒田はわざわざその家まで赴いたが、娘とはもちろん初対面だった。

酒田が協力してニセ酒田を探し始めると、間もなく松方貴嗣の名が挙った。本来なら松方は、娘の父親と酒田に訴えられ、社会人と



としての資格を喪失するのが当然だった。が、何故か酒田は松方をかばって、裁判になれば娘さんが一層惨めになるだろうから、示談にしようかと、相手の父親を説得した。

「金で娘の純潔は買えん」

と云いながらも、父親はしぶしぶ慰謝料を受け取った。そのために、松方はプロダクションを潰さねばならなかった。

酒田がその夜「頼みがある」と云ってきたのは、だから、あのときの貸しを返してくれ

と云うことだった。

「で、頼みとは何でしょう」

「私は君と云う男を見込んでる」

銀縁の眼鏡の奥の眼が、松方を見据えたまま光った。

「実は近いうちに、引退したある歌手をカムバックさせる計画がある。それに君の力を貸してもらいたい。もちろん、いい金にもなるし、君の趣味を同時に満たすこともできるだろう。ただし、多少危険はあるがね」

あとになってわかったことだが、酒田が松方を選んだのは、まさにこの点においてだった。彼は松方が、たんに女を抱くだけではなく、変った嗜虐的な行為を好むことを、例の娘の一件から同類の鼻でしっかり嗅ぎ分けて



いた。

その晩、松方は今度の途方もない、恐しい計画を酒田から聞かされた。断られる立場でなかったこともあったが、そんなこととは別に、松方の気持ちは、これまで手に入れてきた獲物の中でも最高の標的に昂りを覚えていた。

そして今日、彼は引き金を引き、見事標的を撃ち倒した――。

## 眼が覚めると

不快な目覚めだった。

頭の中にしこりのような鈍い痛みが残っており、体がけだるく重い。が、眠たげな瞼が開いて眼の焦点が合うと、百恵は表情を強張らせた。

窓一つない地下の密室、奇妙な道具の置かれた中を、一人の男がカメラらしき器具を三脚にセットしている。男の服装を見て、彼がマンションへ荷物を運んできた男だと思い出した。

（そうだわ、印鑑を取りに部屋に戻ったとき、いきなり背後からハンカチで口を塞がれて――）

体を動かそうとしたが、鉄柱のようなものを背に、立ったまま両手を頭上で、柱に縛られている。

「気がつきましたか」

ビデオカメラを覗き込んでいた松方が顔を上げた。不敵な笑みを浮かべながら、近づいてきた。

「どうです気分は」

「ここはどこ？ 貴方は誰です」

「そいつは今はまだ教えるわけにはいきませんな。ただ、山内百恵の熱烈なファンの一人とだけ云っておきましょうか。それも、カムバックを願う一ファンとね」

「それなら縄を解いて下さい。私をどうしよう云うんです」

「いい質問ですな」

松方は眼孔を陰険に光らせると、作業服からナイフを取り出し、百恵の喉もとにつきつけた。

「貴女は監禁されているんだよ。この地下室は防音になっていてから、助けを呼びたけりや、大声で叫ぶといい。だが、百恵のイメージが壊れちゃうぜ」

そう云って顎を把むと、百恵の面を仰向かせた。所謂美人タイプの顔立ちではないのに、

こうして見る百恵は、妖しく艶麗なまでの美しさを湛えている。結婚してとにかく美しくなったという週刊誌などの評判は、嘘ではなかった。

唇を重ねようすると、百恵は顔をそむけて逃げた。

「智和への義理立てかい。だが、そうやって気どっていられるのも今のうちだけだ」

松方は顔をくつつくほど近づけたまま、不遠慮にふくよかな胸もとをまさぐり、さらにその手をシックな柄のワンピースの中に入れ、大腿から臀の若妻らしいいたしかな肉付きを楽しんだ。

綺麗に剃った眉根を嫌悪に寄せながら、百恵は屈辱に耐えようと、相手のなすがまま唇を噛みしめている。こんなときと乱して抗えば、それだけ相手を悦ばすことになるのだから。

「さすがに大スターになっただけのことはあるな」

感心したように云うと、松方は手にしたナイフでワンピースの胸もとを切り裂いた。

洒落たデザインのは、ただの布片となつてヒラヒラと足元に落ち、百恵の濃いベージュの艶めかしいブラスリップを着けた肢体

が露わになった。強がっては見せても、胸の動悸の起伏は隠せない。

ナイフがブラスリップの肩紐を片方ずつ切った。

「あ——」

さすがに声を上げて、百恵は全身を強直させた。ブラスリップがさらりと落ちて、足元に絡みつく、もう残っているのはストッキングと、それを透して見える小さなパンティだけである。胸前で張りつめた乳房は、大きくはないが丸く、形よく盛り上り、淡紅色の乳うんの先に大きめの乳首を載せている。

「智和のヤロウに毎晩揉まれてるだけに、ずい分と豊満になったようじゃないか」

「い、嫌っ」

松方の手が乳房に触れるなり、縛られた両手を握りしめて、百恵は身をよじる。

「悔しけりや大声で泣き叫ぶんだな」

嘲るように云うと、松方は腋の下に手を置いて、片方の尖った乳に舌を這わせた。下端の丸みに沿って、め、乳首を転がしてから、口に含んで吸う。

愛する智和にしか許したことのない、それを身も知らぬ男に好きなように貪られる悔しさ、何もできぬ情けなさ、さらに夫に対す

る申し訳のない気持ち——そんな百恵の心中の苦悩を思うと、松方はやるせないまでの昂奮を覚え、知らず知らず乳房を揉みしだく手に力が籠った。

が、百恵の体はただ鳥肌の立つようなおぞましさを感じただけで、そのことに百恵は秘かな安堵を覚えた。もともと人一倍早熟で、結婚してから一年半、ようやく女の悦びを知り始めた体である。それが夫との営みのように何の反応も示さないのは、智和をそれだけ深く愛しているからに違いない。百恵はそう思った。

松方の愛撫が下半身へ移ると、しかし、百恵の自信もぐらつき始めた。

指に張りつくような柔かい乳房を、唾液で濡れ光らせた松方は、舌と唇を張りのある腹に押しつけたまま下へ滑らせていくと、脆弱なパンティストッキングを十センチほど引き剥がし、丸く凹んだヘソの右横にあるホクロに唇を押し当てた。

百恵の体の特徴の一つは、上半身に比べ腰から大腿にかけての肉付きの豊かさである。ことに付根からにゅっと生えたふとももの圧倒的な豊かさはどうだろう。本来ならその容姿は、不恰好と云えなくはないのだが、百恵

のふとももは、ファッション・モデル等の長く形のよい脚よりも、はるかに豊とした官能を宿しているように見える。

松方はすぐに下着を脱がそうとはせずに、薄いストッキングの上から豊満な臀部やムッチリと太い腿をたつぷりと撫でまわし、頬ずりした。そして、ぴったりと付け合せた腿と腿の間に手をすべり込ませ、ノコギリを引くように付根に咲く花園を撫で返す。

「脚を開きなよ」

「い、嫌です、これ以上触らないでっ」

と、かすれるような声で云って、嫌悪にブルブルと身を震わせる百恵。

「それなら仕方ない」

松方はそう云うと、竹の棒と新たに縄を用意した。

## 官能のゆらめき

竹の棒に約一メートルの間隔で、両肢の足首を縄で縛り上げた。

抗ってはみたものの、所謂女の力ではかなわず、縛られてしまうと余計に惨めさが込み上げてくる。百恵は、前髪の下から覗く、憂いを含んだ眼で男を見つめ、



「どうしてこんなひどいことするの？ 何が目的なんです？」

「目的はあんたさ。あんたのこの体、その眼、その唇、その臀にふともも、つまり全てってことだ。それをあんなニヤけた新浦智和なんかと結婚しやがって。そいつが気に喰わないんだよ」

（異常だわ、この人）

そう思うと同時に、自分の追い込まれた立場に、いよいよ焦りと絶望を覚えずにはいられない。

松方は両の太腿を抱くようにして、下腹の人一倍高い頂きに顔を近づけた。冴えた面立ちに比べて、その辺のムツとくるような肉の熟れ具合に、悩ましいまでの盛り上り。我れを忘れて松方は、ストッキングの筋の走る頂きに鼻をこすりつけ、その下の柔かい凹みに唇を押し当てた。

四肢を強直させて、百恵はわななく唇を噛みしめた。が、嫌悪感とは別に、ストッキングとパンティを通して流れ込む熱い息が、妙に甘く、むず痒く百恵の官能をくすぐり始めたのだ。松方はさらに、息を送り込みながら、舌でクレヴァスの辺りを舐め返した。薄い布越しに伝わる微妙な愛撫は、女の悦びを知っ



た百恵の体にはむしろ新鮮だった。

太腿の付根をびったりと覆うストッキングを、唾液でベトベトにしたところで、ようやく松方は顔を離した。見ると、淡いルージュを引いた若妻らしい薄化粧の面には、薄らと汗が滲んで、淡いピンクに上気している。

「どうです、だんだん良くなってきたでしょう」

「お願い、これ以上変な真似はしないで。もう許して下さい」

相手の慈悲にすぎるような口調で懇願した。

「天下の山内百恵らしくないな。男に媚を売るなんて。もっとも、智和と一緒にあったことを悔いて、俺の女になるって云うんなら、許してやってもいいがね」

半分からかうように云うと、百恵は憎悪を込めた眼差しで松方を見やり、パイと顔をそむけた。

「いいい、その調子その調子。だが、今にあなたの方から進んで俺に抱いて欲しいと願うように、魂まで変えてやるからな」

松方の手には、男性を型どったパイプが握られている。

「おたくの旦那がどの程度女を知っているか、知らないが、ま、一つ比べて見るといい」

そう云うと、スイッチを入れたパイプを乳房の下に押し当てた。百恵にとって、そんな嫌らしいオモチャで体を弄ばれるのは、初めてのことである。松方は百恵の性感帯を探るように、パイプレーターを軽く肌に当てると、綺麗に剝かれた腋の下から胴、腹から乳房の周辺へと這わせて、じわじわと官能を高めていく。

再び松方が胸前の、官能的な乳房を口に含んで吸い上げると、今度は先端がよろこびにピンと固くなってせり出すのがはっきりとわかった。試しにプクッと脹らんだ実を、歯の間で柔かく噛んでやる。

「あ——」

とたんに眉の美しい面が歪み、張りのある豊かな腹部がピクピクと打ち震えた。

さらにパイプを下腹へ移すと、百恵の眼に狼狽の色が走った。

「そ、そこは嫌っ、お願い、やめて下さい」引きつった声を上げて、百恵はパイプの先を避けるように、腰をよじる。

「逃げたって駄目ですよ。感じてるんでしよう、ほらほら」

松方は頂きの下にピタリとパイプを押しつけて離さず、百恵が観念して動きを止めると、

クレヴァスに沿って先端をスツ、スツと擦りつけた。たまらず、ムチムチと官能味溢れる太腿は、ブルブルと快美感にわなないた。いつの間にか、百恵のポツテリとした唇は半開きになっている。

あっ、濡れる——熟れた果実をナイフで切った切り口のように、百恵の体のピンクの挟間からトロリとした蜜が溢れ出した。

百恵は自分で自分が信じられなかった。女の体とはこんなにも脆いものなのだろうか。夫以外の男には抱かれたこともなければ、愉悦を覚えたこともない体が、身も知らぬ下卑た男の愛撫で恥態を晒していこうとしているのだ。

ほとんど祈るような気持で、百恵は込み上げる法悦を押し殺そうと、気持ちを引きしめた。が、湧き起る快美のうねりは、あまりに甘美だった。

もともと潤いの多い成熟した体は、クレヴァスの奥の襞を震わせながら、パンティを気持ち悪いくらいに濡らした。そうになると、今度は逆に布越しに伝わる震動が弱すぎて、何とももどかしい。無意識のうちに、百恵は頂きの下をパイプに強く擦りつけるように、豊かな腰を動かしていた。



見れば仰向いた面にじつとりと脂汗を浮べ、さく二度ばかり頷いてみせた。

## 晒された秘景

百恵はうつとりと切長の眼を伏せ、半開きになった唇から熱っぽい吐息を吐いている。松方はさらに力を入れて、振動を送り込んだ。

百恵の肢体は、ときおりピクピクと媚肉を痙かせながら、背後の鉄柱を背に悩ましく身悶えをくり返した。

不意にパイプが停止した。百恵はハッとわれに返って、体の動きを止めた。松方が、ニヤニヤと嫌らしい笑いを浮べて、手にしたパイプを差し出した。

「こいつが欲しいかい」

たちまち百恵の優美な顔が、鮮かな紅に染まった。が、恥じ入るように閉じた瞼の下では、感受性に富んだ肉体が、官能の毛穴を全て開き、渴望の汗を滲ませているのだ。

「いつまでも我慢していると体に毒だぜ。隠したってここはグッショリだ」

松方がパイプでパンティの底をつついた。

「あつい、……意地悪しないで」

たまらず引き った声で叫んだ。その口調にも、どこか甘えるような響きがある。

「欲しいんだろう？ え？ モモエ」

尚もパイプを押し上げて訊ねると、百恵は洩れる声を呑み込むように口を閉ざすと、小

とうとう百恵の下半身から、羞恥を覆っていた下着が剥ぎとられた。

パンティは雄大なまでの腰に喰い込むように張り着き、こんもり脹らんだ丘の下は、ベージュ色の布がそこだけ濃く、濡れそぼっていた。

叢は漆黒の、縮れの少ない柔かな若草が、決して多くなく、綺麗に手入れたように生えそろうっている。その下のクレヴァスは、若妻らしくピッタリと唇を閉じ合わせていたが、その淡紅色の唇から頂きの裾野にかけては、滲み出した蜜にきらきらと濡れ光っていた。

指でクレヴァスを左右に押し開くと、中は蜜にまみれて唇そっくりに脹らんだ襞が淫らにうごめき、松方は吸い寄せられるように唇を押し当てた。豊かな腹部が、ピクンと弾んだ。舌で入り込んだ花園をかきまわし、舌鼓を打ちながら蜜を吸ってやると、豊潤な百恵の体は新鮮な果実のように、ジュンと蜜を迸らせる。

舌先が女体で最も敏感な、薄桃色の宝石をとらえた。とたんに、電気でも走ったように濡れそぼった襞がよろこびにわなないた。松方は人さし指と親指で宝石を摘むと、襞の間から頭をもたげてやった。

炊き上げた米粒ほどの宝石が、プツクリと充血して、クレヴァスの上端に左右の唇に挟まれるようにして顔を出している。松方はスィッチを入れたパイプの先を、軽く宝石に触れさせた。

「ヒツ……い、い——」

引き った声を上げると、その次には峻烈な快美のうねりが、一瞬にして骨も肉も溶かし、百恵は見事な太腿を甘美に震わせながら、浅くエクスタシィに達した。

そのあまりの敏感さに、松方も舌を巻いた。「何だい、これからだって云うのに、もう行っちゃったのかい」

半ば呆れ顔で、顔を覗き込むと、百恵は、「知らない」

と恥じ入るように云って、顔をそむけた。その仕草にも初めのよそよそしさは消えて、甘えるような感じがあった。頭のどこかでは、まだ自制しようと思っっているのだが、四肢にまでひたひたと押し寄せる愉悦の余波は、そ



んな気持ちをあえなくじくのだ。

「とぼけなさんな。口ではそう云ってもココはもっと欲しいとヨダレまで流してるぜ」

松方はパイプに変えて、逞ましい男性を型どった服型を持ち、

「今度はこいつでたっぷりと泣かせてやるかな。ほら、よく見てみる、智和のもこんなに立派かい、え？」

「もう許して」

鼻先につきつけられた服型の大きさに、いッと表情を強張らせ、百恵は弱々しい声で懇願した。

「こう見えても俺はフェミニストでね。女を悦ばせるからには徹底的にやらないと、気が済まないんだ」

そう云うと、再び百恵の足もとに膝をつき濡れ光る花園の挟間へ張型を押し入れて行った。

(以下次号)



# 標的は牝犬

アヌスが知った弱味

火夏圭介

第二日目が来た。

会田がにらんだ通り、夏子は夫に何も打ちあけなかった。言えなかったのだ。突然、押し入ってきた狂人に浣腸され、アナル・セックスで犯されたなどと、愛する夫に言えるわけがなかった。まして、アヌスを犯されて喜びの声をあげさせられ、写真までとられているのだ。

夏子の様子がいつもと違うのに気づいた夫に、カゼ気味だとウソをついた夏子は、夫を会社へ送り出すと、放心したようにソファに座りこんだ。知らず知らずの内に、涙があふれてくる。

「ママ、どうしてないてるの?」

娘の由加が心配そうに夏子の顔をのぞきこんだ。

「ごめんね、由加ちゃん……なんでもないのよ」

夏子は由加を強く抱きしめた。こんな小さな娘にまで心配させることがつらい。

美しい女に異常な執念を燃やす英次は暴力的組長の御曹子。いつも大男の子分を二人従えて、大好きな女狩りに出かけるが、英次は手に入れた女を普通に抱くことでは満足しない。縄で縛り、柔肌を鞭打ち、アヌスに浣腸責め、バイブ責めなどあらゆる淫虐な鞭りを加えたあとアナルセックスまでもっていかないと収まらないのである。こんな英次に狙われた人妻・夏子の余りにもいたましい悲運の物語はいよいよ佳境にはいつていく……。

「さあ、自分のお部屋で遊んでらっしゃい。ママがクッキーを焼いてあげますからね」

涙をぬぐうと、夏子は笑ってみせた。エプロンを腰に巻いて台所へ向う。

白いブラウスにブルーのタイトスカート。エプロン姿がよく似合った。だが、そのさわやかな容姿に比べて、夏子の顔は暗く沈んでいる。

小麦粉をといっていると、玄関のチャイムが鳴った。

「ど、どなたですか……」

「俺だ、開けろッ」

英次の声だった。

ビクッと夏子はおびえた。背筋に寒いものが走り、手足がふるえ出す。きっと、夫の利彦が出勤するのを見とどけて、やって米たに違いない。

「開けねえか、奥さん」

英次はドンドンたたいた。

夏子はおびえて後ずさった。玄関の鍵が、ピンのようなものでガチャガチャいじられているのがわかった。すぐにかチャと鍵はあいた。会田があけたのだ。

会田、つづいて英次に堂島と、ズカズカ入ってきた。

「ああ……」

夏子は思わずよろめいた。そこを英次がすばやく腰に手をまわして、抱きよせる。

「よろめくのはまだ早いぜ、へへへ、尻の穴をいじられてからにしな、奥さん」

英次の手がスルッと夏子の双臀を撫でまわした。

「いやッ……」

撫でられただけで、おぞましい感触がアヌスによみがえってきた。何かを入れられているような感触がよみがえり、夏子は双臀を硬直させた。

「いやッ、もうあんな事はいや、いやです。帰って、帰っ

て下さい……」

そう叫んだ夏子は、思わずハッとして口をつぐんだ。娘の由加が人形を手に、玄関へ出てきたのだ。

「ママ、だれがきたの？」





疑うことを知らぬあどけない瞳で、夏子を見る。

夏子は戦慄した。(いけないわ、この男達はけだものだ……娘の由加に何をするかわからない。こんな所へ出てきては駄目よ……)

「由加ちゃんッ」

夏子が由加の所へかけ寄るよりもはやく、堂島が由加を抱きあげていた。

「由加ちゃんか……フッフ、ママは用事があるから、おじさんと外で遊ぼうね」

堂島は子供のあつかいもなれたものだった。すばやく由加を抱いて外へ出てしまう。

夏子を責める所を子供に見られてさわがれては、やっかいな事になる……とっさの機転をはたらかせた堂島だった。

「由加、由加ちゃんッ」

あとを追おうにも、厚次に腰を抱きこまれていては、無理だった。

「奥さんが、素直に坊ちゃんの言う事をきいている限り、ガキには何もしやしねえよ」

会田が玄関の扉を閉めながら、ドスのきいた声で言った。

「そ、そんな……子供は関係ないわッ、卑劣だわッ」

「ガキの見てる前で羞かしい事をされた方がいいと言う

のかい、奥さん」

「そ、それは……」

会田の言葉に、夏子はドス黒い絶望感が全身をおおっていくのを感じた。娘の由加を人質にとられたも同然である。

だが、英次はそんな事などまったく頭になかった。堂島が子供を連れ出した事さえ、知っているかどうかかわらない。ただひたすら、スカートの上から夏子の双臀を撫でまわし続けている。

「まったくいい尻をしてやがる……もう、俺のものだぜ、フッフ、どんな風に責めてやるか……」

狂った瞳を、一層不気味に光らせながら、ひとりごとみたいにブツブツつぶやく。英次の狂った頭には、夏子の双臀のことしかないのだ。

タイトスカートの為、形のいい夏子の双臀が浮き上がり、はちきれんばかりに張りきっている。臀丘の割れ目までが、はっきりとわかる。

「へへへ、たまらねえぜ……奥さん」

英次の唇から、だらしなくよだれが流れた。皮でもはぐように、このタイトスカートをまくり上げてみたい……そう思わずにはいられない。そう思うと、その事しか頭にはなく、我慢という事の出来ない英次だった。もう、いつときもおしかった。うなり声をあげて、スカートの

裾をつかむと、一気にまくりあげた。

「あッ、な、なにをするんですッ……やめて、やめてッ」  
娘の由加に氣をとられていた夏子は、ハッとして夢中で英次の手をふりはらった。だが、タイトスカートはすでに腰のあたりまでまくり上げられ、すぐには元に戻らない。

「バ、バカなまねはやめてッ……」

「牝のくせしやがって、この俺にタテつくなんぞ許さねえぜ」

なめるなッ……そう叫ぶなり、英次の平手が夏子の頬を襲った。

バシッ、バシッ……

強烈な張り手に、夏子のからだガクッとくずれた。

「奥さん、てまをとらせるんじゃないやねえぜ。おとなしく両手を背中へまわしな。坊っちゃんからは逃げられやしねえんだからよ」

縄をしごきながら、会田は言った。黒光りして、昨日夏子の肌にくい込んだ縄だった。

縄を見たたん、夏子はひどく狼狽した。

「あ、あ……縛られるのはいや、も、もういやですッ」

夏子はひきつった声で叫んだ。

娘の由加を人質同然に連れ出された上に、会田はプロレスラークラスの大男である。もう逃げられない。それ

がわかっていても、縛られるのはいやだった。縛られてしまえば、どんなに辱かしく、おぞましい事をされても抵抗ひとつ出来なくなる。

「お願い、縛るのだけはゆるしてッ」

「あきらめな、奥さん。ダダをこねてると、かわいい娘がどうなるか、わからねえ奥さんでもねえだろうが」

「そ、そんな……縛らなくても、いうことをききます。

お願い、縛らないで……」

夏子は大きくまくれあがったスカートを直すのも忘れて、必死に哀願した。

だが、会田は強引に夏子の両手を背中へねじり上げると、ゆっくりと縄を巻きつけるのだった。

### 割り開く暴虐の嵐

夏子のからだガブルブルとふるえている。冷たい縄が蛇のように手首に巻きつき、わざわざブラウスの前を肌けて剥き出しにされた乳房の上下にも巻きついてきた。

屈辱と羞恥に、全身の血が逆流し、悪寒が何度も走り抜けた。

「あ、あッ、いや……」

「なにがいやだよ。坊っちゃんがいい事してくれるんじゃないやねえか。さあ、坊っちゃん、いいですぜ」





会田は夏子を立ちあがらせ、双臀を英次の方へ向けると言った。

「へへへ、今日は思いきり楽しませてもらうぜ、奥さん」  
英次はニヤニヤと笑いながら、夏子の双臀をなめるように見つめた。

タイトスカートは腰のあたりまでまくり上げられ、パンティはすでにむしり取られている。

ムッチリと白く、剥き玉子のような夏子の双臀がそこにあった。臀丘は形よく張りきり、人妻らしい艶麗さにあふれている。深くきれ込んだ臀丘の谷間は、さっきから英次の鼻をくすぐる女の体臭が、色濃くわだかまっているような妖しさだった。

色っぽい……俺が狙った女の中でも、この尻はピカ一だ。英次は腹の中でうなり声をあげた。たまらず手を這わせ、もみこむように両手で撫でまわす。張りがあり、しっとり指に吸いつくような肌の心地よさに、英次の情欲はどうしようもないまでに昂まっていく。

「あ、ああッ、さ、さわらないでッ」

「へへへ、奥さんの尻はもう、俺のものだぜ。どうしようも勝手さ」

英次はかがみ込むと、ゆっくりと夏子の臀丘を割りにかかった。

「な、なにをするのッ、い、いやあッ……」

夏子は顔をひきつらせ、けたたましい悲鳴をあげる。英次がおぞましい排泄器官を狙っているのがわかったのだ。

「そ、そんな……いや、いやあッ」

割りひらかれるおぞましさに、夏子は夢中で腰をゆすった。だが、会田に上半身を押えつけられていては、それもむなしいあがらいにすぎなかった。

「へへへ……腰をふるのはまだ早いぜ。今にいやという程、ふらせてやるからよ」

英次は指先に夏子のアヌスをとらえると、ゆるゆるともみこんだ。まるでねりゴムをもみこむような感触である。その感触が、英次には好きで好きでしようがなかった。女のからだの中で一番妖しいのはアヌスだ。……英次はそう思っている。

「い、いやあッ……そ、そこはいや、いやッ」

夏子は戦慄した。

昨日、英次にアヌスをもてあそばれた鮮烈なショックがよみがえってくる。気も狂わんばかりのおぞましさだ。「い、いやッ、指を、指をとってッ」

おぞましさに全身が総毛立ち、ブルブルと痙攣し始める。

昨日は突然襲われて、夏子も必死だった。わけがわからなかったというのが正直なところだ。だが今は、おぞ

ましい排泄器官を舐られている事が、敏感なまでに感じられる。

「あ、ああッ、さわらないでッ……いや、いやあッ」

「へへへ、まだまだ、これからだぜ」

英次はポケットから媚薬クリームチューブを取り出すと、指先にたっぷりとりつけた。

「このクリーム、効くぜ、へへへ……尻の穴に何か入れて欲しくてたまらなくなる」

「い、いやあッ……そんなものつかわないでッ、いや、いやよッ」

妖しげなクリームをぬり込まれる感触に、夏子は弾かれたように泣き叫んだ。

「やめて、やめてちょうだいッ……そこは、お尻はいや……いやあ……」

「奥までぬり込んでやるぜ」

英次はもみこむようにぬり込みながら、ジワジワと指先を埋め込み始めた。

夏子は、あ、あッ、と顔をのけぞらせ、甲高い悲鳴をあげて腰をよじる。しかし、英次の指先は一寸きざみにぬうように沈んでいく。

「だ、だめッ……入れないで、指をとってッ、あ、ああッ、やめてッ」

「へへへ、奥さん、そんなにしめつけるなよ。指がくい



ちぎられそうだぜ」

ゴム輪でしめつけられるような感触を、指でもみほぐしながら、ジワジワと貫いていく。英次は指の根元まで埋めこんだ。指の根元は激しくしめつけられるものの、指先には秘められた体腔がひらけていた。

熱い……指がとろけるようなこの熱さが、英次は何よりも好きだった。

「う、ううッ……とって、指をとってッ」

おぞましさに、夏子の声がうわずっている。夏子はもう、泣いていた。

その泣き声を楽しむように、英次はクリームを夏子の奥深くへぬり込んだ。

「尻の穴をヒクヒクさせて、気持ちいいのかい、奥さん。へへへ……ほれ、ほれッ」

英次はクリームを指先にすくっては、何度も貫いた。えぐるように指先を曲げ、回転させては抽送する。

「いやッ……いやあ……」

夏子は舌足らずの悲鳴をあげては腰をゆすり、泣きじやくる。

「へへへ、これでよしと……今にたまらなくなるぜ、奥さん」

ようやく指を引き抜いた英次はニヤニヤと笑った。媚薬クリームが効くのを待つように、夏子の双臀を手の平

で撫でまわす。

何がたまらなくなるのか……夏子にはわかるはずもない。だが……

「あ、ああッ……」

夏子の顔がひきつったかと思うと、うわずった泣き声をあげ始める。

「へへへ……効き出したようだな」

「あ、あッ……ど、どうしよう……」

なんと言ったらいいいのか……言いようのない感覚に、思わず声が出た。なよなよと首をふり、ググッとのけぞらせる。膝がもどかしげによじれ、腰がモジモジとゆれ始めた。

「こ、こんな……あ、ああッ、いや、いやよッ……こんなことって……」

夏子は名状しがたい戦慄に、絶望の叫びをあげて、からだを大きくのけぞらせた。

おぞましい排泄器官を襲う得体の知れぬ感覚に、夏子は狂ったように全身をうねらせ、あられもない声で泣かずにはいられなかった。この焼けつくようなかゆみを消してくれる刺激なら、どんな事をされてもいい……そう思わずにはいられなかった。

「フッフ、よく効くだろう、奥さん」

英次は臀丘を割りひらいて、意地悪くのぞき込みなが

ら言った。ヒクヒクと痙攣を見せる花びらが妖しく、その肉のうごめきに英次は痺れるような快感を覚えた。

「ああッ……あ、ああッ、お願い、た、たまらないわッ

……お願いッ」

夏子は我を忘れて泣き叫んだ。

なんとかして欲しい……だが、自分の口から言えるわけがなかった。

「どうして欲しいのか、坊っちゃんにはっきり言うんだ、奥さん」

会田が意地悪くささやいた。夏子が逃げられないように上半身を抱き込み、剥き出しの乳房に手を這わせる。つけ根からしぼり込むようにもんでは、乳首をつまんでしごく。

「あ、ああッ……お願いッ」

「お願いだけじゃわからねえだろ。坊っちゃんにはっきりとおねだりするんだ」

尻の穴に入れて……そう言うんだと、冷酷に命じても、

夏子は激しく顔をふるだけで言おうとはしない。

そうしている間にも、我慢するという事を知らぬ英次が、ズボンの前を肌けて、うしろから夏子の双臀をかかえ込んできた。会田が夏子を精神的にも屈服させようと、辱かしい言葉を夏子に言わせようとしている事など、おかまいなしだ。英次は欲望のかたまりのような男なのだ。

「ぶち込んでやった方が、てっとりばやいぜ、へへへ……」

英次は、荒々しく腰をつき出した。

### 肉がすべて熔解する

「い、いやあッ……」

夏子は恐怖に顔をひきつらせ、ブルブルとふるえながら全身をのけぞらせた。

「いや、いやあッ……そこは、そこはいやあ……け、けだものッ」

おぞましい排泄器官を犯される汚辱の苦痛に、夏子は声を限りに泣き叫んだ。

「へへへ、もう遅いぜ。奥さんはもう、尻の穴で俺と結ながってるんだ」

夏子の腰を更にかかえこみ、腰をよじって一層深く埋めこみながら、英次は笑った。

「い、いやあ……」

夏子は一瞬、眼の前が暗くなった。立ったままの姿勢で、うしろから英次にアヌスを貫かれているのだ。腸の奥までギッチリつめこまれたみたいで、張り裂けそうだった。

「どうだ、奥さん。もう俺のものになったって事がわか



るだろ」

英次は、意地悪くググッと突きあげてみせた。まるで結ながっている部分で、夏子のからだを持ちあげるように突きあげる。

「うッうッ……動かないでッ、い、いやあッ」

夏子は、ずりあがるようにつま先立ちになる。

アナル・セックス……それがどんなにおぞましく屈辱的か、もう思う存分に思い知らされている夏子である。

「お、お尻でなんていや……かんにんして、お願い……」  
もう息もたえだえといった感じた。

今しがたまでの強烈なかゆみは、ウソのように消えていた。それが一層、屈辱感をさそう。

「始めてじゃあるまいし、そうおおげさにさわくなよ、奥さん、へへへ……昨日はたいした喜びびようだったんだぜ」

英次はゆっくりと腰をゆすり出した。

夏子は、ひいッ和白いうなじをのけぞらせて泣き叫んだ。

「た、たすけてッ……」

「へへへ、ちょいと昨日の事を思い出させてやっただけよ。お楽しみはあとにとっとなかくちな」

英次はすぐに腰の動きをとめた。だが、まだ深々と貫いたままである。

会田が押えつけていた夏子の上半身から手を離れた。

英次は夏子を逃がさない様に、一層深く腰をかかえ込んだ。そうしておいてから、うしろから押し出すように夏子の右足を前へ進ませる。続いて左足である。

「あ、ああッ、何をするのッ……う、うごかないでッ」

「へへへ、奥へ行くんじゃねえか。いつまでも玄関でいちゃついてられねえだろうが、奥さん」

夏子は戦慄した。英次はアヌスを貫いたまま、家の中へ歩いていこうとしているのだ。

「さっさと歩けよ、奥さん。ほれ、右だ」

「あ、あッ、や、やめてッ」

夏子はたまらず悲鳴をあげて、顔をのけぞらせた。

左、右と足を押し出されて一步一步進むたびに、夏子の中で英次が微妙に位置をかえる。それが、たまらない感覚となって夏子を襲った。

「い、いやあ……」

それは奇妙な光景であった。うしろ手に縛られた美女が、スカートをまくりあげられ、下半身を剥き出しにしたまま、うしろからイモリのように男にまといつかれて、一步一步歩くのである。

会田がその光景を、カメラで撮りまくっている。だが、今の夏子にはカメラを意識する余裕はなかった。

「歩けよッ」

英次が押し出すようにグイッと突きあげる。

「う、ううッ……いや……」

ずりあがるようにのびあがって、夏子は強要されるままに足を踏み出す。だが、思うように足が前へ進まない。アヌスを貫いている英次の形態を、敏感なまでに意識してしまうのだ。

少しでも足をとめると、英次は容赦なく突きあげてきた。

「どうしたい、奥さん。さっさと歩かねえかよ。ほれ、ほれッ」

「あ、あうッ……も、もうゆるして……」

さっきからブルブルとからだのふるえがとまらない。

夏子の肌はもう、汗でジットリと濡れ光っていた。

英次に何度も叱咤され、突き上げられながら、夏子はよろよろと台所まで歩かされた。

「へへへ、お楽しみの時間だぜ、奥さん。第一ラウンドってとこかな」

英次は夏子をテーブルの前まで歩かせると、その上に乳房を押しつけさせるように、上半身を倒した。

「も、もう、ゆるして……」

テーブルの上に顔をうずめたまま、夏子は声をあげて泣き出した。

英次が夏子の腰をかかえこんで、ゆっくりと腰をゆす





り出した。

「い、いやあッ……たすけて、たすけてッ」

にわかには夏子はおびえたって、泣き声を高める。うしろからのしかかっている英次から逃げようと、けんめいにもがき、ずり上がる。

いくらもがいても無駄であった。

もがけばもがく程、かえって英次を喜ばせるだけである。英次は容赦なく、一寸きざみに突き上げた。

「あ、あ、あッ……いや、いやあ……」

夏子は苦しげに悲鳴をあげ、テーブルの上にこすりつけた顔をふる。それはおぞましい排泄器官を犯されているにもかかわらず、衝き上げてくる妖しいうずきを追い散らすようだった。

動じまい、感じてはだめ……必死に自分の心に言いきかせながら闘っているのが、英次にもわかった。それが一層、英次の嗜虐的な欲情をそそった。手をのばして、ヌルヌルする夏子の乳房をわしづかみにしてやる。

「どうだ、奥さん、感じるだろ、へへへ」

乳房を荒々しくもみしだきながら、英次はグイグイと腰をゆすった。

「う、うぐぐッ……い、いや……」

夏子は白眼を剥いた。

いつしか夏子の泣き声は、艶めいたすすり泣きへと微

妙に変化していく。なにかからだの芯がジーンとしびれ、とろけ出すようなのだ。張り裂けるような苦痛も、今ではずっと後退している。

そんな自分のからだだが、夏子には信じられなかった。感じてはいけない、そう思えば思う程、かえって敏感なまでに英次を感じとってしまう。

（こんな、こんなことって……だめ、感じるなんて……）  
もうどうにもならないと言う弱気が、一層夏子をめくるめく官能のドロ沼へと引きずりこんでいく。

「へへへ、感じてるじゃねえかよ、奥さん。昨日といい、今といい、奥さんの尻はたいしたもんだぜ」

「言わないで……あ、あうッあああ……」

「今日は数えきれねえ程、楽しませてやるからよ、奥さん。ほれ、ほれッ……いくぜ」

英次はうなり声をあげて、狂ったように腰をゆすり出した。その荒々しさに、テーブルがギシギシと鳴った。

「あおッ……あわわわ……ひ、ひッ」

夏子はもう、わけがわからないように泣きわめいた。からだ中の関節がはずれ、アヌスを中心に肉という肉がドロドロにとろけたような感じだった。

英次が獣のように吠えて、大きく腰をひと突きした。その瞬間、夏子は英次のドス黒い汚唇のほとばしりを、アヌスの奥に深々と浴びせられたのだった。

## 勝ち誇る凌辱者

夏子はテーブルの上に上体を伏せたまま、消え入るような嗚咽の中にいた。

その夏子の双臀の前に、英次はかがみこんでいた。臀丘を割りひらき、今まで自分が押し入っていた箇所を点検するようにのぞき込んでいる、

「まったくいい尻の穴をしてやがる。何度見てもあきねえぜ、へへへ……」

まだ生々しく口をひらいている夏子のアヌスに鼻をつけんばかりに眼を光らせる。勝ち誇ったように指先でまさぐってやると、まるでイソギンチャクのようにすばまった。肉襞をまさぐっていた英次の指が、吸い込まれるようにくわえ込まれてしまう。

「あ……いや、ゆ、ゆるして……」

夏子はいえぐように言った。アナル・セックスではそれほど灼けている繊細な神経は、異常なまでに敏感になっている。にもかかわらず、まだ執拗にアヌスに興味を示す英次が、不気味であり、恐ろしかった。

「いい手ざわりだ……柔らかいぜ、奥さん」

英次は埋めこんだ指を、ゆっくりと抽送させた。

「あ、あ……も、もう充分でしよう……これでゆるして

……」

「だめだ、へへへ……何度でもぶち込んでやると言っただろ、奥さん」

英次は立ち上がると、腰を突き出して、再び夏子にどこみかろうとした。その英次の眼に、テーブルの上のプラスチック容器が写った。夏子が娘の為にクッキーを焼こうと、ミルクで溶いた小麦粉だった。ドロドロとした小麦粉の液体が、妙に英次の眼を引きつけた。

「ほう、おもしろいものがあるじゃねえか」

英次の眼がキラッと光った。何を考えついたのか、夏子を会田に押えつけさせると、英次はそのプラスチック容器を手にした。

「奥さん、第二ラウンドの前に、いい事をしてやるぜ、へへへ……」

「何をしようと言うの……も、もう、いや」

「見てればわかるよ」

英次が取り出したのは、グリセリン原液の瓶だった。それをドクドクと小麦粉の液体の中へ流し込んでいく。それだけでもう、英次はゾクゾクした。

充分にかきまぜると、

「へへへ、こいつをしてやらねえと落ちつかなくてよ」

英次は笑いながら、カバンの中からガラス製浣腸器を取りあげた。五百CC用の見るからに大きな浣腸器だっ



た。

浣腸器を見たたん、夏子の顔色が変わった。

「い、いやあッ、そんな、そんなことはいやあッ……それだけは絶対にいやあッ」

夏子は激しく顔をふり、ひきつった声で叫んだ。浣腸のおぞましさ、羞恥と屈辱は、もう、骨身にこたえている。それは女としてとても耐えられるものではなかった。昨日、英次の手で浣腸されただけで、夏子の気の強さもけし飛んでしまった程なのだ。

「ああ……ゆるして、そんなひどい事はしないでッ……いや、いやあッ」

「フッフ、そんなにいやがるからこそ、楽しみも大きいと言うもんだぜ」

英次は、プラスチック容器のドロドロした液体を、ズズと浣腸器に吸いあげる。

それを見ただけで、夏子は総毛立った。ブルッ、ブルッとからだがふるえ出す。夏子は声をあげて、わあッと泣き出した。泣かずにはいられなかった。

「しないでッ……いや、いやあッ」

夏子がいくら泣き叫んでも、それは英次にとって欲情を昂ぶらせる心地よい響きでしかない。

「会田、しっかり押えてろよ」

英次が言った。声がうわずって興奮している。

「い、いやあッ、そんなことはいや、浣腸なんて……いや、いやあッ」

必死にこわばらせる臀丘を会田が、非情に割りひろげて英次を待つ。英次は一度、指先で夏子のアヌスをまさぐると、ゆっくり嘴管の先を沈めた。

「ひいッ……ひ、ひッ、いやあッ……」

弾かれたように夏子は悲痛な泣き声をあげて、顔をのけぞらせた。嘴管を沈められただけで、全身が羞恥の炎につつまれた。気が変になりそうだ。

「へへへ、奥さんの大好きな浣腸だぜ。じっくりと味わせてやるからよ」

英次はゆっくりとポンプを押し始めた。ガラスがキューと鳴り、ドクッドクッと重い液体が流入する。

その瞬間、夏子はひいッと息を吸い込むと、次の瞬間泣きわめき出した。

「ひ、ひいッ……入れないで、入れてはいや、いやあッ……」

「へへへ、そんなに気持ちいいのかい、奥さん。うれし泣きしよう」

英次はグイグイとポンプを押し続けた。キューとガラスが鳴る。小麦粉をミルクとグリセリン液で溶いた流動物は重い。かなり力を入れて押さないと入っていかない。まるでチューブからねりわさびでも押し出すようだ。

「会田、奥さんをスッ裸にひんむけ」

英次が命じた。浣腸している昂奮に、無性に夏子を全裸にしたくなったのだ。

会田は黙ってうなずくと、飛び出しナイフを取り出した。

「奥さん、浣腸はスッ裸でされた方がいいだろ。気分が出るぜ」

ボロ切れのように夏子の服が切り裂かれ、はぎ取られた。もう、からだに残っているものといえば、おぞましい荒縄だけである。

「う、ううッ……い、いや、もう、いやあッ」

夏子のからだ中の神経は、流れ込んでくるおぞましさで集中している。とまることのない悪寒が、手足の先まで走り抜けた。決してなれる事の出来ない感触だった。

「も、もういやッ、これ以上入れないで……あ、ああッ……」

「もう少しだぜ、へへへ……気持ちいいだろうが。それ、それッ……」

英次は笑いながら、一気にポンプを押しきった。くうッと夏子は高く泣き声をあげた。

ようやく嘴管が引き抜かれた。夏子があわててアヌスをキュッとすぼめる。荒々しい便意がかけ下ってきた。おトイレに行かせて……夏子がそう叫ぼうとした時、

いきなり英次がうしろからまとわりついてきた。

「ああッ、何をするのッ……」

狼狽の声も悲鳴にのまれた。逃げようと必死にずり上がるのを、英次が笑いながら引きもどす。求めるのはおぞましいアナル・セックスである。

「ひ、ひいッ……いや、いやあ……」

荒々しく押しつけられ、必死にすぼめた菊の蕾が強引に拡大を強いられる。徐々に押しひろげられるにつれて、繊細な神経は一気にほとばしろうとする便意を呼びおこさずにはいられなかった。

それを防ぎ、押しもどすように英次は深く重く貫いた。「へへへ、これでもれる心配はねえぜ、奥さん。栓をしてやったんだからよ」

髪をつかんで、うしろから夏子の顔をのぞき込む。夏子は唇を開き、白眼を剥いていた。

「さあ、第二ラウンドの開始だぜ。気分出さなきゃ、いつまでも栓をしたままにしておくからな」

英次はゆっくりと動き出した。

「く、くるしいッ……ひ、ひいッ、いや、たすけてッ」

「へへへ……こいつがすんだら、第三ラウンドはトイレの中でやってやる。それまでせいぜい苦しむんだな」  
英次は徐々に腰をゆするのを荒々しくしていきながら、勝ち誇ったように笑うのだった。

（以下次号）



巡回中の鉄道公安官によって、高校生二人が強制猥せつ罪の現行犯で逮捕された。満員電車の中で、担任の女教師に卑猥ないたずらをしたというもの。二人は札つきの不良高校生だった。被害者の女教師・夏木怜子（仮名）は二十四才になる典型的なお嬢さん先生であった。

# 女教師強姦事件

（鉄道公安官秘録）

## 淫獣が狙った女

取り調べが進む内に、次々と驚ろくべき事実が明らかになった。電車内での猥せつ行為は、ほんの氷山の一角でしかなかった。ことの起こりは半年前、夏木怜子が新人教師として高校に赴任した時にさかのぼる。

怜子は、典型的なお嬢さん先生であった。知的な美しさのあふれる顔、長く艶のある黒髪、新体操をしていただけあって、服の上からもわかる見事なプロポーション……男子ばかりの高校にあって、怜子はたちまち全校生徒のあこがれの的となった。

そんな怜子を、女好きの不良生徒の大賀と宗が放っておくわけがなかった。怜子が残業で遅くなった時を狙って、その帰り道を持ちぶせたのである。

「大賀くん、それに宗くんも……」

いきなり物影から飛び出してきた二人に、怜子は驚ろいた声をあげた。

「どうしたの、こんなところで？」

「へへへ、先生を待ってたのさ。もう、我慢できなくてよう。溜ってるものをスッキリしてえんだ」

「わかるだろ、怜子先生、へへへ、いいからだしてんだからよ」

大賀と宗は、遠慮なくネットリとからむよ

うな視線を這わせてきた。

怜子はハツとした。本能的に淫らなものをかぎ取ったのである。

「な、なにを言っているの……バカなことを言うとは許しませんよッ」

「気どるなよ、へへへ」

大賀はすばやく怜のうしろへまわった。

この生徒達は本気なんだわ……怜子は戦慄した。助けを求めようにも、夜道に人影はない。

「冗、冗談は、くだらない冗談はやめなさい。本当に怒りますよッ」

怜子は精一杯強がってみせた。生徒と言っても大賀と宗は空手をやっている。襲われた



らひとたまりもない。

「手間を取らせるなよ、怜子先生」

いきなり大賀が、うしろから怜子にとびついた。前からは宗が襲いかかる。

「あ、ああッ、何をするのッ……やめなさい、やめて……」

「静かにしろよ」

「林の中へ連れ込むんだ」

大賀と宗は、抵抗する怜子の手足を押えつけて、ズルズルと林の中へ引きずり込んだ。

「たすけてッ、誰れか、たすけて下さいッ」

「うるせえ。さわぐんじゃねえよッ」

バシッ、バシッと強烈な張り手が、怜子の頬を襲った。

「あ、あッ……」

お嬢さん育ちだけに、暴力には弱い。怜子はあらがいの力が抜けたように、グッタリとくずれ落ちた。

それを更に引きずって、林の奥まった所の空地まで連れ込む。あらかじめ決めておいた場所なのであろう。黒いカバンが置かれている。大賀はその中から、荒縄を取り出した。

「さあ、怜子先生、ネンネしな」

宗が怜子をおお向けに押し倒した。大賀が怜子の両手を頭の上で重ね、荒縄を巻きつけ



縛った。その縄尻を木の根元に巻きつける。これで怜子はもう、立ちあがる事が出来ない。

「やめて、こんなバカなこと……こんなまねをして、ただですむと思っっているの……」

「ただですむと思っちゃんねえよ、へへへ、

怜子先生は俺達の女になるだけさ」

宗はあざ笑った。ブラウスのボタンに手をかけてはすす。

「ああッ、いや、やめてッ」

怜子は弾かれたように叫んだ。狂ったように足をバタつかせ、からだをよじる。

「さわぐんじやねえッ」

宗の張り手が、バシッと怜子の頬を張り飛ばした。それで怜子の抵抗も終わりだった。

ブラウスの前が開けられ、ブラジャーがむくり取られる。大賀の方は、スカートのジッパーを引きおろすと、スカートをはぎ取った。

すぐさま、パンティストッキングとパンティに手をからませ、一気に引き下げる。

「いいからだしてやがる……予想以上だぜ」

「まったくだ。グツとくるぜ、へへへ」

着やせするタイプなのか、怜子の肢体は予想外にムッチリと肉がのり、胴ぶるいがくる

程の悩ましさだった。

怜子は羞恥と屈辱のかたまりのようになつて、顔をふり続けている。

「か、かんにんして……」

怜子は固く眼をつぶり、唇をかみしめたままむせび泣き出した。その声はもう、教師としての響きはなかった。

「アンヨを開くんだ、怜子先生」

「そんな……いや、いやよッ」

怜子は本能的に太腿をよじり合わせた。左右から大賀と宗が、怜子の足首をつかむと、狂ったように両脚をはね上げる。

「いやあッ……やめて、やめてッ」

「ダダをこねるなッ」

また、宗は怜子の頬を張り飛ばした。なれているらしく、宗は女をおどすのがうまい。

ガックリと怜子の両脚の力が抜けた。

大賀と宗は、ニヤニヤ笑いながら、無残に割り開いた。怜子の秘められた肉園が、あら

れもなく剥き出た。月の明りの下に、女の茂みと、それを割るようにして肉の合わせ目が、生々しくさらけ出されている。

「すげえな……たまんねえぜ」

「もっとよく見ようぜ」

「もつとよく見ようぜ」

宗は懐中電灯を手にとると、写し出した。もう、二人の眼はギラギラと血走り、さかん

に舌で唇をなめている。感動にも似た胴ぶるいを押えながら、二人はくい入るようにのぞき込んだ。

「見ないで……そ、そんなところを見てはいや、いやよ」

怜子は顔をふりたくって泣いている。こんなあられもないかつこうをのぞかれた事など、あるはずもない怜子なのだ。

「奥も見ようぜ、大賀」

「へへへ、あたり前よ。何もかも見てやる」

宗と大賀は指をのばすと、女の肉の合わせ目を左右にくつろげた。

「あッ、ああ……さわらないでッ」

「静かにしろ。またぶたれてえのか」

容赦なくサーモンピンクの肉襷が剥き出された。その肉襷を、一枚一枚丹念に指先でさ

ぐりながら、大賀と宗は執拗にのぞき込んだ。子羊の腹わたにくらいつく狼の姿にも似ていた。

「きれいなもんだ……こりゃ、ほとんど使い込んでねえぜ、フッフ」

「へへへ……俺達が使い込ませてやろうじやねえか」

宗と大賀は、のぞき込みながら、うわずつ

た声で笑った。

「大賀、俺が先でいいだろ」

もう我慢できなくなった宗が言った。一刻も早く怜子を自分のものにしないと、今にももれそうだった。

夢中でズボンを下げると、宗は獣のように吠えながら、怜子の上へおおいかぶさっていた。

「ああッ、いやあッ」

一瞬、怜子は恐怖に顔をひきつらせて、宗を避けようとした。だが、宗はかまわず、一気に押し入れた。

「あ、あッ……う、うッ」

怜子は顔をのけぞらせうめき声をあげた。もう、観念したようにされるがままであった。怜子は深々と貫かれた。

## 命じられるままに

宗と大賀に犯された事を、怜子はどうしても誰れにも言えなかった。二人にかわるがわる凌辱され、その姿を写真にまで撮られているのだ。それをいい事に、大賀と宗は欲望のおもむくままに怜子のからだを求めてきた。ほとんど毎日と言ってもいい。

お嬢さん育ちの怜子が、何も言えないのを

よく知っている宗と大賀だった。写真をチラつかせるだけで、怜子を言いなりにするのに充分だった。

放課後、怜子は体育館に呼び出された。

「宗くん、こんな所じゃいや……他で、他でして……」

いつものように旅館で……と、怜子は哀しげに言った。犯され、征服された女の哀しみがみなぎっている。

「へへへ、今日は体育館でやる。中へ入んな、怜子先生」

宗は怜子の背中を押した。

中へ入った怜子は、思わず美しい顔をひきつらせ、全身をこわばらせた。

体操用のマットがしかれ、それを囲むように十数人の生徒達が待ち受けていたのである。怜子のクラスの生徒は、宗と大賀だけであつたが、いずれも問題児ばかりである。

「こ、これは……どう言うことなの……宗くん」

「へへへ、こいつらは、俺と大賀が先生を犯る所を見てえんだとよ」

宗は平然と言つてのけた。

見る見る怜子の顔から血の気が去った。

「そ、そんなこと……いやよ、帰るわ」

「わがままは許さねえぜ」

宗が怜子の手首をつかんだ。

大賀もニヤニヤと笑っている。その手には万札が何枚も握られている。それが何を意味するか、怜子にもわかった。宗と大賀は、小づかいかせぎに、怜子を犯すところを見世物にする気なのだ。

「こいつらを使って、写真をバラまかせたつていいんだぜ。ただ見せるだけじゃねえかよ、怜子先生」

宗が怜子に抱きつきながら、耳元でささやいた。低いがドスのきいた、反抗を許さない響きがあつた。

怜子の顔に、あきらめと哀しみの色が漂よつた。引かれるままに、マットの上に立つ。「スカートをまくれよ。まずはストリップだぜ、怜子先生」

宗が冷たく命じた。

「宗くん……」

「まくれってんだよ。それともこいつらの相手をするかい、怜子先生」

大賀がどなった。

怜子はおびえた顔をいやいやとふると、スカートの裾に手をあてた。手がふるえている。スカートがまくり上げられ始めた。



「うひよ、ムチムチした太腿してるな」  
誰れとはなくに叫んだ。

怜子は一瞬、躊躇したが思いきってまくり上げた。スカートの下は素肌だった。下着をつける事を許されていないのだ。

「怜子先生は、ノーパンかよ、へへへ」

「思ったより毛深いんだな。毛深い女は好きって言うぜ」

「尻の方だって、ムッチリしてやがる」

生徒達は口々に淫らな事を言って笑った。

その眼は、まぶしいものでも見るように細くなっている。

「どうだい、この尻、フッフ、ムッチリしやがってよう」

宗は自慢するように、怜子の双臀を撫でまわして、見せつけた。怜子の双臀は、ムッチリと形がいい。

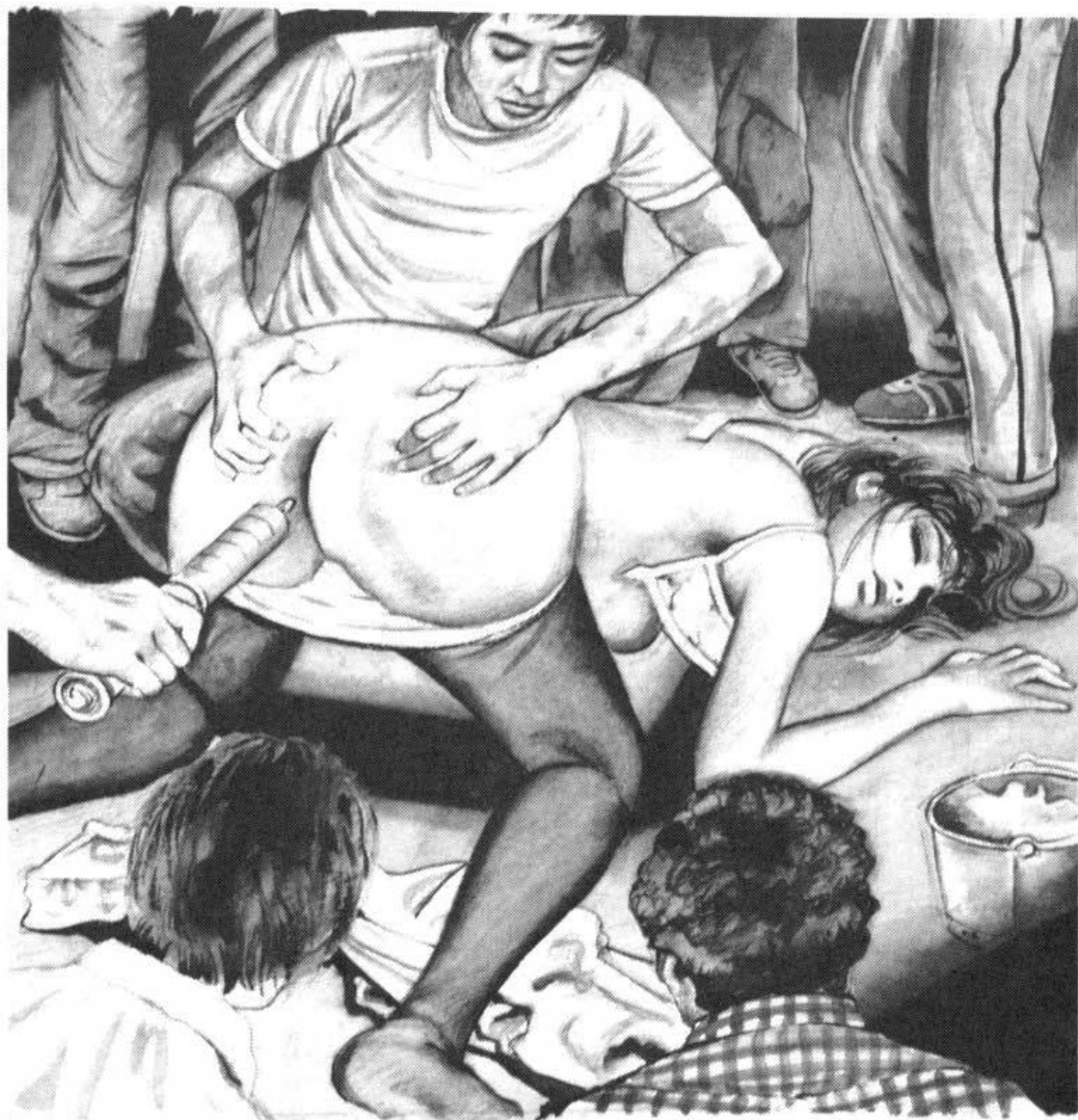
「怜子先生、よっん這いになりなよ」

「か、かんにんして……」

そう言いながらも、怜子はふるえながら、マットの上によっん這いになった。スカートをまくり上げている為、裸の下半身だけが剥き出しだった。

「もっと尻をつき出すんだよ」

「膝も大きく開いてな、フッフ」



宗と大賀はズボンを脱ぎながら笑った。

怜子は唇をかみしめてすすり泣き、言われるままにした。猫がのびをしているポーズだ。

その双臀の前へ、生徒達が群がった。顔をひしめきあつてのぞき込む。宗が見せつけるように、怜子の臀丘を割った。オチョボ口みたいな可憐な怜子のアヌスが、ひっそりとのぞいた。いじらしいまでにすぼめている。その下層に、肉の合わせ目が見える。

「そ、そんな、そんなところを見ないで……お願い……いや、いや……」

弱々しい声をあげて、怜子は狂おしげに双臀をゆさぶる。

「へへへ、怜子先生。いつものようにおねだりしな」

「そんな……かんにんして、皆んなの前じゃいや……」

「ふざけるな」

宗はバシッと怜子の双臀をはいた。

怜子は、ああ、と哀しげに声をあげると、

「……宗くん、先生を抱いて……こ、こうして待っているのよ……早く、して。して欲しいの」

すすり泣きながら怜子は言った。宗と大賀に犯されるたびに言わされる言葉だった。

「へへへ、して欲しいのか。よしよし」

宗は両手を怜子の腰にあてがうと、抱き込むようにして、おいかわさった。そのまま一気に押し入れる。

「う、ううッ……き、きついわッ」

怜子は顔をのけぞらせて、うめいた。宗は人並以上のたくましさだ。まるで張り裂けんばかりに、子壺まで突き上げてくる。

「へへへ、うしろから犯られるのもいいもんだろ。こいつらが見たがつてんだ、気分出さんだぜ、怜子先生」

宗はゆっくりと腰をゆすり出した。もう一ヶ月程も怜子をもてあそんできた自信だろうか、宗のいたぶりは執拗をきわめた。荒々しく子壺を突き上げ、こねくりまわしたかと思うと、じらすように動きを弱くする。

ブラウスの前も開けられ、形のいい乳房もわしづかみにされて、もみ込まれている。

「う、ううッ……宗くん……」

妖しい感情がうずきとなってこみあげてくるのを、追い散らすように怜子は顔をふりたた。だが、怜子のからだは宗を覚え込んでしまったかのように、反応し始めてしまう。

からだの芯がとろけ出し、ジーン、ジーンと快美のうずきからだ中がつつまれていく。

声をあげて泣きたくなる。頭の中がうつろになり、おぞましい行為を見られている事さえ忘れ始めていた。

「へへへ、どうだ、怜子先生。しめつけてきやがつて、そんなにいいのか」

宗に荒々しくゆさぶられ、突き上げられて、怜子はもう、わけもわからずガクガクとうなずいた。

もう、怜子はめくるめく恍惚の快美の中に翻弄されていた。

「あ、あうッ……あうッ、あああ……」

押えても押えきれない歎き声があがってしまふ。哀しい女の性である。怜子はあられもなく歎きながら、知らず知らずの内に、自分から宗を味わうような動きを示した。

「あ、ああ……あうッ、あうッ……気が変になりそうよ」

「へへへ、そんなにいいのか。どれ、もっとよくしてやるぜ」

ニヤニヤとながめていた大賀が、怜子の黒髪をつかんで、顔を上向かせた。大賀は灼熱のような固い肉をパンツからつかみ出すと、いきなり怜子の唇を割って押し込んだ。

「ううッ、うぐッ……ぐぐ……」

怜子は激しくせき込みながら、ガクガクと



からだをゆすった。もうどうしようもなく、絶頂へ向って暴走し始めた。

「へへへ、上と下をふさがれて、気持ちいいだろ。遠慮なく駄がっついていいんだぜ」

「ほれ、ほれッ……これでもか」

大賀と宗は、せせら笑いながら怜子を追いつけにかかった。

怜子はたちまち登りつめた。それを十数人の生徒達が、声もなくじっと見つめていた。

## 臀丘に浣腸器が

怜子は、宗と大賀にかわるがわる三度、犯された。もはや、声も出さずグツタリと身を投げ出し、放心状態だった。

「すげえな……まるで狂ったようだったぜ」

「上品な顔して、あんなに喜ぶとはよ……女つてのはわからねえな」

生々しいショーを見物していた生徒達は、まだ興奮がおさまらない様子で、怜子のからだをのぞいている。

「へへへ、どうだ。こんなショーは、ちよつと見れるもんじゃねえぜ」

大賀は、グツタリと身を投げ出している怜子の太腿の間を見せつけながら、自慢気に言

った。怜子の反応はない。ただ、激しかった余韻のように、女の媚肉をヒクヒクと痙攣させているだけだった。

「あと少し、金を出す気はねえか、へへへ、もっとすげえのを見せてやるぜ」

差し出す大賀の手に、たちまち金が集まる。すさまじい行為を見たあとだけに、生徒達の気持ちは昂ぶっている。帰る者などいるはずもなかった。

「何を見せてくれるんだ」

誰れかが、うわずった声で言った。

「へへへ、こいつさ」

宗が手にしたものは、ガラス製浣腸器だった。二百CC用のもので、すでにグリセリン液が、一杯に吸い上げられている。

大賀は怜子のからだをゴロッとうつぶせにひっくり返した。臀丘に指をくい込ませて、割り開く。淫らな顔という顔が、いっせいに群がり、のぞき込む。言うまでもなく、その視線は、怜子のアヌスに集中した。

「可愛いもんじゃねえか」

大賀はニヤツと笑うと、スツと怜子のアヌスに指先を触れさせた。ゆるゆると指先でもみ込む。ネットリとした粘膜が、指先に心地よい。まるで吸いつくようだ。

「う、ううッ……いや」

グツタリとしていた怜子が、うめき声をあげた。本能的に腰をよじろうとするが、大賀に押えつけられていては避けようもない。

からだ中の肉という肉が灼け、とろけた直後だけに、繊細なアヌスの神経は異常に敏感になっている。

「う、うむむ……かんにんして、そこは、そこはいや……」

まだ意識がはっきりしないのか、怜子はうわ言のような声をあげる。

「もうフックラとしてきやがった。尻の穴も敏感なんだな、怜子先生」

「い、いや……ねえ、そこはいや……」

「いやじゃねえよ。これから浣腸されるんだぜ、怜子先生、へへへ」

笑いながら、宗が身をのり出してきた。

大賀の指が引くと、宗はゆっくりと嘴管を怜子のアヌスに突き刺した。ぬうように深く貫く。

「ひいッ……何をしたのッ」

グツタリとした怜子が、弾かれたようにビクッと顔をあげた。冷たく硬質なものが、おぞましい排泄器官に押し入ってきたのである。それは、怜子がこれまでに経験したことのない

い、不気味な感触であった。

ふり返った怜子の瞳に、臀丘の谷間に突き立てられた不気味な浣腸器と、それをのぞき込む生徒達のいやらしい顔が写った。

「何を、何をしようというの……」

「浣腸してるんだよ、怜子先生」

「浣腸されて怜子先生がどうなるか……へへへ、そいつを見せるのよ」

大賀と宗は、へらへら笑って言った。

「そ、そんな……いや、いやアッ」

浣腸されると知って、怜子は全身を恐怖に凍りつかせた。

「カ、カンチョウだなんて……いや、いや、いやよ……」

怜子の声はもう、泣いている。浣腸でもてあそばれる事への嫌悪と狼狽、そして、もうどうにもならないというあきらめが入り混じった泣き声だった。

「いやでもやるさ、へへへ、浣腸ショーの金は、もうもらってんだからよ」

宗は、ゆっくりとポンプを押し始めた。

ああアッと怜子は戦慄の悲鳴をあげた。白いうなじが、思わずのけぞる。

「い、いやあ……いや、いやッ」

流れ込んでくるグリセリン液に、怜子は泣

き叫んだ。いいようのないおぞましさに、悪寒が何度も背筋を走る。

「入れないで、入れてはいやあ……ひッ、ひッ……」

怜子は黒髪をおどろにふりたくって、泣きじやくった。

その泣き声が、一層宗の欲情をそそのめるのか、宗はグイグイとポンプを押しした。

「ちくしょう、ふるえがきやがる」

宗の声はうわずっていた。

まわりも、眼ばかりギラギラと血走らせ、口をきくものはいない。あたりには、ムンムンと匂うような淫らな空気がたちこめて、熱いほどだ。

「ひッ……ひッ、かんにんしてッ」

「もう少しだよ、怜子先生。それ、百八十……百九十……二百」

宗は二百CC一滴残さず、ポンプを押し切った。嘴管を引き抜いた宗は、フウッと大きく息を吐いた。

「すげえな。全部入っちゃったぜ」

「浣腸するのはエロ本でしか見た事はねえ。実際に見るのは始めてだぜ。すげえもんだ」

「ちくしょう。俺なんかもらしちまったぜ」

ザワめきがあたりを支配した。ズボンの前

を押えているのが何人もいる。

「おもしれえのは、これからだぜ」

バケツを手に、大賀が言った。

「いやあ……」

怜子は戦慄した。バケツに排泄させて、観察する気なのだ。そんな姿を見せられるわけがなかった。

「お、おトイレに行かせてッ……お願い、おトイレに……」

起きあがろうとした怜子は、あわてて下半身を硬直させた。すさまじい勢いで、便意がかけ下ってきたのだ。生れて始めての浣腸に、グリセリン液のききめは強烈だった。

(ど、どうしよう……ああ、たすけてッ)

とてもトイレまではもたないと、怜子は思った。

怜子の顔が蒼ざめ、あぶら汗がにじみ出てきた。からだ中がブルブルとふるえ出す。

「あ、あううッ……おトイレに、行かせて」

「へへへ、怜子先生、これにやるんだ。皆んな先生がどんな風に出すか、見たがってるんだぜ」

大賀がバケツを押し出す。

「そんな……いや、いやッ。ひどいわ、そんなの、あんまりだわ」



「あんまりでもやるんだ。そのバケツによ  
う、フッフ」

宗は怜子を、子供におしっこをさせるよう  
にうしろから抱きあげると、バケツの上へ運  
んだ。

「いや、いやあ……ここでなんて、いやッ」

もう宗の手をふり払うことも出来ない。か  
らだを動かせば、今にもほとばしりそうなの  
だ。絶望感が、怜子をおそった。

「あ、あッ、ああ……だめッ」

怜子はアヌスの痙攣を自覚した。ふつくら  
と盛り上がってくる怜子のアヌスが、もう、  
限界の時を告げている。

「あ、ああッ……見ないで、見ないでッ」

「フッフ、じっくり見せてもらうぜ。見世物  
なんだからよ、怜子先生」

「あ、あ、あッ、だめッ……見ないでッ、ひ  
いッ……」

悲鳴が、号泣と共に怜子ののどから噴き上  
がった。怜子の崩壊の瞬間であった。

## 女教師・色やつれ

宗と大賀の欲望は、あきる事を知らなかつ  
た。二人は毎日のように、怜子のからだを求

めた。

おぞましいショーも、週に二度はおこなわ  
れた。そのおかげで、すっかり小づかいに不  
自由しなくなった二人である。今や怜子は、  
二人の欲望を充ててくれる肉の人形であるば  
かりか、大事な金づるでもあった。

あくことを知らぬ宗と大賀の欲望は、日が  
たつにつれて、刺激を求めるようになった。

放課後、怜子をもてあそぶだけではあきたら  
ず、朝の通勤電車の中でまで怜子にいたずら  
をしかけるほどになった。怜子が毎朝、五十  
分もかけて電車で通勤してくる事に眼をつけ、  
わざわざ駅まで来て、待っているのだ。

朝のラッシュは、すさまじい混雑である。

宗と大賀は、怜子をはさむようにして、電車  
に乗り込んだ。

「プリーツスカートとは気がきいてるじゃね  
えか。まくりやすいぜ、フッフ」

大賀が怜子の耳元でささやくと、すぐにス  
カートの中へ手を入れてくる。うしろからは、  
宗の手が入ってくる。

始めは腰をよじって逃げようとした怜子も、  
今ではされるがままだった。走り去る外の景  
色を見る怜子の顔が、やつれて哀しげだ。ゾ  
クツとさせられる妖しい美しさだった。

大賀の手が怜子の太腿を這いあがって、下  
腹をとらえた。あるべき茂みをすっかり剃ら  
れた恥丘を撫でまわす。

「怜子先生、アンヨを開きな」

怜子は黙って両脚を開いた。

スツと女の肉の合わせ目に、大賀の指がす  
べり込んでくる。大賀はゆるゆると指先でま  
さぐった。蓄をさぐりあてて、指先でいびる。  
「う、うッ……」

怜子は思わず声をあげそうになって、必死  
に唇をかみしめた。怜子の美しさに魅せられ  
たように見つめてくる乗客が何人もいる。気  
づかれまいと、怜子は必死に冷静さをよそお  
った。

「感じるのかい、怜子先生」

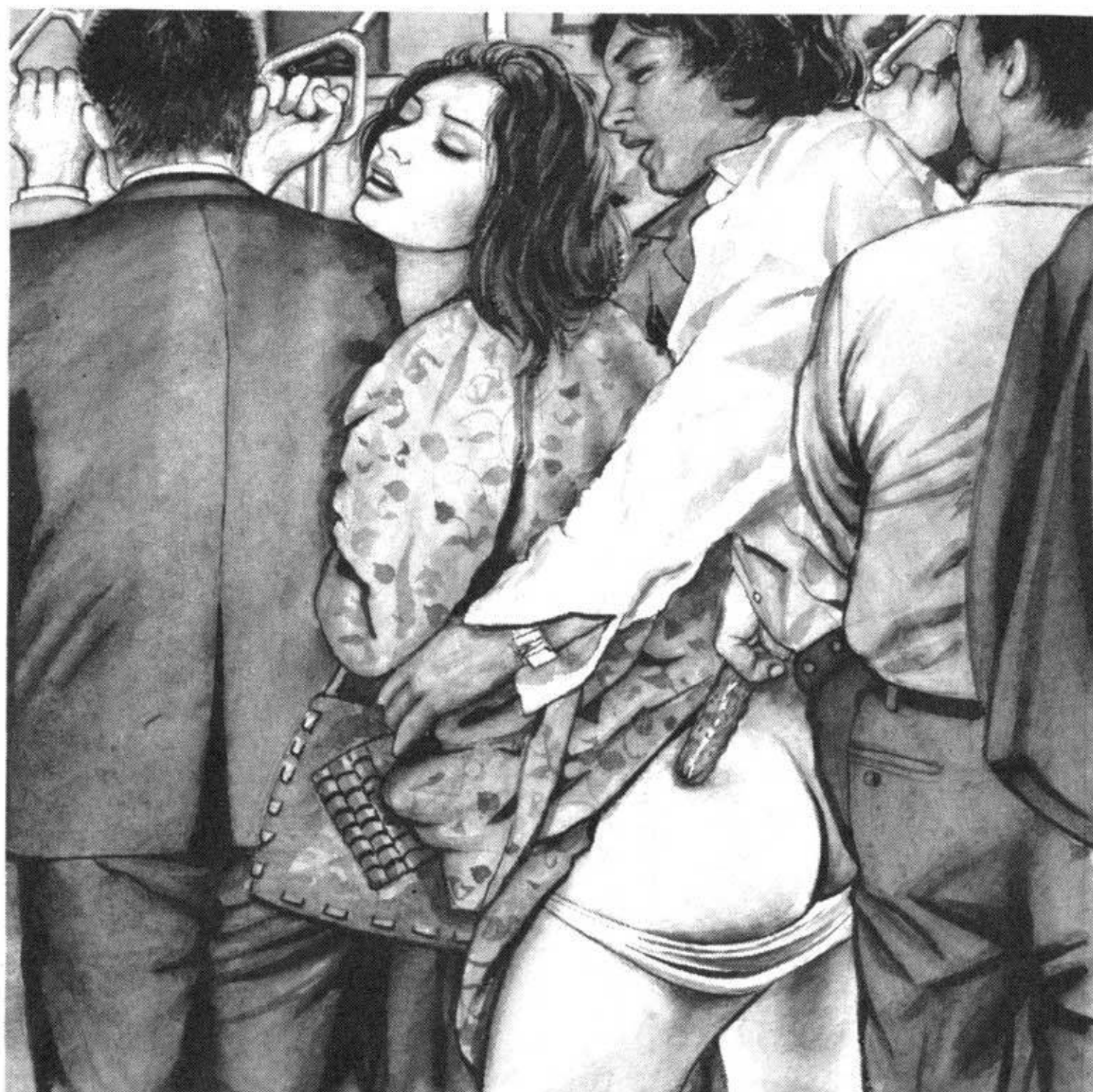
大賀は意地悪くささやいた。早くも、怜子  
は熱いうるおいをみなぎらせ始めたのだ。

宗も双臀を撫でまわしていた手を、怜子の  
臀丘の谷間へすべり込ませ、アヌスをとらえ  
た。ジワジワともみ込みながら、指先を突き  
立てる。

「指を入れてやるから、尻の穴をゆるめな、  
怜子先生」

「か、かんにんして……」

怜子は消え入るような声で言った。気づか



れないとは言え、他の乗客がいる中で翻られる羞かしさに、生きた心地がしない。

「こんな所で、尻の穴に指を入れられる気分はどうだい、フッフ」

宗はゆっくりと、ぬうように貫いていった。指の根元まで埋め込む。

「俺の方も入れてやるぜ。ただし、指は二本だ、怜子先生」

宗に呼応するように、大賀も指を二本、怜子の女の最奥へ沈めた。

ジットリと熱い秘奥を、肉襞をまさぐるように、大賀は指でかいた。ヌルヌルとした肉襞が反応を見せる。

「フッフ、しめつけてきやがる。その上、からみつくように蠢めいて……こんな所だったのによう」

「俺の方もだぜ、フッフ、まるで指がくいちぎられそうだ。まったくしまりのいい尻の穴をしてやがる」

大賀と宗の指が、怜子の中で皮膜をへだてて接触しあう。

「う、ううッ……もう、しないで、も、もう……お願い」

それ以上されたら我慢できなくなるとばかり、怜子は訴えた。今にもベソをかかんばかり、



りの顔を、必死に唇をかみしめて耐えているのだ。

大賀と宗は、おもしろがって指先で淫らにまさぐり続ける。もう十分近くも、そうやっていたぶっているのだ。

あふれ出た果汁が、ツと怜子の太腿をたたった。やがて、もう押えがきかなくなつたように、怜子は腰をうねらせ出した。

「そんなに腰をふると気づかれるぜ」

「だ、だって……」

怜子はあえぐように言った。美しい頬が、ピンクに染まり、瞳は切なげに二人を見る。

「フフフ、よしよし、今に太いのをごちそうしてやるぜ」

大賀の指がスツとしりぞいた。

電車が停まり、更に多くの人が乗り込んできた瞬間を狙って、大賀はポケットにしのばせていたものを、一気に押し込んだ。

「あ、あうッ……」

たまらず、怜子是从だをのけぞらせると、うめき声をあげた。だが、他の乗客には押されて声をあげたとか映らない。

「何を入れられたかわかるかい、へへへ、太いからいいだろ」

怜子にはわかるはずもない。

「サラミ・ソーセージの太いのだぜ、怜子先生。油がきいて、うまいぜ」

大賀は怜子の耳元でせせら笑った。

押し入れた指で、怜子のアヌスをこねるように馴染っていた宗がニヤツと笑った。

「俺の方も、尻の穴にもっといいものを入れてやるぜ、フフフ」

指にかわって、細く硬質なものが押し入ってきた。ペコツと音がして、冷たい液体が流れ込んでくる。

「あッ……」

思わず怜子の唇が開いた。

（イチジク浣腸……）

聞かれなくても、怜子にはわかった。忘れ

たくとも、決して忘れられないおぞましい感触である。

「そ、それだけは、かんにんして……」

「駄目だ、フフフ」

宗は冷たく言った。怜子に一度、腸して

からと言うものの、すっかり浣腸にとりつかれている宗である。今日もポケットに五個のイチジク浣腸を用意してきているのだ。

イチジク浣腸は押しつぶされると、引き抜かれて床にすてられた。すぐに二個目が押し込まれた。

「う、うううッ……」

怜子は歯をくいしばって耐えた。もう、一人では立っていられず、宗と大賀にすがるように寄りかかっている。

「へへへ、浣腸されながら、サラミを味わえるなんて、怜子先生も幸福だぜ」

大賀は、ゆっくりと埋め込んだサラミ・ソーセージをあやつり始めた。

チュルツと流れ込んでくるグリセリン液と、容赦なくえぐってくるサラミ・ソーセージの快美のうずきと……怜子はもう、耐えきれず、大賀の胸に顔をうなだれて、むせび泣いた。

宗が四個目のイチジク浣腸を押し込んだ、その時だった。

「何をしてるんだ、君達はッ」

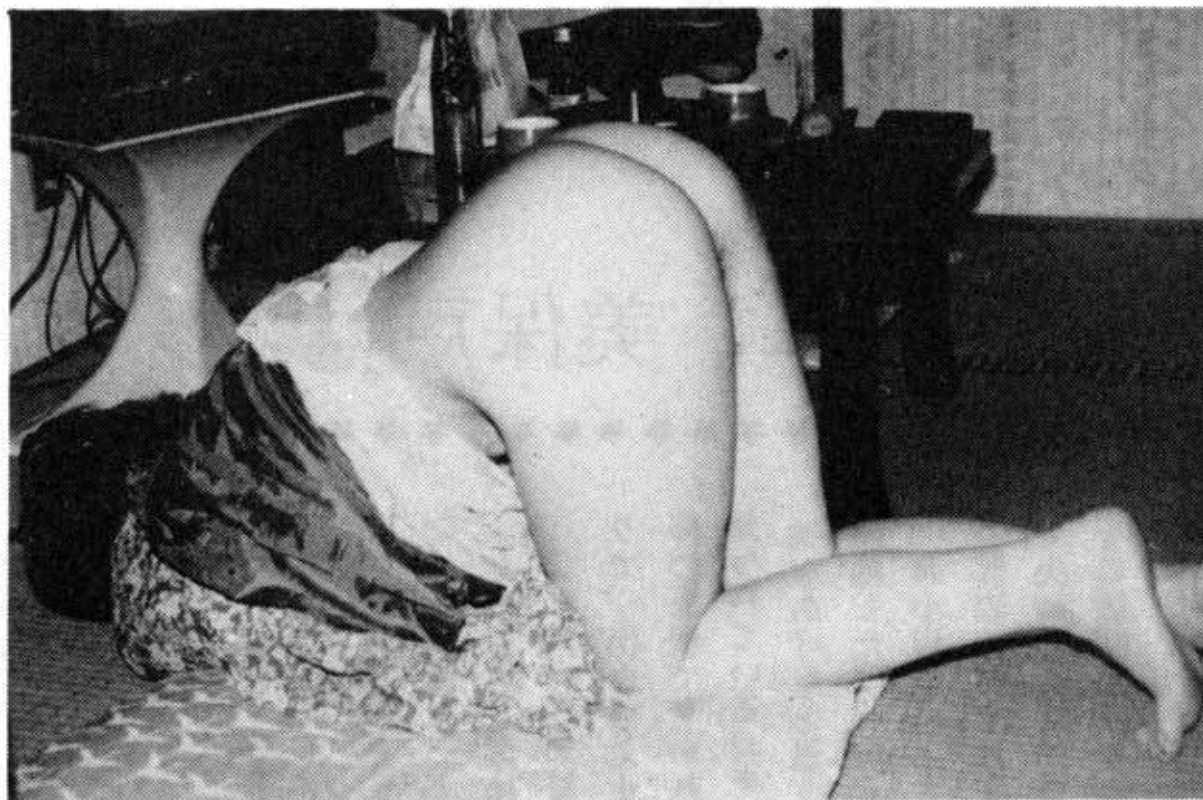
がっしりとした体格の男が二人、宗と大賀の手首をつかんだのである。

「私達は、鉄道公安官だ。痴漢行為で君達を逮捕する」

高らかに声が響きわたった。

私を飼育してください！

# 願 志 妾 縄

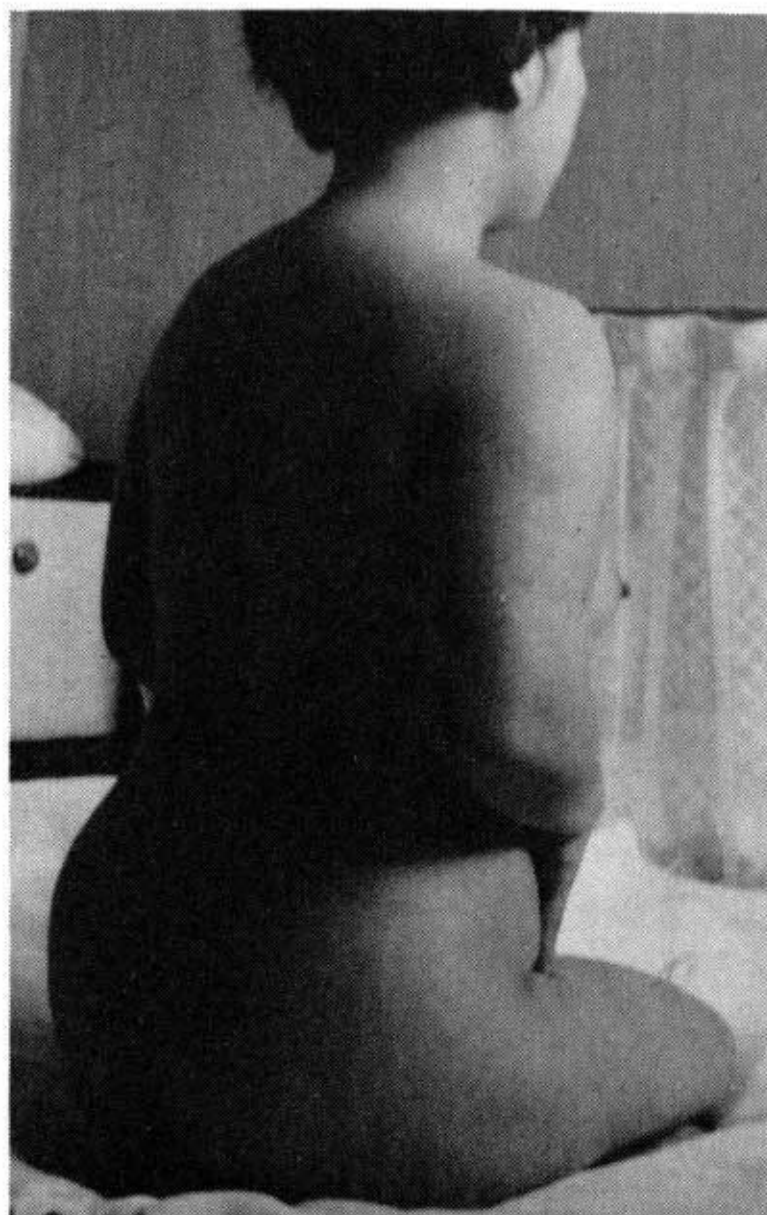


私たちはSMに興味がある人妻です！  
○もちろん主人に公認で  
す。大きなお尻をお見せ  
してごめんなさい。でも  
魅力があると思うんです  
けど……。S、  
一五九センチ、  
B八〇センチ、  
W六十六センチ

チ、H九十一センチ、  
主人に他の男性とSM  
プレイをしてみろと、  
言われました。中年男  
性からのお手紙お待ち  
します。  
(No.1・圭子・31才)

飼育希望者のお手紙を回送しま  
す。回送するお手紙は密封し、封  
筒のオモテに希望する女性の番号  
を鉛筆で記入。60円切手同封。  
〈宛先〉風俗資料保存会編集部

ください。私は男性二人に羞恥責めさ  
れたり、剃毛観賞、レズ責めなどが好  
きです。S一五〇センチ、B九十一セ  
ンチ、W七十五センチ、H一〇二セン  
チ、太めの淫熟妻です。よろしくね！  
(No.2・八重・38才)





地下本発掘 第3回

# 生人形地獄

高貴な生れながら女衝に身をもちく  
ずした竜二郎は可愛がってくれる男爵  
邸で不義を働いたお小夜を責檻する所  
に来合せ、美肉のご相伴にあずかるが  
未通娘を失神させてしまうほどだった

美保戸 実彦



破瓜のあ  
とさらな  
る痛苦

あぐらの上に女を向う向きに乗せ上げて、  
うしろから貫き、しかもその先端を子壺にま  
でとどかせるというのは、よほど長大な逸物  
の持ち主でないといけない芸当である。

それを竜二郎は楽々とやってのけた。

ついさつき男爵の巨根で破瓜をとげたばかりで、出血さえ止まらない体をふたたび竜二郎の巨根で貫かれたお小夜は、激痛と恋人に見られているおそろしさで、ひと声高く悲鳴をあげたと思うと、細頸をガックリ折って悶絶した。

「お小夜さん……」

檻の中の寺田は鉄格子を掴んだまま、自分も失神したかのようにズルズルと体を崩した。その膝間だけを屹立させているのが滑稽だ。

竜二郎はそんな寺田の眼に、お小夜の顔を曝し上げた。

「どうだい、寺田くん、いい顔しているじゃないかね」

あぶら汗と涙に濡れた頬からはつれ毛を梳き上げ、いとしげに撫でてやった。細面ではないのかもほっそりと華奢な造りのお小夜は、

サジストにとってはこよない玩具だ。竜二郎は片手でまだ硬い乳ぶさをいじりつつ、片手で力なく喘いでいる朱唇を指でなぞったりした。

悶絶していながらも体の奥深くまで達する激痛を感じるのだろう。毛むくじらのあぐらで無理やりこじ開けられたお小夜の雪のような内腿が、ヒリヒリ痺る。股の付け根は筋をピンと浮き立たせて、あるかなきかの縮毛をフルフルおののかせている。そしてその中心に開いた秘肉は血にまみれつつ凶器を根まで咥え込まされて喘いでいる。ちょっと身動きしてもきしみを発しそうな無残な嵌まりようである。

竜二郎はぐらぐらするようなじを吸いつつ、両手を膝間に下げ、纖毛を掻き上げて剥き出しのさまを寺田の眼に曝して見せた。柔肉をさらにくつろげて、突起した核をさらに曝し、菜を剥き上げて赤い感覚のかたまりを根まであらわにした。

「これが女の悦びのみなもとだよ。わかるかね、寺田くん。このちっちゃなお××をこういじってやると……」

お小夜は頭をなよなよゆすって、小さく呻きをあげた。





「わかるだろう。そうきつくいいじっちゃい  
かん。こう、そつと円を描くように撫でてやる。  
根元をくすぐるようにする。舌を使うともつ  
といいんだがね」

さつき塗られた薬の痺れがまだ効いている  
のだろう。ふくれるだけふくれたそれは、竜  
二郎の巧みないたぶりに、そこだけ別な生き  
ものであるかのようにビクビクうごめき、そ  
れにつれて男を啞えた肉壁がよじれるような  
動きを見せる。

「ああッ」

失神していたお小夜が声をあげて、大きく  
腰を悶えさせた。

「眼覚まし時計の押しボタン代りにもなる、  
というわけだ」

ぼうとかすんだ瞳をしたお小夜は、自  
分の置かれた状態に気付いて、ヒッと息を呑  
んだが、激しくあらがうには気力が萎え過ぎ  
ていた。恋しい男からできるだけ顔をそむけ  
てシクシク泣き出した。

「もうあまり痛くないだろう？」

竜二郎はうなじを吸い、乳首と核を優しく  
いじりながら問いかけた。女がこんなかぼそ  
い泣き声をあげたのは屈服の前兆だ。すっ  
かり身を男にゆだねる気持ちのあらわれだ。

女体がいやおうなしに反応しはじめるのはそ  
れからのことである。天狗楼で女郎の調教も  
やる竜二郎にはよくわかる。

「男爵、その酒をお小夜坊に飲ませてやっ  
てくれませんか。それからさっきの姫泣きク  
リームをもう一度」

「二度目で気をやらせようというんかね」  
「まあ見ていてください。天狗楼のやり方を  
ご披露しますよ。うまくいったらおなぐさみ  
つてとこです」

女の調教の極意は「飴と鞭」、その味を知  
った女は男の云いなりになる、と竜二郎は笑  
うのだ。

男爵は黒い陶器の瓶に入ったえたいの知れ  
ない酒を口に含んで、口うつしにお小夜に飲  
ませた。この淫薬も龍二郎が男爵にプレゼン  
トしたものだ。

「この前連れ込んだ大蔵省の役人の女房には  
よく効いたが、こんな小娘にも効くかな」

「小娘だから効くんじゃないですか」

男爵はまた口飲ませた。お小夜は小さく呻  
くばかりでなすがままになっている。

「それからそのクリームをお××ちゃんにタ  
ップリ」

男爵はそこにしゃがんでガラスの小瓶から

筆ですくい上げたものを、剥き上げられた瑪  
瑙色の小粒に塗りつけた。筆先で敏感なしこ  
りを根からくすぐりたてるように塗るのだ。  
たちまちお小夜は身ぶるいを起こして、ヒイ  
と喉を絞りたてた。

「こら、じつとせんか」

叱りつけながら、男爵は面白がって筆先で  
しこりをクリクリいじりまわす。

「ついでにひらひら肉のところにも塗っても  
らいましょうか」

「それにしても、よく裂けもせずにお前の大  
きいやつを啞え込んでいるなあ」

「あなたが道をつけたんですよ、男爵」



抽送を求  
める熱い  
肉の狭間

肉芳にクリームを塗りつけられたときから、  
お小夜は泣き声を上ずらせ腰をゆすりだして  
いた。たまらないうずきが、その小さな一点  
から衝き上がってくるのだ。

「どうした、お小夜坊」

竜二郎は両手で乳房を優しく揉みながら頬  
をすりつけた。その頬をすり返すように後ろ  
手の体を竜二郎の胸にすりつけながら、お小  
夜は鼻声を出し続ける。

「お小夜さんッ」

寺田が檻の中から悲痛な声を発した。一緒に死のうとまで思いつめた女が他の男に貫かれたまま鼻を鳴らし腰をゆすっている図は、この世のものとも思えない。そのくせ若い肉体は揉み抜かれるような欲望に領かされて、股間が反り返るのをどうしようもないのだ。

お小夜は恋人に見られているつらさに泣きながら、どうこうえようもないうずきに衝き上げられて喘ぎ悶える。飲まされた酒が腹の底から全身をカアッと火照らせ、肉をドロドロに溶かしてゆく。ちっちゃな豆が躍りださんばかりにうずく。裂けんばかりの疼痛が、いつしか痺れるようなむずがゆさになって、動きを求めていた。

「どうかして、下さいましッ」

遂にお小夜は羞ずかしい言葉を口にした。

「どこをどうして欲しいんだね、お小夜ちゃん」

竜二郎はあい変らず乳ぶさを優しく撫でさすり、うなじに口を這わせるだけで、つながった腰はさっきからピクリとも動かさないでいる。動かさないままに、自分をキッチリ締めつけている肉がねっとりしたものを吐き出しつつ、じょじょにうごめき悶えだすのを味

わっている。これはよほど修業を積んだ男ではじめてできることだ。

「もう痛くはないんだね？」

お小夜はもどかしげにうなづいてみせた。「じゃ、どうして欲しいのか、はつきり言ってごらん」

じつと動かさずに乳首を揉むだけにしていて、自分を啜えた肉がますます熱くとりけうごめきひくつきだすのがはつきり感じ取れる。お小夜は後ろ手にくくし上げられた華奢な肩をつらそうにゆすって腰をもじつかせだした。まだ自分から腰を使うということを知らないので、ただ体の奥に拡がる気も遠くなるようなむず痒ゆさをしずめるだけの身動きた。それが可愛い。

それでも竜二郎はじつとしていた。

「ああ、竜二郎さま……」

声をうわずらせつつ、後頭部を竜二郎の肩に載せるようにして反り返り、濃く匂い出した黒髪をこすりつけ、熱っぽく鼻声を出してきた。

「もつといい気持ちにしてほしいんだね？」  
汗ばんだ全身をボウと羞じらいに染め上げながら、消え入るようにうなづいて見せた。「どこをさわってやったら気持ちいいのかな」

「……そんな……はずかしい……」

いまにも泣き出さんばかりだ。息づかいを切迫させている。竜二郎をくるみ込んだ肉はますます熱く、トロトロとたぎるものを吐き出しつつ、もどかしげにうごめいて抽送を求め始めている。

「ここかね」

「あ」

剥き出しに反り返ったしこりをチョンと小突かれて、お小夜はグンとなり上った。

「そ、そこを……」

「ここはお××というんだよ。お小夜のお××をいじって下さい、と言いな」

「はずかしい……」

お小夜は真っ赤になって激しくかぶりを振った。

貞淑な人妻が姦通の罪におびえつつ肉欲に溺れてゆくのもいいが、こうやっておぼこが死ぬほど羞ずかしがりながら、淫欲の眼をさまされていくのも、こたえられない。竜二郎の脳裏には遠からず男爵と自分の手に落ちる加賀見子爵家の令嬢百合子姫の面影がチラついた。かの百合子姫を犯る時こそ、小間使風情を犯るのは雲泥の違いの快楽が得られるに違いない。



「……小夜のお××を……いじって、くださいまし……」

遂に羞ずかしい言葉を口にしたお小夜は、かばそいうなじまで朱に染め上げて、ああと顔を振りたてた。

寺田が鉄格子を引っ掴んで、口惜しさに呻き、唇をバリバリ噛みしぱりつつ身悶えた。

あれほど愛を誓い合ったお小夜が、鼻の先に自分を凌辱した男に愛撫をねだっているのだ。

竜二郎はお小夜の首をこちらに捻じ向けるようにして口を重ねた。いざなわれるとおずおずと甘いつばきをためた舌をからめてきた。それを吸い上げしゃぶりまわしながら、竜二郎はコリコリ充血しきった瑪瑙の小粒を、ゆっくりらつてやった。鼻息を熱っぽく乱し呻きをくぐもらして、お小夜は腰をゆすりだした。竜二郎を啞えた秘肉が戸口と奥でヒリヒリ収縮して、もつとせがむようだ。先端にスッポリかぶさっている子壺のまるく硬い口がぐつと下って、熱いほとばしりを受け入れようと待ち構える。

「ああ……たまらない……どうにかなってしまします……」

よがり啼きにむせびながら、お小夜はああ

ッ、ああと腰をゆすりたて、もはや恋人の存在など忘れ果てたていた。寺田の眼もまた恨みを忘れて欲望に飛び出さんばかりになつて、竜二郎の指でそり立てられる真っ赤な肉のしこりと、剛直をしっかと啞えてうごめきつつ、ジクジク肉汁をにじみ出させている秘肉を見つめている。

「男爵、お小夜坊の口を試しちゃどうです」

竜二郎はようやく腰を衝き上げだしながら誘った。

「寺田くん、上も下もお小夜坊の穴がふさがつて、きみを容れる所がないのが残念だ。せめて見物しながらせんずりでもかきたまえ。遠慮はいらん。想いのたけを可愛いお小夜ちゃんの腹に引っかけるがいい」

ガウンをかなぐり捨てた男爵が、葉巻を横啞えにしたまま、お小夜の髪を両手に掴み、いまや喘ぎと呻きに開きっぱなしの口を、いっきに埋めた。お小夜の瞳が恐怖と狼狽にっり上った。

「ご主人のものを丁寧に舐め申すんだよ」

「う……うぐ、ぐ……」

「舌で先を舐めろ」

男爵は掴んだ髪を前後にゆすりつつ、白眼を剥わんばかりにのけぞったお小夜のゆが

み切った表情を心地よげに見降ろしている。

寺田は狂気したような眼つきになって、おのがおえ返ったものを擦り出した。真っ赤に充血したそれはテラテラと光って、鈴からはや先りをねっとり溢れさせている。

「面白くなってきたぜ」

竜二郎はお小夜のいまは身も世もなく振りたてる腰をぐつと抱き込んで、本格的に腰をゆすり上げだした。

「う、うふ……ぐ……」

喉まで男爵の野太いやつを突っ込まれ扶りたてられて、お小夜の顔は真っ赤にふくれ上ったようになり、頬が奇妙なうちに内側から突き上げられたりくぼんだりする。そのたびに泡を噴く口から淫らな音がたつた。

音を立てているのは上の口ばかりではなく、いまや窮屈ながら肉汁ですべりのよくなった下の口も、竜二郎の太いものを楽々と出し入れさせて、卑猥な音をはばかりなく立てている。「男爵、口の中で爆ぜるのは後まわしにして、お小夜坊が生れてはじめてあげるよがり声を聞きませんか」

「うん」

色事にかけては竜二郎に一步をゆずる男爵は、お小夜のつばきで磨きをかけられた凶器





をガウンにおさめた。

飲まされた淫酒のまわり切ったお小夜は、内から火照りを噴き上げる体を外から巧みにあおりたてられて、うつないさまにやがり泣き狂っている。舌足らずの悲鳴をあげたわと思うと舌を噛まんばかりに呻く。切羽つまった喘ぎに汗まみれの腹をふいごのように波打たせつつ反り返る。

「もういきそうかい」

がらがらとうなづき返し、その気になつて腰を竜二郎の動きに合わせだした。

「こいつは覚えが早いや。それなら本茶白といくか」

竜二郎はつながったままお小夜の向きを変えて向き合う格好になった。

「ヒイ……」

さつきよりはるかにきつく深く貫かれて、お小夜は喉を絞らたてた。まるで子壺の中にまで先端がもぐり込んで来そうなあんばいなのだ。そのおそろしさ、魂まで消し飛ぶばかりの気持ちよさ、戸口の肉がギュッと締め、絞りたてるようなうごめきがさざ波のように生じ、硬いものをそうして啞えている悦びに胴ふるいしつ、あからさまなよがり声を噴き上げた。

男爵が竜二郎の腰の両側に投げ出されているお小夜の下肢を、しっかりとその腰にからめさせた。竜二郎がお小夜の尻に両手をかけてグイと引き込んだ。

「ああッ……もう、もうッ……」

「牛みたいに鳴いてばかりいないで、いきますと言うんだよ」

竜二郎も汗をかいて腰を衝き上げた。衝き上げながらも女術の冷静さで、お小夜のその時の秘肉のうごめき締め方方を測っている。

(極上の玉だな)

この美貌、このおとなしやかさ、そしてこの体の構造、天狗楼で突き出せば、即日大夫の値がつくことだろう。男爵がなぶり抜いて飽きたら払い下げてもらうか……

「あ、変になります……」

「それがいくつてことなんだよ」

寺田はお小夜の真っ白な尻が啞えた肉柱のまわりにうごめき悶えつつ締めつけているのを見て、白熱に総身を貫かれ、けものの叫びをあげて爆ぜた。ビビッと激しく噴出した白濁は、いま気をやろうと狂おしく躍るお小夜の尻に見事に命中した。

「そら、寺田くんがお小夜ちゃんのよがりように感激して、一足先に昇天したぞ」

「いやあッ」

叫ぶのと、達するのと同時だった。

「いきますッ……あれ、いくッ……」

グッとそぐように両手をくくし上げられた背すじを反り返し、尻たばをキリキリよじりつつ、大きくのけぞった。同時に竜二郎をしつかと啞え込んだ肉が激しく収縮痙攣した。

(こいつは、すごい)

竜二郎も、かばそいお小夜の体を折れんばかりに抱きしめて、爆ぜた。

「ヒイ」

子壺にじかにプチ込まれる灼けるような感覚に、お小夜は白眼を剥いて痙攣しつつ、失神した。



獲物をつ  
れて妓楼  
に帰る男

その日の夕景に、竜二郎は警察から受け出した乞食の娘を連れて天狗楼に帰って来た。天狗楼は新宿がまだ内藤新宿という宿場街だった頃から続いている古い妓楼で、震災にも壊れずに、幕末以来の古びた、それだけにガッシリした骨組みの建物を狭い旧街道に面して据えている。

震災後の新宿は山の手の顔らしい観楽街へ

の発展で沸き返っていた。古いものは震災を期にドシドシたたきつぶされ、代って薄っぺらでケバケバしいものがドッと建ち並んだ。バー、カフェーのたぐいが軒をつらね、砂ぼこりの舞う中に蓄音器がガナリたて、耳かくしにボブヘアの女たちが白いエブロン姿で客を引く。大道易者に屋百店、一枚の電気ブランに千鳥足の安サラーリマンが立小便する電柱に、失業者大会のビラが真っ赤な文字をななめに呼びかけている。

そんな喧騒の中であつて、旧街道に取り残された遊廊だけは、古びた暖簾を掛け連ねて、たじろぎもせぬ落ち着いた顔を見せている。

カフェーではやり歌をどなり散らしていた遊客も、この一廊に足を踏み入れたとたんに、静かになる。ここは女と寝るだけの街、応分の金を出して女を買い、二人だけの密室にこもりさえすればよい。虚勢を張ってどなり散らすことはいらない。そんな男たちの暗い欲望がしみついたようにどの娼家の軒も暗く重く、その暗く垂れこめた格子の奥に棲まされる女たちの運命は、さらに暗い。

裏口から入った竜二郎は土間で働いている女中に乞食の娘を風呂に入れることを命じておいて、表の帳場に行った。

「やあ、いい所へ帰って来なすった」  
長大鉢の向うから主人の金蔵が緒ら顔を上げた。

金蔵は年の頃五十あまり、いかにも女の生血を吸ってここまで来たという感じが、猪首や禿げ上った額のおぶらびかりに出ている男である。

これが竜二郎の祖父にお世話になったとかで、勘当になった竜二郎を引き取り、実の息子のように可愛がっている。もっとも竜二郎が連れてくる女は飛び切りの上玉ばかりだから、その方の勘定も計算に入っているには違いないが。

「どうしたね」

二重廻しを着たまま向き合つてあぐらになりながら、竜二郎は茶盆に伏せてある茶碗を取つて板の上に置いた。

「染香が足抜けをやらかしましてね」

一升瓶から茶碗に酒を注ぎながら、金蔵は言った。

「看板女郎の染香がねえ。それにしちゃ落ちて着いているじゃないか」

グビとひと口すすりながら。竜二郎は上眼使いに金蔵を見た。

「なに、すぐふんづかまえましたから」

「おれはまた、すぐに後釜を頼むと言うのかと思つたよ。もっとも、頼まれなくとも、後釜によさそうなのを一匹連れてはきたがね」  
竜二郎は飲みほした茶碗をカタリと猫板に置いた。金蔵が心得て注ぐ。

「あい変らずですな。その娘どこにいます?」  
「ちょいときたねえんで風呂を使わせているよ。で、このわたしに用あげだったのは?」

「染香をどうしたものかと思つてね。いま土蔵へ押し込めてあるんだが、実は今夜例のご隠居が遊びにいらっしゃることになっているんで。あの体のまま出していいものかどうか……実は若い者がだいぶいためたもんで……」

「いいじゃないか。腰が使えない体にしたわけでもないんだらう」

「それは看板ですし商売もんですから」

「生傷をいっばいつけた女つてのはいいもんだぜ。おれだつてあの染香のそんな体だったら食指が動くな」

「しかし、ご隠居は古い方でしょう。女郎にも作法があるとかねがねおっしゃっている方だし……」

「なに、いっそ縄付きのまま突き出すがいい。いっそう悦んでもらえるぜ。かえつて萎えたのが元気づいたりしてさ」





「いつものエログロですわい」

金蔵はちょっといやな顔をした。老舗の暖簾にかかわるというのだろう。しかし、いくら痩せ我慢をしても、最近の不景気とカフェーの隆盛とで、客足が落ちていることは否定できないのだ。

「いつも言っているじゃねえか」と竜二郎は酒も手伝ってペランメエ口調になった。「このダダッピロい家の奥座敷にちょっと手を入れて、エロショーを興行するんだよ。それも変態エロショーってのがいいな。浅草の奥山でちょいと見たことがあるがね。このおれに演出を任してくれりゃ、なあに、それに負けないのを出して見せるよ。客はこっちの上客とその紹介者に限ることにする。会員制にして会費は三十円から四十円」

「四十円」金蔵は眼を剥いた。大学出の初任給が七十円にも満たず、その大学出さえあぶれる時代である。

「なあに、今の世の中は成金と貧乏人だけで、中間てものがねえ。月給取りも家があるというだけでルンペン同様の生活だ。アナボルがはびこるのも無理のねえ世の中さ」

「アナボルと言えば、この間むこうの金波楼じゃアナボルの男に入れあげた女が足抜けし

て……」

「そうだろう。しかしちとらそんな貧乏人相手じゃおまんまが食っていけねえ。となりや成金を相手にするしかねえってわけよ。成金てのは、金を使いたくてウズウズしている連中なんだ。そこでだ……」

「わかりましたよ」

そろそろ店がたてこむ時刻にまくしたてられて、金蔵は手で竜二郎の話の腰を折った。

「なんとかショーのことはいずれゆっくり相談することにして、さし当り、染香のこと、あんたの言うとおりでいいですか。わしはあんたほどハイカラじゃないから、どうも心配なんだが」

「なんなら、このわたしが女の手のうちをご隠居に披露してやろうか」

「そう願えれば御の字だが……」

「それで文句を言うようだったら、おれが連れて来た娘の水揚げを持ち出しやいい。あの爺さん水揚げ好きだろう」

「じゃ頼みますか。ご隠居と竜さんは案外ウマが合う方だし」

「女術てのは誰とでもウマがあうものなのさ」

竜二郎はほんのり赤らんだ顔でニヤリと笑った。実際、男爵邸では世をすねた貴公子然

としていた竜二郎が、ここへ来てからは手だれの女たらしの顔になり切っている。

「どれ、染香の顔でも見てくるか」

まだ気がかりな様子の金蔵を後に残して、竜二郎は立ち上った。



足抜け女  
郎を責檻  
するの図

台所で石油ランプを借りた竜二郎は、小さな庭を横切って土蔵に入った。二階に上ると剥き出しの太い梁に染香はブラ下げられたままになつていた。爪先立った素足の足元には、長襦袢と赤と腰巻が細紐と一緒にのたくっており、傍の壁には若い者が代りに使ったらしい青竹がささくれて立てかけてあった。

生まれたままの丸裸で後ろ手にいましめられた体を梁からつられた染香は、ランプの光に、鬚の形も見定めがたいほど崩れた髪をもたげて竜二郎を見たが、また重たげに頭を折った。

(なかなかいける無残絵じゃねえか)

竜二郎はランプを高くかかげて、しばし見入った。

どす黒い縄で上下をくびられた乳ぶさ、剥き出しの腹、ひたと閉じ合わせた太腿の付け



根にけむる恥毛。その乳ぶさにも腹にも太腿にも赤紫色の痕が縦横に走り、ある部分は赤黒く凝結した血をこびりつかせている。肌が剥き卵のように白いので、それらの傷がよけいいいたいたしくなまなましく、男のどす黒い欲望をそそるようだ。それがたえだえの息の下に、しどろな黒髪をゆらめわせ、つられた体を力なく喘がせているところは、まがましい夢の世界を見るようでもある。

竜二郎はランプを棚の上に置くと、染香のあごをグイとしゃくり上げて覗き込んだ。ほつれ毛を啞えた唇の端から血の糸を垂らした貌は、山出しの女郎の平べったい眼ではなく、くつきりとした輪郭を描いて、さすが天狗楼の看板女郎の名に恥じない。

切れ長の眸がふともたげられて、光の弱まった瞳が竜二郎を見上げた。その面影が誰かに似ていた。

(誰かな?)

染香とは顔なじみなのだが、これまで一度もそんな印象を抱いたことはなかった。責められて困憊し切った表情、そんな状態にありながら瞳の底にキラリと光るものを宿している表情――それが竜二郎の記憶の底に眠る誰かの面影を浮かび出させたのかもしれない。

「どうして足抜けなどくわだてた？」

竜二郎は吸い込まれるように覗き込みながら、訊くともなしに訊いた。

「世間へ出たところで、さして違いはねえのに」

同情の響きに、染香は緊張をほぐして瞳を伏せた。竜二郎もあごにかけていた指を離した。

「今夜例のご隠居が来るそうだ。むろんお前を名指しでだ」

竜二郎はつり縄をゆるめてまともに立てるようにしてやりながら、言った。

「こんな体では、とてもお勤めなどは……」

「そうもいくめえ。こんなおめえの体を、案外ご隠居は悦びなさるかもしれねえ。無残絵というやつだ。」

「こ、このままの格好で？」

染香は困惑と狼狽をあらわにした。女郎にもそれなりの誇りはある。素っ裸に縄掛けされた姿で客の前に曳き出されるのは、女郎としてさえ耐えがたいことなのだ。

「ま、腰巻ぐらい着けさせてやってもいいかな」

「おゆるし下さいまし……縄さえほどこいていただければ、身づくろいして立派にお勤めい

たますから」

「しかし、その打ち身の傷は隠せめえ。縄付き姿の方がその傷にふさわしいのよ。さてご隠居が惚れて通う可愛い染香がこんな姿で引き出されるのを見て、どんな顔をしなさるか」男なら、いくら古くても文句は言うまいという自信がある。こうして眺めているだけでもムラムラしてくるのだ。

竜二郎は忍ぶような嗚咽を洩らしはじめた。染香の裸身に、つと寄った。二重廻しの袖をうしろにはねのけて、乳ぶさと腰に触れた。

「……おゆるし……」

「世の中には、こんなにして縛り上げられた女を黽って悦ぶ男もいる。そして、そうやって黽られて悦ぶ女だっている」

「いやでございます」

染香はなよなよと身を揉んだ。

「染香は、若い衆に責められたためつけられて、股を濡らすということはなかったかな？」

「あ……おやめ下さいましッ」

尻から手をさし込まれたようになって、染香は悲鳴をあげた。

「おれならただ泣きわめかせるだけではなしに、悦ばせてやることもできるのだから。もっともそれじゃ折檻にはならんが」

その時蔵の扉がガラガラと大きな音を立てて開いた。

「竜二郎さま、子供の用意ができましたでございませうが」

「おお、すぐ行く」

染香の絞り出すあぶら汗に汚れた指を二重廻しの袖でグイと拭くと、竜二郎はランプを持って階下に降りた。

乞食の娘はありあわせの赤い着物を引きずるように着せられ、洗い髪をチョコンと結ばれて、そこにあい変らず啞のように立っていた。

「おお、間違えるようにシャンになって……」

言いかけて、ハッとランプを取り直した。

さっき染香が誰かに似ていると思ったのは、この娘に似ていたのだ。しいたげ抜かれた者が見やるあの恨みの芯に貫かれた白い眼

竜二郎は女中に礼を言いつて帰すと、娘を二階へ押し上げるようにして連れて行った。

案の定であった。顔を見合ったとたん。

「姉さまッ」

「ミヤちゃん、ど、どうしてこんな所へ……」

次の瞬間、妹に曝すおのが姿を恥じて、激しく身悶えしつつ、ワアッと泣き出した。その裸身にすがって、ミヤちゃんと呼ばれた妹

も泣いた。

「そうか、父親が郷里から出てくると知って矢も楯もたまらず足抜けしようとしたのか……」

その父はいま牢につながれ、妹娘も姉娘と同じ運命をたどろうとしている。あわれなと思ひながら、あわれなことにかえって勃然と嗜虐欲を掻きたてられる竜二郎であった。

### （第三話了）



## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

### 〔宛先〕

東京都中央区銀座1の22の10  
銀座ストークビル・5F

芳友社・編集室



投稿作品

# 噛みつく女

高田道彦

三月の終わりといっても、信州の春は寒かった。ボクはその日、穂高町の碌山美術館の前に画架を立ててスケッチしていた。

春の展覧会の出品で、月曜日だったが、会社を休んで出かけたのだ。美術館は月曜日は休館なので、描いているまわりに人が集まらないからであった。県外からの観光客は、月曜日が休館とは知らず十四、五人来たが、ガッカリして帰っていった。最後にジーンズの女性が来て、

「近くで泊めてくれるところはありますか？」

とボクの絵をみながら言った。

「ありますよ」

「わたし、旅館でなくて民家に泊まりたいんですが……」

「民宿ですか？」

「いいえ、あなたのお家でもいいの」

「ボクは、アパートの独り暮らしなので……」

「一晩だけでいいから泊めて」

と言うので、ボクはスケッチ箱をまとめて立ちあがった。

彼女は二十七、八才で、重そうな旅行カバンを提げてついて来た。

アパートのおばさんが、変な目で見たので、

「姉です」

と言って室にはいった。

彼女はボクが

「何か夕食をとりましょう？」

と電話をかけようとする、

「わたしは、さっきライスカレーを食べて来たからいいわ」

カバンの中から、パンやチョコレートやインスタントコーヒーを取り出した。

「飲みますか？」

とウイスキーのビンを出すと、

「匂いをかいただけで、わたし酔ってしまうの。ツマミなら持っているわ」と、サキイカやナンキン豆を出して

「お湯はある？」

とコーヒーをコップに入れた。

はじめてなので、何から話していいか分からないので、

「信州へは、はじめてですか？」と聞いた。

「何度も来たわ。今度が四回目」

彼女は、注いだウイスキーには口をつけず、旅行案内を見ていた。

「新幹線で来たので、眠い……」

「どこから？」

「大阪で看護婦してるの」

「じゃあ、休んでください。布団が一人前しかないが……」

「毛布だけでいいわ。布団にはあなたが寝て」

と、ジーパン姿へ毛布をひっかけた。「風邪をひきますよ」

「わたし、離婚になったけれど、男の人知ってるから、一緒でもいいわ」

と、カバンからネグリジェを出して、「あっちを向いていて」

と言った。

ボクもパジャマに着替えて、二人で狭い床の中へはいった。

彼女は「眠い」と言っ、ボクにからまって来た。

ネグリジェのボタンをはずして手を入れると、彼女はブラジャーをつけていなかった。

「わたしのお乳、ベチャンコでしょう。見られるの恥ずかしいわ」

と言ったが、案外大きな乳だった。

ボクが吸うと、彼女の体が熱くなり、目をつむってハハハともだえ出したので、下半身へ手を伸ばすと、

「いや！」

とボクの喉に噛みついた。ボクが思わず手を離すと、

「ごめんなさい」

と起きあがり、

「トイレへ行ってくるの」

と出て行った。が、中々戻って来ないので、どうしたのかと見にいくと、

廊下の窓際に立って外を見ていた。

「風邪をひくよ」

とつかまえて、後ろから押すようにして寝せると、

「全部あげる」

と彼女が言った。ボクが彼女の股間へ手をやると、

「ここ」

と、彼女が手を小実へ持って行った。愛撫すると、たちまち濡れて来て、

「抱いて？」

と、彼女はボクに片脚をかけたので、正常位になると、彼女の両脚を広げて挿入した。

彼女の両脚がボクの腰にからんだ。

「いい気持ち！、もっとはげしくして？」

と身をくねらせて、

「もうダメ！ 止めて……」

と言った瞬間、ボクの腕にまた噛みついた。後まで歯のあとが残るほどのひどい噛み方で、

「痛い！」

と、ボクは大きな声をあげずにはいられなかった。

彼女は、体を投げ出したまま、大き

な息をついていた。ネグリジェの前をひろげたままだった。

ボクは彼女に噛まれた瞬間、ズ、ズ、ズーンと噴き出し、二人の体は濡れたままだった。

彼女は我にかえると、

「ごめんなさい！」

とカバンを引き寄せて、ガーゼのハンカチを出し、ボクの汚れを拭いてくれた。そして、舌先でも拭くようになめはじめると、口に入れた。

「噛むなよ」

と、体をひくと、

「もうしない」

と、ボクの体を口に入れて吸ったり、指で上下に愛撫したり、舌先でチクチクと突っついたりして、

「いい気持ち？」

と、また口に入れて、舌をまくようにして吸った。

その快感に、ボクの体は再び熱いづき、彼女の口の中で爆発した。

彼女は少しむせ返ったが、ゴクンと喉を鳴らして飲み込み、

「よかった。わたしの顔、見ないで」  
と、顔を布団にかくした。



ボクは、後ろからネグリジェをまくると、

「見たい」

と言ってさかさになった。紫がかった花弁に、白い液が流れている。毛は液で張りついていた。

ボクは、彼女の両脚を肩にかけて抱きあげ、密林の谷をなめた。

「苦しい、わたしを上にして」

と言って荒れ出し、ボクが手を離すと、上位でボクの顔に股を押しつけて来た。

ボクが舌で愛撫すると、液が流し出し、

「いや！いや」

と、ボクの口に体を押しつけて来た。ボクは息がつまり苦しくて、全身の力で彼女を押し退けた。

すると、彼女の泣き声が起こった。

「どうしたの？」

と、聞いても返事をせず、肩を震わして泣いていた。

時計を見ると、午前一時だった。どうしてこんなに時間が経ったのか、わからなかった。

「じゃあ、お休み」

と、布団をきせてやったが、

「わたし、眠くない！」

と、ボクを見た彼女の目は血走っていた。

涙で濡れた髪の毛が、額に乱れて張りついていた。

しばらくして、涙がおさまると、

「わたし、三年前離婚したの」

と、さびしそうに言った。

「生活が苦しくて？」

「そうじゃないわ、結婚していたのは二年半くらい……」

「なんで離婚になったのですか？」

「性格が合わなくて、わたし、ここ一年間、男を知らないの」

「……」

「なんだか、セックスがいやになって……。わたし、三十八才なの。だけどもう結婚しないで、おしまいは養老院へいくわ」

「ばあさんみたいなことを言うなよ。再婚しないか？」

「いや！ それより抱いて？」

と、ネグリジェを脱ぎ捨てて、

「あなたもみんな脱いで！」

と、言った。

ボクは、全裸で抱き合ったのは、はじめてのことだった。

ボクのセックス体験と言えば、高校生時代、同年のK子とピクニックに行って、高原のカラマツ林の中でしたことと、ボクの親類先の未亡人と、旅館へ七回行っただけだった。未亡人はボクにセックスの体位を教えてくれたが、帯は解かなかった。

そして、セックスが終わると、

「こんな女、嫌いでしょう？」

と、繰り返した。

ボクのセックス体験は、二人の女性しかなかった。まったく全裸で寝るなんて、はじめてのことだった。

朝、彼女は仕度をして、ボクをゆすり起こすと

「また来ていい？ 送らないで。人に見られたら恥ずかしいでしょう？」

と、逃げるように去って行った。住所も詳しく言わないで……。

甘いというよりも、不可解な一夜に過ぎなかった。

それから一ヶ月経った五月の雨の夜

だった。

トントンとノックするので、

「はい」

と、ドアをあけると、濡れたコートの彼女が立っていた。

「無性に来たくなって……」

と、濡れたコートを脱ぎ、

「服まで濡れちゃった……」

と、服のバンドをはずした。そして、

「着替えるから、あっち向いていて？」

と、旅行カバンをあけながら言った。

「そうか」

と、ボクが顔をそむけていると、

「もういいか」

と、言ったので見ると、ネグリジェ

になっていた。

ボクは、彼女お服を釘にかけて、コ

ーヒーを出した。

「熱くて、おいしい」

と、彼女は飲んだ。

ボクがキスしようとする、

「寒いから布団敷いて」

とニヤッと笑った。

ボクもパジャマに着替えて、一組し

かない布団に寝せた。

彼女は、ネグリジェのボタンをはず

した。

ボクがキスして、乳房に手を入れて行くと、ブラジャーもパンティもつけていなかった。

乳房から下へキスしていくと、彼女

は頭をのけぞらして、うつろな目をして

いた。ク×ク×ク×へ指が届くと、体

をずらしてボクを押しつけた。

「わたしが先にいい気持ちにしてあげる」

と起きあがって、ボクのパジャマの

ズボンに手をかけ、

「脱いでしまいなさい」

と彼女は、上手にずり下げて脱がし

た。

「もう、こんなになっているじゃない

の」

と手で握って、体をなめました。そし

てボクの菊門へ指を収めた。すこし

痛かった。

「これが女の気持ちよ。わかる？」

彼女は左手の親指を菊門へ収め、右

手で体を握って、出し入れた。

痛みの中に快感があって、ボクの体

は膨張した。

彼女は体の光をなめる。ボクはこら

えられず、爆発して彼女の顔にぶっか

けた。

「バカねえ！」

彼女はボクの体を、キュツツとひね

った。

「痛い！」

ボクは叫ばずにはいられなかった。

ボキリと折られたように、ひどく痛

かった。

彼女は

「フフフ……！」

と笑い、

「わたし、男をいじめると、とてもハ

ッスルするの。見て？」

と、ボクの顔を抱き寄せて、指で花

弁をひらいてみせた。

紫色の花弁の芯は赤く、白い蜜が光

ってたれていた。

「ねえ、ストリップして見せましょ

うか？」

彼女はカバンの中から、コーラを出

して栓を抜き、一口、二口飲むと先を

膣の中へ収め、体をゆすって再び取り

出すと、

「飲んで？」

と、ボクへ突き出した。ビンの中に



泡ができていた。

仕方なくボクは飲んだが、別に味が変わったとは思わなかった。

「ちょっと、かして？」

と彼女は、ビンの先を尿口に当てて、ジュッ、ジューと、小水をする、と、

「これ飲んで」

とボクに渡した。

「飲まなければ、今夜だめ！」

と、彼女は鋭い目でボクを見た。

「飲むよ」

ボクは目をつむって飲んだ。尿の香りが口の中に残った。

「オシッコ飲むと、お酒のように酔うって。おいしかった？」

「ん……」

ボクは彼女の言うままに、異常なプレイにまぎ込まれた。

「こんどは、わたしがいじめてもらおうわ」

彼女はネグリジェをぬいで全裸になると、シーツの上にビニールを敷いた。

「わたしをしぼって？　噛まないように猿ぐつわをして？」

マゾの道具をボクに出した。後手にナワをかけて、乳房の上をしめると、

「もっと、もっと強く！」

と、一つの乳房が二つになるほど、締めさした。

ボクは彼女の全身をなめまわし、指やボク自身で思いっきり責めた。

猿ぐつわをした彼女は、うめき、もだえ、体を転がした。

と、その時、彼女は激しい小水を噴きあげた。

ビニールを敷いたのは、そのための用意だったのだ。

ボクは顔中を濡らされた。ナワをほどこいてやると、ナワのあとが赤く残っている。

タオルで濡れを拭いてやると、

「体が軽くなったわ」

と言って、コーヒーをボクに入れさせた。

「きみはマゾだな？」

「いじめられるの好き！　このまま抱き合って寝て！」

ボクと彼女は、毛布の中で抱き合った。

そして、おたがいに愛撫し合った。

彼女は何度も、ボクのザーメンを飲んだ。

彼女は眠りに着くのが早く、一時間

ぐらい眠ったかと思うと目が覚めるらしく、ボクが眠っている時でも、目覚めるとボク自身を口にくわえている。

勃起したのも知らないうちに爆発する時、ボクは目をさます。

「ミルク吸っちゃった……」

彼女は全身を動かして、クックッと笑っている。

彼女はボクの精力を吸い尽して、「もうこんな時間！」

と時計を見て、仕度をはじめが、途中で胸をひらいて、乳を吸わせ、指でベッティングを再びさせる。

そして、ガーゼのハンカチを股にねじ込んで、帰っていく。

「また来たい？」

と走りながら……。ボクはスッカリ搾られて、布団の中へ戻ると、死んだようになって眠る。

布団のまわりに、情事の紙の花を散らしたまま――。

会社へは病欠である。

夕方、目をさましてみると、彼女の濡れたパンティも丸めたままであるし、大人のおもちゃの女性用の電動器も、

ハンカチにくるまれたままである。

おどろいたのは、剃った毛のT字カミソリが机の上においてあった。

彼女は鹿児島県の出身で、大阪に来て看護婦をしているとのことであった。

二十二才の時、交通事故の青年と結婚したが、二年半で性格が合わず、離婚になったというが、離婚になったのは、噛みつく癖があるからではなかった。

ボクは彼女に噛まれぬような体位で、セックスすることにした。

彼女を四つ這いにさせて、後ろから突入する。

彼女はオルガスムスに達すると、シートを噛み、手でそれを強くひいて裂いてしまう。

それでウツカリすると、ボクの体のどこへでも噛みつく。

ボクの体中には、彼女の噛あとが数ヶ所ある。

ボクはいま、噛みつかれる痛さにも、快感を感じるようになった。

彼の女は看護婦だから、男性の体は

四六時中見ている。

彼女が正常なセックスでは満足しないのは、一種の職業病であろうか。

彼女がオルガスムスに達する時、子宮が降下して、挿入したボク自身を外へ押し出すような快感を感じる。

彼女はコンドームを好まない。避妊日を計算して、絶対妊娠しないと云っている。彼女の花弁の数は多く、花芯がセックスを求める時、それは出たり入ったりし、舌を膣口に収めると、喰いちぎられるほど強く閉める。

これを名器というのだろうか。だが、彼女のセックスの強さにボクは左倒されて、彼女と一夜を過ごす、朝、頭が重く、ボーッとして一日中起きられない。

彼女が来る度に、ボクは会社へ病氣届けをしなければならぬ。

ボクは彼女と結婚する気には、到底ならない。

ブレイとしても、二夜とは続かない。魔女なのだ。色は浅黒く、脇毛はそろっているし、局部の毛も濃く、それを適当に剃っている。剃ったあとがチクチクすると、セックスしたくなって、

ラッシュの電車の中で、男性の体についてしか押しつけていると、ボクに言った。かた肥りで、腕力も脚力もある。

ボクの首へ両脚をはさんで口愛をさせると、ギョッと締めつけて、ボクは殺されそうになったことがある。

彼女は毎月一回しか、遠いので来ない。

「わたし、結婚しない」

と言っているが、彼女自身も噛む癖のあることを自覚しているのだろうか。彼女はいつも複数の男性と交際しているが、一夜で逃げられると言っている。

何回もセックスしたのは、

「あなただけ。捨てないで！」と、帰りがけには、ボロボロ泣くようになった。

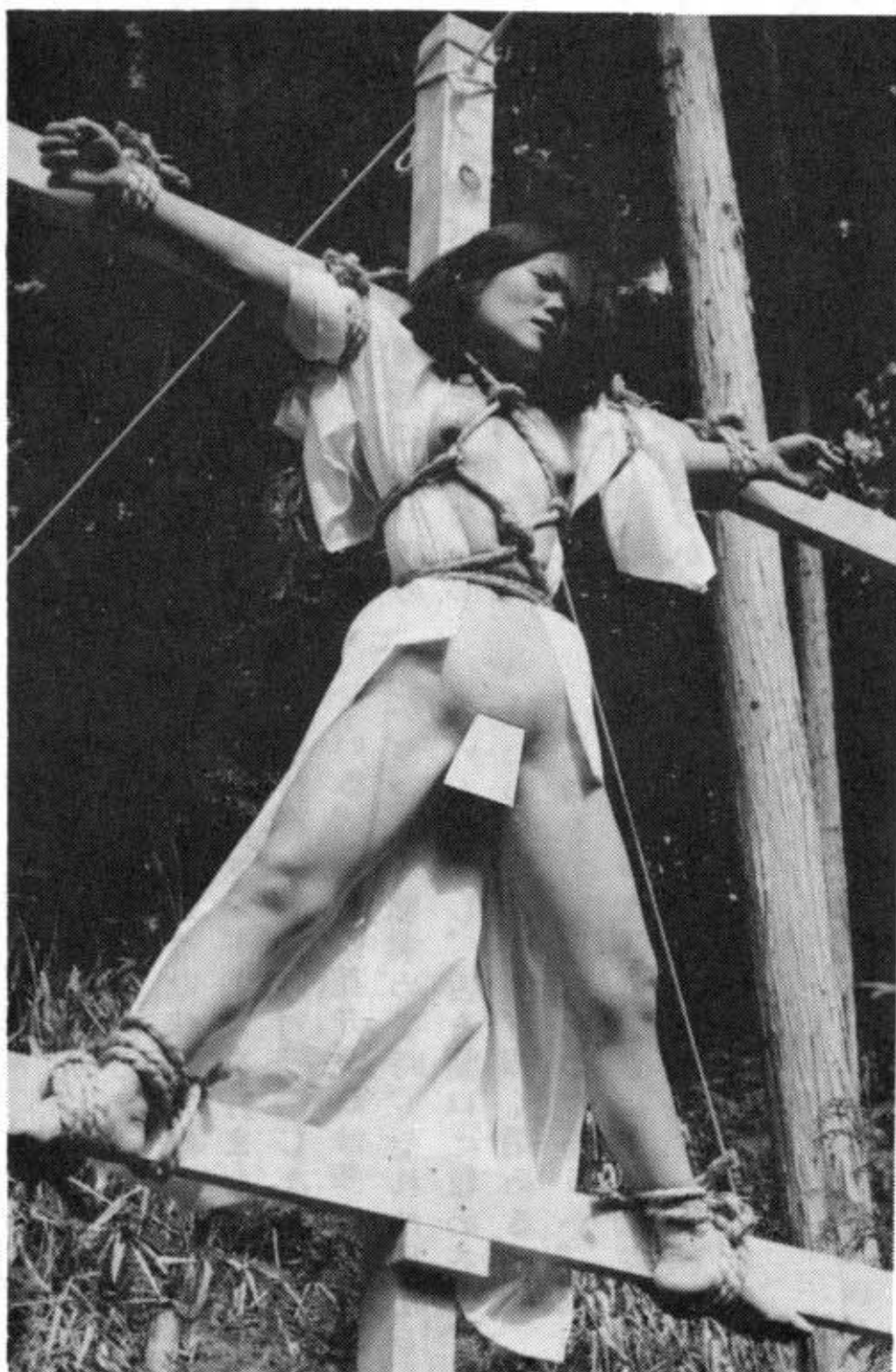
## SMモデル募集 年令・容姿不問

あなたのおひまな時に、モデルのアルバイトをしませんか。一時間につき一万円お支払いします。応募の秘密は厳重に守りますので、写真同封のうえ手紙で連絡して下さい。  
連絡先 東京都中央区銀座一の22の10、ストークビル501号 風俗資料保存会宛。



SM時評

# ビニ本選びのノウ・ハウ



ロマン派生氏が愛蔵する鮮烈な責め写真

## ロマン派生

一時 鳴りをひそめていたビニ本が、またまた元気をとりもどしてきたという巷の噂に誘われて、この一二月、ビニ本屋をしきりに徘徊して様子をうかがい、乏しい小遣いから〇万円を投じて、入手したビニ本について、いささかウンチクを傾けたいと思う。

もともと〇万円ていどのウンチクであるから、どう傾けてみてもタカが知れているのだが、本誌をお読みになる方々の中には、私と同じような意見の方も少なくないと思う。

したがって、ビニ本買いにおける私の失敗や成功は、多少のご参考にはなるものと思う。

## 新宿より安い神田界限

まずビニ本を買う場所だが、東京では神田神保町附近、及び新宿歌舞伎町附近にその手の本屋が集中しているようだ。もちろん新橋とか、池袋、上野、浅草などにも店は多いが矢張り神保町と歌舞伎町が買いやすい。

そこで売っているビニ本の種類は同じようなものだが、歌舞伎町では時として、他では入手出来ないような掘り出し物があることもあるとかないとか。

しかし、お値段は神保町の方がはるかに安いことが多い。主力商品の全く同じものが、歌舞伎町の殆どどの店で千六百円で売られていたが、神保町では千二百円だった。その上神保町では、少し古い商品は特価品として半値位で売られていて、その中にも、時には良いものもある。

ビニ本というからには表紙しか見られないので、表紙から中身を想像して買うわけだが、それがなかなか予想通りに行かないで、しばしば、こんな筈ではなかったと失

望することがある。私も何回もそんな目に会っているのが、この一文を書いた動機で、どうやって良いSMビニ本をえらぶかの手引きと云っては生意気ならば、情報交換といってもよい。

ところが、神保町の多くの本屋では、見本と称して、中身の二頁ほどが見られるようにしたものも置いてある。多くはその本の一番良い頁を見せてあるので、表紙とその頁を見れば、ほぼ全体の内容の見当がつくというものである。

しかし、見本のあるのは極く一部なので、矢張り、表紙を見て、今まで経験とカンを働かせ、フトコロ具合と相談して買うことになる。

誰でもそうだろうが、まずモデルが美人かどうか大きな要素の一つだろう。ビニ本は普通表紙にモデルの顔が写っているから、自分好みの美人をえらぶのはさして困らない。

次に、縛り方が上手か下手か、どんな責め方をしているか気になる。これは表紙や裏表紙に小さな写真で目次風に示してあったり、文字で、人妻逆さ吊り、とか女子大生浣腸責めとか書いてあるのを参考にするが、文字の

方は誇大宣伝が常で、殆んど参考にならない。

また、露出度がどの位かも気になる所だがこれは多くの場合表紙のそれと一致するが、そうでない例が時々あるようだ。

私が昨年十二月頃買って題名を忘れた本は表紙は着衣の女の子の上半身で、全く露出性のないものだったが、中身はかなり露出度の高いものだった。警察の取り締りが厳しい時にはこのような手を使うこともあるらしい。

さて、これ等の要因の他に、印刷の色合いが綺麗だとか、写真が鮮明だとかいうことも考慮に入れて、ヤツとばかりに決心して買ってくるのだが、後で中身をたんねんに見て、良い物を買ったと満足するのは半分位のものである。

私は保存する場所があまりないので、よい写真だけ切りとって、後はすぐに捨ててしまう。原形を残しているものは一冊もない。この一文を書くに当って、出版社や本の名前、モデル名等をメモしておけば良かったと悔んでいるが、もう間に合わない。最近のものの極く一部だけメモしてあった



ので、それを参考に話をすすめることにする。

最近まで、私は前に書いたような選び方をしていた、出版社名は殆んど気にしていなかったが、この所に来て、かなり出版社によって性格があるのに気がついた。

あとから考えると、私の買ったSMビニ本の三分の二はグリーン企画社のものだった。どうも、この社のものが、私の好みに合うようである。

それは、モデルが割合に美人が多いということと、縄さばきがかなり丁寧でキチンとしているし、写真技術も印刷もきれいに出来ている。

この社のものを、私はかなり沢山買ったようだが、そのうちメモをして買った分だけ紹介して見よう。

「姪蛾」81 美少女虐待地獄絵図 モデル名は不明。

モデルはまだ若い娘でセーラー服姿があまり不自然ではない可愛い子で、表情も悪くはない。綺麗に剃毛した部分に細目の麻縄で縦縄をかけて局部を隠している。割合清潔で可憐な感じがする。

グリーン企画社のものに共通するが、殆んど細目の麻縄だけを使い、乳房を中心にキチンと縛ってある。胸だけ縛って腕に縄をかけないようなダラシのない縛り方はしていない。縄のユルミやユガミはあまりない。ただ縄がけが、いつも一定していて、いささかマンネリの気味はある。

カメラも正統的で、やたらに超広角レンズを使ったり、わざとブレさせたりするようなことはなく、ピントは鮮明だし、構図も素直である。印刷も良好で、私から見ると常に80点以上に評価出来る。

「姪蛾」二集 “女体凌辱檻禁地獄” モデル、朝路由香。

このモデルは一集のモデルより少し年長に見えるが、それだけに顔付き、身体付きに女らしい柔らかさがあり、顔もかなりの美人と云ってよい。

薄いパンティをつけた写真が多いが、それでもかなりのセックスアピールがある。

表情の動きは激しくはないが、一寸目を閉じ、あきらめたような、陶醉しているような表情が大変男心を刺戟する。終りの方に全裸の股間縄のものも載っているが、露出性はそ

れほど高くはない。八十五点はつけて良い。  
「縄奴隷」 女子大生SMクラブ モデル名 不明。

このモデルも少女と云って良い若い娘で、ややポッチャリとして、大竹めぐみをもつと若くしたような感じである。縄かけは他の本と同じようにキチンとしていて、開股のポーズが多い。例によって、縦縄で局部を隠しているが、完全には剃毛していないようだ。

恥かしそうな表情と、遠慮のないカメラアングルが仲々の作品を生んでいて、九十点をつけたい。

「剃毛」 女体地獄 モデル 佐賀井果林。

このモデルは美人とはいいいかねるが、繩師がハッスルして、これでもか、これでもかといわんばかりに、かなり激しく責め立て、モデルも演技でなく、かなり苦しそうな所がよい。パンティを着用しているものでも、それを細く絞り上げ、あまつさえ汗でベトベトに濡れている。全裸の股間縛りでは、縄がすっかり内没しているようである。その上、横吊りにしたり、かなりハ



## モデルの良さが決め手

ドな責めと、大胆なカメラアングルで、ハードさでは、前の三点より上である。どうも、あまり美人でない方が手加減せずハードにやれるのかも知れない。これは、私の好みからやや外れるのだが、それでも八十点は越えている。

次に神田草艶書林という、何んともなく古めかしい名前のついた発行所のものを一つ挙げ

る。「倒錯の美より」シリーズ第三弾、清純派

美女を誇る。モデル 中原奈緒。

これはやや部厚い本で、金三千円と一寸高いので、買うのに迷ったが、表紙の股間繩のモデルが、あまりにも美しかったので購入してみた。

といった風情が何んとも云えないムードがある。髪の毛もキチンとしてあまり乱れていない所が良い。露出性やポーズも良いものが多い。強いて欠点をあげれば、麻縄が細いものと太いものが二種混用されているし、一部の縛りは一寸雑であった。しかし何んと云ってもモデルが良いので、最近のビニ本の中では一番の出来と云ってよい。九十五点は決して甘くない。

ただし、この本は、約半分の頁がこの中原奈緒の写真で、後半はモノクロ写真とか他のモデルのもので、これでは大分点数が落ちる。

中味は期待通りの美女で、二十四、五と思われる。やや細身の美女は、大変品がよく、崩れた感じが全くない。表情は、やや冷たいというか淋し気な愁いに満ちている。ひどいポーズをとらされても、激しく反抗したり、苦痛を訴えてるといふのではなく、悲しそうな目でじっと耐えている。特に西条映子というモデルの写真は多分別の出版社で一冊にまとめて出ていたものと全く同じものか、全く同じではないまでも、同じ時にとった写真である。同じ写真を二度使うのはどんなものだろうか。要するに三千円の定価に見合うように、水増しをしてあるので、前半の中原奈緒の写真が抜群に良いだけに、後半の手抜きは一層残念である。

草艶書林の本は、他にも沢山出ているよ



記憶がないので、この位にしておく。

以上の二社には高い評価を与えたけれど、あまり感心しないものも沢山ある。

その代表として、大共社をあげておく。

この社は、割合古くからSM物を手がけていて、業界では老舗といって良からう。

かなり沢山のビニ本を発行しているが、この社の特徴は、モデルを一度に三人も四人も使った複数プレイの写真集が多いことだと思う。

他社でも二人を同時に使ったレズSMのようなものは時々見かけるが、三人以上のものは大共社の独壇場といってよい。

そこで私も大分前から、何冊も同社の複数プレイのビニ本を買ってみたが、まずロクなものに当たったためしがない。ついつい今度は今度はということ結構買うのだが、いつもいつも期待を裏切られている。

どこが悪いかと云えば、まず縄師が真面目に縛っていない、という点にある。今までに一回でも丁寧に縛ったことがあるのだろうか。殆んど腕には縄をかけず、胸だけ面倒臭そうに縛る。そして多くの場合手首は縛らない。縄は、赤だの青だの全く無神

経に使う。縛りはゆるく必然性がない。その

上複数のモデルを扱いかねるのか、テンデンばらばらに、無意味に配置する。せめて、なるべくモデル同士を密着させておけばいいのに、不自然に引き離してある。

おまけにカメラマンがどういうつもりか、やたらに超広角レンズを使ったり、画面を斜にしたり、ひどいになると、モデルを画面から外して天井のランプとか、壁だけを撮ったりする。

こんなひどいものを何回も買う方も馬鹿だが、つい大勢のモデルにだまされて買ってしまふ。本の題名で一つだけメモしてあるのを書くと、

「秘密パーティIN OSAKA」 モデル名はわからないが伊丹市のSMホテルでの連縛写真だが、前記のような欠点を全部そなえていて、中味を見たら三百円でも私は買わなかったろう。したがって点数は三十点がやっとな、という所である。私が今まで買った大共社のものは七、八冊になると思うが六十点を越えたものは一点もない。

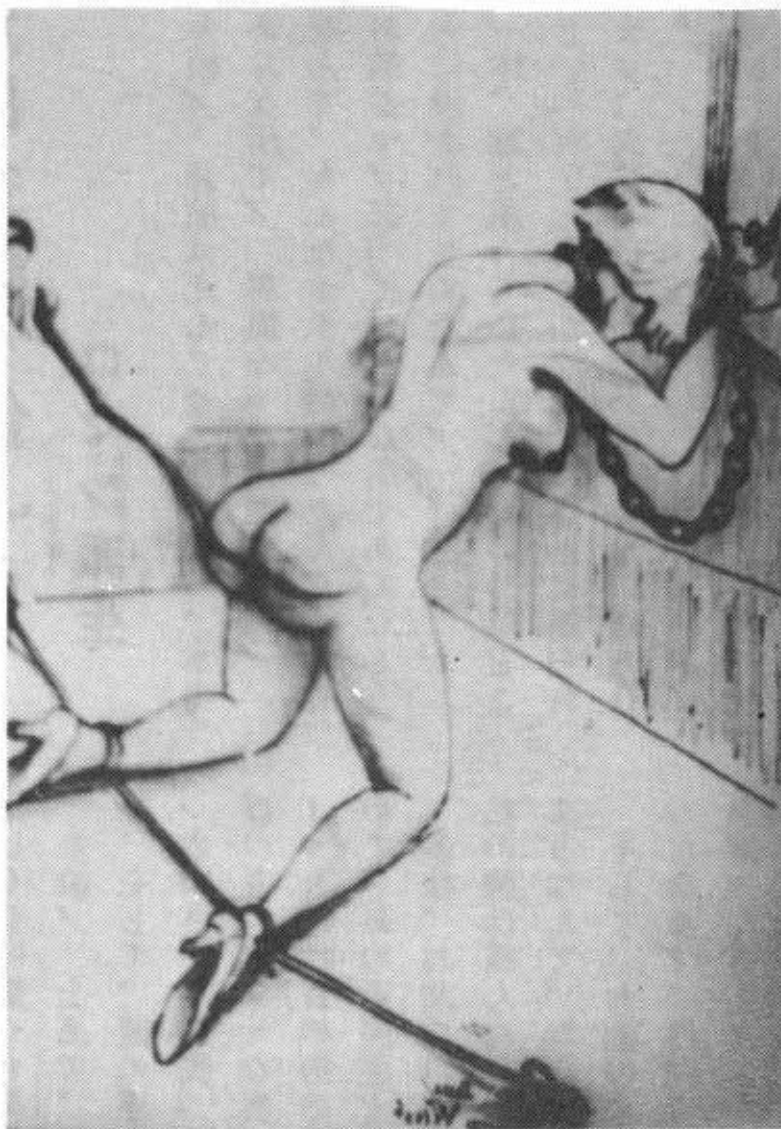
もう一つ別の出版社のものを挙げてみる。

薔薇十字館 桜桃書房

「微惑人形」 モデル 滝沢麗香。

モデルは、可もなく不可もないと云った普通のモデルだが、露出性というか、セクシャルなハード性は、今まであげたものより強い。ローソクや、コケシが確かに挿入してある。もちろん、修正してはあるのだが、その修正の仕方が下手で、妙な色合を呈している。これは、マヂックで黒く塗るよりもっと汚らしい印象を受け、幾らハードでも決して見た目を楽しませるものではない。これならば剃毛して縦縄で隠すか、濡れ紙とかパンティで隠した方がずっとセクシャルである。矢張り局部はきれいにしたい欲しいものである。ローソク責めなど、かなりハードな責めと、大胆なポーズがあるのは良いが、縛りが、大共社と同じように腕や手首が縛ってなかったり真赤な縄が使われていささかデリカシーに欠けている。これは、モデルの責任ではなく、縄師のセンスと技術の問題であらう。点数は甘く見て六十五点といった所である。

この他にも、「ぶちこみ」とか、「満子といえ」とか凄惨な題名のものをかなり買っている。



SMビニ本が良くなったというのは、主にモデルに美人が増えたということと、露出性がより大胆になったという点にある。

しかし、私達マニアにとっては、それだけでは不満で、もっとキチンとした縛り方を期待しているのだが、その点ではあまり進歩していないのは残念である。

ビニ本ではなく、普通のSM雑誌のグラビア写真の方が現状では、縛り方の点では優れたものが多いようである。しかし、どうもこれ等の雑誌に写真を供給しているグ

ループの作品が一部ビニ本にも流れているように思われる。これはビニ本界に刺激を与える意味で好ましい現象と思われる。

今後のSMビニ本に希望したいことは、やたらに露出性を強調したり、あるいは残酷性を強調することではなく、ヌード写真の一つのジャンルとして、縛られた女の美しさを追求してもらいたいものである。

そのためには、出来るだけ美しいモデルを使い、美しく丁寧に縛り上げなくてはならない。

次に、薄いパンティ

とか全裸ばかりではなく、腰巻き、長襦袢といった和装や、江戸時代の囚衣といったものも着せてみて欲しい。

また、手枷、首枷といった小道具も、市販のものでなく、もっとムードのあるものを自作して、使用すべきである。

SMホテルなどに備

え付けてある木馬や十字架などは、全く装飾品に過ぎないので、そんなものを使わず、もっと美的なものを作って使用して欲しい。

また、野外での際など、アマチュアでは一寸出来ないようなシーンを撮るのがプロのプロたるゆえんであろう。

さらに、モデルを二人、三人と複数で使ったものは、それだけ縄師の腕前を要求されるが、十分に構成を考えて撮影すれば、魅力的なものが出る筈である。

最後にビニ本出版社が一冊だけ発行して

雲隠れする一発屋でなければ、発行所の名前と縄師の名前及びカメラマンの名前を明記して、この出版社のものなら、中身は見なくても大丈夫という信用を植えつけると、買う方も売る方も都合がよからう。

なお、グラフの中に、フォトストーリーのようなものが入っていたり、妙な詩のよな散文的なものが入っているのは無駄なことと、それよりも、巻末にモデルの紹介や、縄師の狙いとか、撮影時のエピソードでも二頁位入れた方がよい。これは別紙に印刷して付録としてもよいと思う。



# 沢田多絵を偲ぶ

## ロマン派生

多絵！ お前は死んじゃったのかッ、本当にあんな所で！ 馬鹿なッ、馬鹿やろッ！  
なんで、あんなホテルに泊ったんだ。いくらお前がマゾだって、あんな所であんなふう

に火に焼かれて死ぬなんて！  
一体、誰と泊っていたんだ、そいつはどこ

のどいつだ？ まさか、お前は誰かに縛られたまま、火焙りになったわけじゃないだろうな。



じやあるまいに、本当に焼かれてしまったら美しくも可愛くもありやしない。

多絵！ 上品で、可愛くって、頭の良い多絵、そして、運の悪かった多絵！

さっさと足を洗って、奥さま業に転身すれば、きつと幸せな奥さまに成れたろうに。ちよつとだけ目のある監督に見出されれば、せめて、あの東照美ぐらいには成れたのに。

多絵、お前の白い肌に入れた小さな刺青に私の胸は痛んだのに、あの火の中で死んでしまふなんて、なんてことだ！

そして、お前の身元が最後までわからなかったなんて、馬鹿で、可哀想な多絵！ お前を縛った男たちは、みんな、お前が幸せになることを願っていたのだ。

SMスターは、男どもを樂しませるために存在するのにお前は大勢の男たちを悲しませて逝ってしまった。

お前の、在りし日の緊縛姿をいつまでも心の中に刻みこんでおこう、といっても、それは、うつろに響いてしまう。さようなら！

可哀想な多絵！

## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、繩師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性

### 〔宛先〕

東京都中央区銀座1の22の10

銀座ストークビル・5F

芳友社・編集室

## 映画情報

(ミリオン・フィルム)

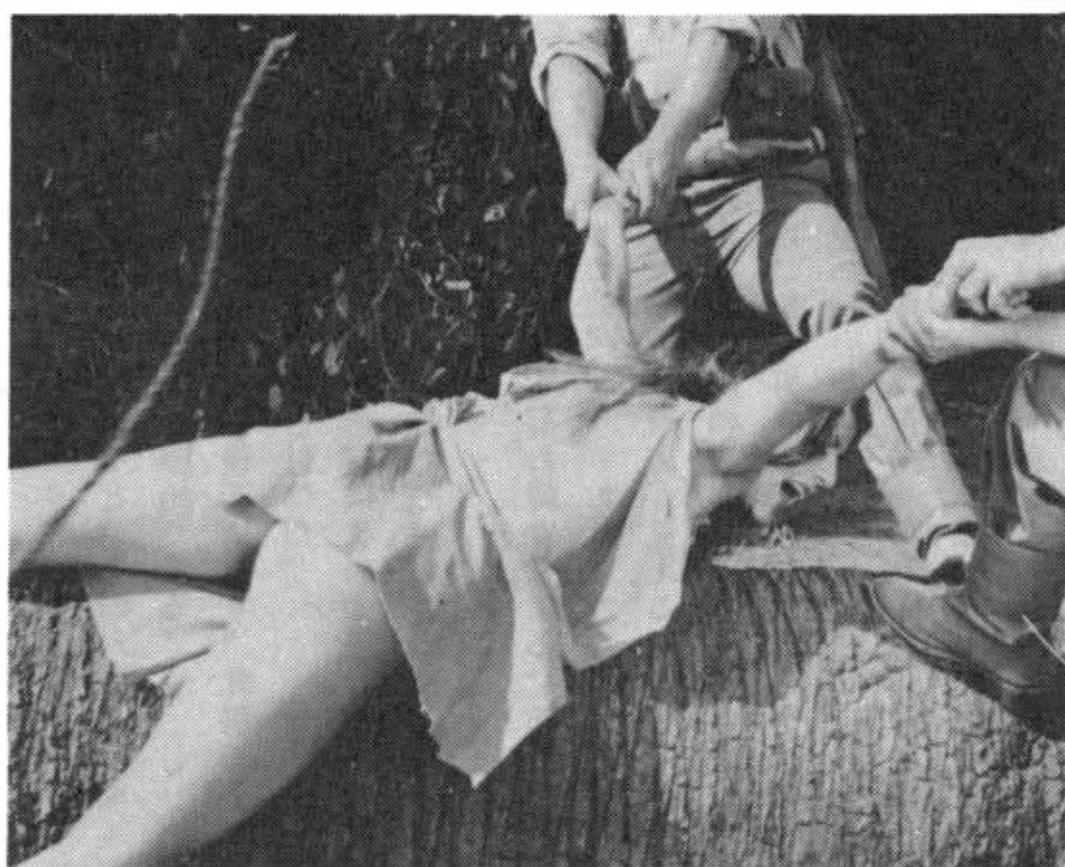
物語は売春、殺人などで逮捕され、重刑を科せられた女だけを集めた収容所が舞台。そこで繰り広げられるSE



Xシーンは、さすがリアリズムに徹するイタリア映画だけにアメリカン・ポルノの比ではない。まさにやりたい放題の感じで、脱走を企てた女囚を看守たちが鞭打ち、吊し責めなどの拷問を容赦なく加えるほか、ファックシーンもすさまじい限りで、女囚をアナル・カントのダブルファックで痛めつけた

り、気晴しのレイプなどは日常茶飯事だ。男に飢えた女囚たちのレズも圧巻。

出演はアンナ・マリア・パナロ  
(女囚ボス)のほかアジタ・ウィルソン、クリスチナ・レイ、シンシア・ロデ



ッティなど。監督エドワード・ミューエル。女囚マニア必見の一作。3月一斉公開。



# 縛悦の悦の縄

## 雅代の巻 ②



新幹線の熱海駅前で、雅代の顔を見付けた時、私はほっとしていた。

さっそく、車で来ていた雅代とモーテルを探し、先に入浴させて、私はその間にSMプレイの準備をすることにした。

手に持てるだけのプレイ用品を持参していた中から、まずは綿ロープでの緊縛。

バスルームから、バスタオルを胸から巻いただけの雅代が出て来ると、そのバスタオルをはぎ取ってプレイの開始である。

全裸で立たせて両手後手に縛り、乳房の下にも二、三重に巻き付けた。

そして別のロープを首にまわすと、胸部のロープと乳房の間で結びつけて、その残りを腰に巻きつけた。

これは、私の最も好む縛りである。前面は十文字縛りの型になっており、この縛り方は乳房が張り切って、形よく見える。

雅代のような乳房のややたるみ気味の中年の女性には、最も好ましい型だと、私自身いつもそう思っていた。

さて、上半身だけを縛った雅代を、尻を高く突き出させて、前かがみにベットへ寝かせると、今度は雅代の一番好むムチ打ちをすることにした。

音の割に痛さの少ない、私自製の九尾ムチを手に握ると、突き出させた尻を中心に、背中の上あたりにも、ムチを高く振り上げて打ちつける。

雅代の素肌にムチが音をたてて飛び、

「アー、アー、ウー……」

と、口からうめき声もれ始めた。

そして、打たれる度に恍惚感を味わっているのが、尻を左右に動かし、決していやとも逃げようもしない雅代なのである。

二〇数回打ち続けた後、一休みのつもりで雅代の体を抱き起こすと、肩で大きく呼吸しやはりすっかり恍惚の表情になっていた。

上半身を私にもたせかけ、夢心地でいる雅代に、軽く口づけしてやると、ふと、すでに硬直していた男性自身を、その時くわえさせてみたくなってしまったのである。

始めは嫌がって口を開けようとしなかった雅代に、鼻をつまんだり、顔をたたいたりして、無理矢理太く大きな男性自身を一気にふくませると、そのまましばらく舐めさせていた。

ウツとつまりながらも、それでも素直に舐め続ける雅代の股間を、指先でそっと触れてみると、もううるおいでずると簡単に指

先が体内へ滑り込んでく。

そのまま、両足をやや開かせて、体内や小さな突起物を軽く愛撫してやると、またもや

「アッ、ウー」

とうめき、そのうめきは小さな突起物に指先が当たった時、より一段と高く発せられていた。

時々、くわえている男性自身を口から離そ

うとしたが、私は頭を押さえて、しばらくの間強制し続けた。

そのお返しと言っては何だが、私の指先の愛撫もたえまなく続けられ、おかげで股間のうるおいは、アヌスまで流れあふれていた。

と、一段と高いうめき声をあげたかと思うと、男性自身を口から離して、上半身を大きく弓なりにそらせた。大きな波を一つむかえ







たのである。

私は雅代から離れ、ベット脇の椅子に腰かけて、顔をベットにうつむけ、縛られた体を動かそうともしないで転がっている裸身をながめながら、まずは一服することにした。

さて、次はパイプ責めである。しばらくして、雅代が少し元気を取り戻すと、特製パイプを弱にして、小さな突起物を集中に、転く

それを当ててみた。

ベットベットになっていた股間を、ティッシュで簡単にぬぐってやり、両足を開かせてのパイプ責めに、

「あーッ、いやッ、またアー、すぐにいってしまえそう、きついわア……」

と、一度ほてった体は、敏感に刺激に反応して、全身をよじらせ始めた。

だが、そんなことにはかまわず、小さな突起物にパイプが当たり、それがはずれないような恰好に太腿を開き合わせて、その両足をロープで完全に固定した。

そして、左右に体を乱れさせているあお向けのその上から、またムチ打ちを始めたのである。

パイプで快感を味わっているうえに、ムチ打ちの快感で、それはもう一段と激しい反応の仕方だった。

「アー イ××、イ××」  
の連続で、二つ目の大きな波は案外早く寄せてきそうである。

思った通り、私が考えていたよりも、もっと早く、絶頂をきわめた。

二度目も、体を大きく弓なりにそらせ、「イクー、イクー」

と発し続けて、そして急に静かになった。

それまでとはうって変わって、体をぐったりベットに沈ませている。

私はすばやくパイプを止め、両足の縛りをほどこいて、はさんであったパイプをはずしていた。

股間を大きく開いて覗き込むと、またもやうるおいが、ベットベットにあふれ出して、内股

までもびっしり濡られている。  
ティッシュで汚れをぬぐってやり  
両足を元に関合せて、しばらく  
くそのまま寝かせておいてやるこ  
とにした。

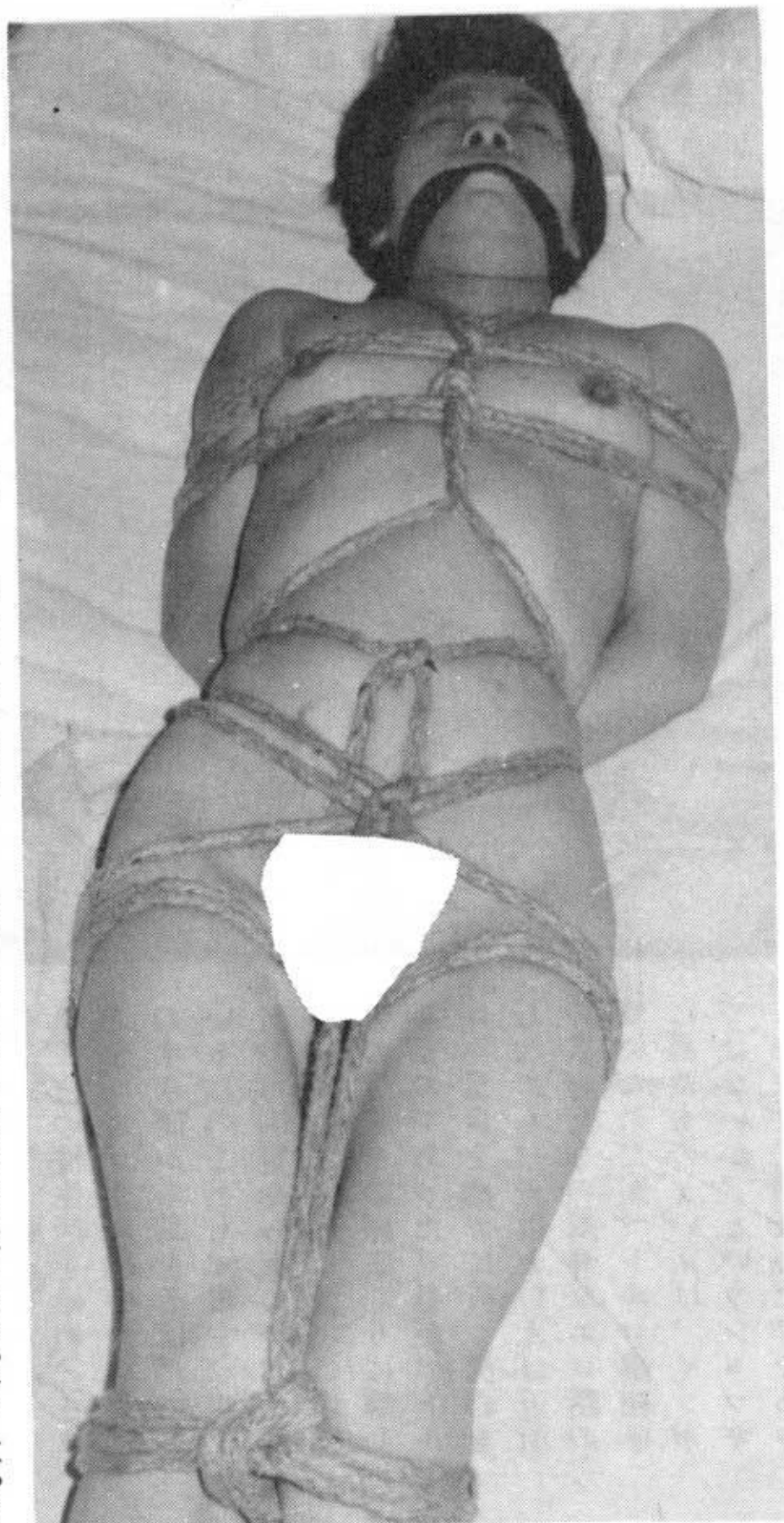
続けざまに味わった恍惚感で、  
すっかり気を失なってしまったの  
である。

私は『もう満足です』と云った  
ような表情の雅代を置いて、汗ば  
んだ自分の体を清めることにした。  
シャワーを浴び、バスにゆっく  
り入って再びベットに戻ると、  
上半身を縛られたままの雅代が、  
丁度目を細く開けて、気付いたと  
ころだった。

もうかなり長く緊縛してあるので、一度ほ  
どいてやるべきと、私は両手後手と乳房十文  
字をとき、しびれた両手を優しくもんでやっ  
た。

そして、いくらティッシュでぬぐったとはい  
え、まだベタついている股間を洗うために、  
バスへ入るようにすすめていた。

しばらくすると、今度はバスタオルで隠す  
ことをせず、全裸のまま出て来た。



そんな雅代に、再びロープを持って近づく  
と、

「また縛るの。もう結構よ。充分満足させて  
頂きましたわ」

と言うのである。

とんでもない、私はまだ満足していないん  
だ、私がそんな意味のことを言うと、恥ずか  
しそうに下を向いて、全裸の体を素直に預け  
てきた。

今度は両手を縛ることはせず、上体のみを

縛りつけて、私の前にひざまづかせ、立って  
いる私の男性自身を、再び口にくませた。

そして、その後、ベットにあお向けに寝か  
せ、両手両足首のところを縛りつけて、大の  
字型に固定すると、その上から一気に重なっ  
ていったのである。

十数分後、雅代の三つ目の大きな波が表わ  
れ、同時に私も最高の快感に終わりをつけた。



汚れたパンティの収集

臭気漂う

A black and white photograph showing a collection of approximately 20 pieces of discarded underwear, including various styles of briefs and panties, laid out on a dark surface. The items are arranged in several rows. Most are light-colored (white or light grey), but there is one dark-colored pair of briefs on the left side and one solid black pair in the middle. The items appear to be of various brands and styles, some with visible patterns or logos. The background is a dark, textured surface.

122



た。幻滅と不安、それにもかかわらず女体への好奇心は燃え盛るのみで、私は日夜煩悶した。そんな私の苦しみを救ってくれるかのように、その好運は待っていた。風呂屋からの帰りの夜

道で、はき古した女のパンティを捨てたのである。多分、風呂屋へ行った女が、新しいのとはき替え、汚れたのを持ち帰る途中で落したのであろう。いま脱いだばかり、とてもいえそうなフワフワと柔かい、その白い小

布は、まるで暗がりにはくく白い花のようであった。捨いあげ、ポケットへねじこんだ私は一目散に下宿へ逃げ戻った。落し主の女が追いかけてくるのではないかと、しばらくは一間しかない部屋の中をウロウロと歩きまわっていたが、だれにも気づかれなかったと知ると、今度は妙な勝利感みたいなものが湧きあがり、分捕った戦利品を点検するかのようになり、そのパンティを詳細に眺めた。色は白、ナイロンのようだが、吸収性はあるし、うだった。もっとも、かなりはき古したらしく、白色は輝きを失い、やや黄ばんでさえた。細かいゴム紐を通した縫い目はほころびたところがあり、弾力を失ったゴム紐が見えた。私は、

ほとんど無意識にそのパンティを鼻へ押しつけて匂いを嗅いだ。動物的な匂いが鼻の奥をくすぐり、そのあまりに甘美な臭気に私はむせた。股の部分、つまり、女の最も動物的部分を包むところは黄ばみがひどく、アヌスのあたるとは薄茶色のシミすら付着していた。私の脳裏に、おしゃべり好きで好色な近所の人妻たちの、肉の塊りのような姿がよぎる。女は、すべて動物なんだ、臭気をプンプンと発散させる好色な動物なのだ……、侮蔑と憧憬が絡まりあった複雑な感情が私を息苦しいまでに締めつけてくる。その苦しさから解放されるため、私は自らの股間に直立する欲望を握りしめる。舐めずり、しゃぶり、グチャグチャと噛む。私の唾液でグッジョリと濡れた小布は女の分泌物を蘇生させ、強烈な臭気となって私を恍惚境へ誘う。その日から、深夜のゴミ捨て場を漁る習慣がついてしまった。女たちは無思慮にも紙クズと一緒に自分の肉体の一部と化していった。はき古しのパンティを捨ててしまう。私のような収集家が目をひかせているとも知らずに――。





# 奇ワサロソ



## アヌスと花芽

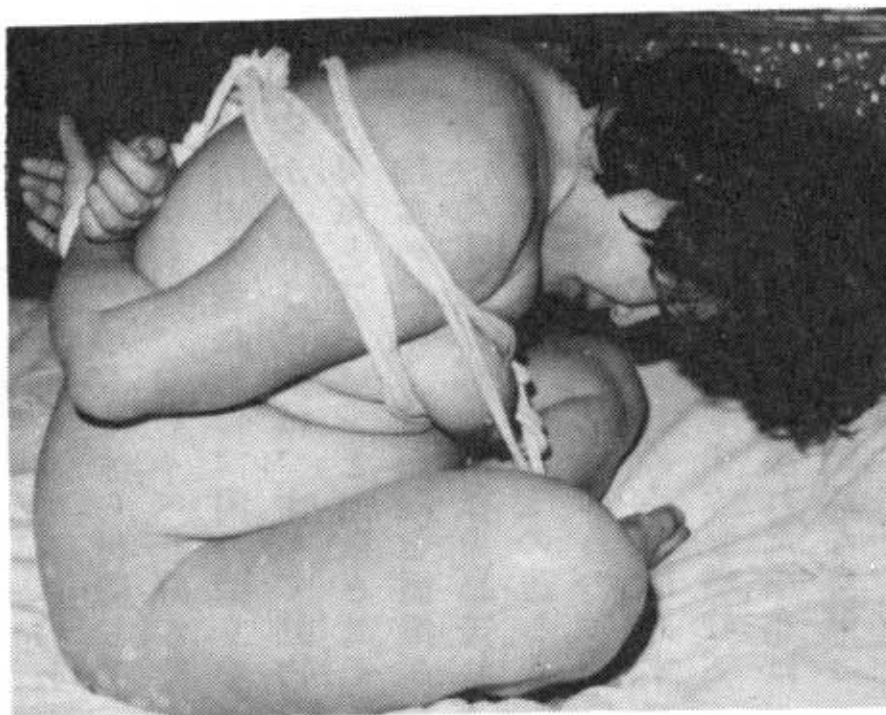
太古堂

太めの妻、三十二歳を相手に主に緊縛プレイを楽しんでいる。既成のSM誌に載る緊縛写真は、どうもフィクションじみて現実味に欠けるようだ。



私の場合、あまり難しいことは考えずに、縛りたいように縛っていく。想が湧くたびに重ね縛りしていくので、当然、無駄な縄も出てくるが、それはそれでいいように思う。太めの妻の嬉しいことは、縄が肉へ食いこんで、いかにも縛った感じが出ることだろう。特に、乳房を縛ったり、腹部へ食いこませたりすると、まるで肉屋の店先にぶらさがっている腸詰めのような光景になる。そいつをゴロゴロ転がして、いろんな角度から眺めるのも面目いし、尻をビシヤビシヤと叩いても楽しいものだ。

両手は、やはり後手縛りがよく、頭上へあげたり、前へたらしたりして縛っても、どうも間が抜けた感じがする。最近、アグラ縛りにして前



へ倒し、アヌスを指やパイプでいじめると、隣り近所へ聞えるほどのヨがり声をあげることが発見した。妻の話では、アヌスをいじめられると、自分でも訳のわからぬほどの興奮を感じ、花

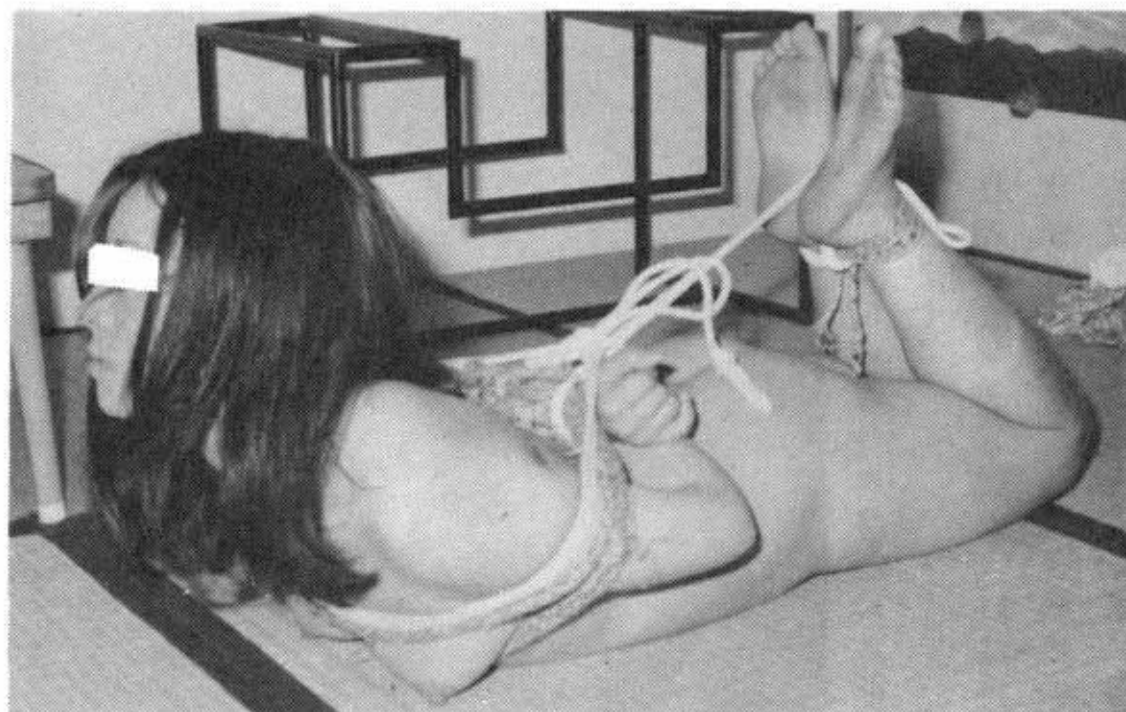
芽までビクビク震えるという。アヌスと花芽を同時に責める工夫をせざるばなるまいと思っている。

## 女子大生を縛る

K・O

僕はSM雑誌を読み始めてから五年になる二十五歳の男です。女にモテるタイプでもないし、経済的にも恵まれているほうではないので、女を縛るなんて夢のまた夢と思っていました。それでも、いつかは女を縛ってみたいと思って、SM写真を参考にしながら縛り方を研究したりしていたのです。相手がいないんだから、こんなことしても仕様がなないと思いながら。

ところが、二カ月ほど前、駅前の盛り場で、冬休みで東京から帰省中という女子大生とふとしたことから親しくなり、いつも定期入れに入れているSM写真（気に入ったのを切り抜いたものです）をふざけ半分に見せたところ、そういうのを一度やられてみたかったというのです。僕はドキッとして、よ



かったら、僕が縛ってあげるといいいわよ、という返事です。彼女を喫茶店に待たせて、大急ぎでロープとカメラを持ってくると、近くのホテルへ入りました。遠慮して、パンティを脱がさずに縛ったら、感じがでないからと自分から脱いでくれました。一生果



命に縛ったのですが、後で写真を見たらかなりゆるんでいました。彼女とは現在、文通してはいますが、僕は運がよかったのだと感謝しています。

## 花ビラ引き

花月星男

昔懐かしい「奇ク」復刊号に接し、青春時代が戻ってきた感があります。

旧「奇ク」が姿を消して以来、私のSM癖もいつのまにか消えたかのように思えたのですが、生活に少し余裕があると、またぞろ、昔の情熱がくすぐりだしたようです。SMに対する考え方はいろいろあると思いますが、私に



とってのSMとは、「羞恥責め」に尽きるようです。性体験もまだ浅く、全裸を見られることにすら顔を赤くしてしまうような若い女を縛りあげて、局部の晒し責め、あるいは、ちよつとさわるだけでキュッと固くなってしまう敏感な乳首をクリップで挟むなどのプレイはウサ晴しとしてはうってつけです。

私が現在、飼育している女は、一年前に破瓜してやり、男の味を覚えさせると同時にマゾとしての喜びも教えています。体がそう丈夫なほうではないので、ハードなプレイはできませんが、片足吊りでの××シャブリ責め、アヌスのコヨリ責めなどをしてやると、ヒ



イヒイ泣きながらもタラタラと××をたらして飲みます。

私のいう「羞恥責め」には、局部晒しだけでなく、花唇に小さなクリップを挟んでいじめる「花ビラいじめ」や、そのクリップに丈夫な糸（タコ糸など）をつないで引っ張る「花ビラ引き」なども入っています。クリトリス性感がまだ未発達なので綿棒を使って「××突き」というのをやりますが、これはなか

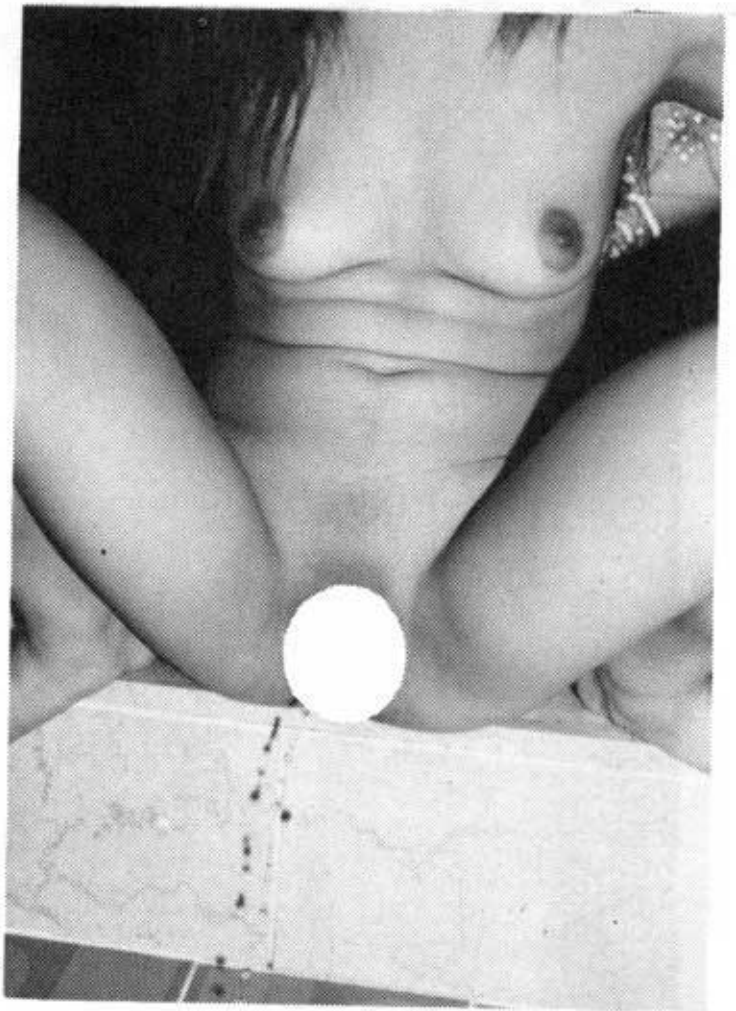


なか効果があります。今回は、読者の皆さまによく観賞してもらうため、特別オープンさせてみました。

## ビニ本を真似て

何出毛夜郎

最近のビニ本は、オシッコとウンコのオンパレードの観がある。大のほうはなにやらポンポン匂ってくるよううへキエキするが、放尿のほうは、その



られた部分を鏡に写して眺めたり、果ては、私に鏡を持たせて自分の放尿シーンを観察したりしたのである。

今まで気づかなかったが、妻には露出癖があるらしく、私の放尿シーンを見てくれる男性はいないかしら、などいいだして、私の妄想をかきたてるのだ。

## 新妻縛り

### ビギナー

新婚三カ月の夫

婦です。私は独身

時代からSM雑誌

を読み耽けるほど

のマニアですが、

プレイを実行した

のは妻が最初です。

何事も隠しごと

をしない、という



のが、結婚するときの約束でしたが、SMの趣味だけはどうしてもいいだせず、いずれ打明けるつもりでした。

ある晩、新しく買ってきたSM誌を夢中で読んでいるところを見つかってしまい、なんでそんなモノに興味があるの、と詰問されましたが、私も覚悟を決めていろいろ話しているうちに、妻も、あなたがそうしたいなら、と許してくれたのです。

せっかく妻が許してくれたものの、正直いって私にはプレイの経験もありませんし、縛り方もよく知らなかったのです。マゴマゴする私に、妻もつい笑いだして、この縛り方はこうするんじゃない、などと協力してくれ、私をホッとさせました。同封した写真は、

ミチのマニアならずとも、興味が持てる。男のようなツツがないのに放出できるというのも不思議だが、よく観察してみると、出すたびに方角が変わってしまうのもオカシイ。これは、ビニ本に刺激されて、妻の放尿を観察した結果だが、私には飲尿癖がないので、ただ感心して眺めるだけである。

ただ、眺めるのに茂みがあつては邪魔（妻の恥毛は濃くて長い）なので全部剃り落してしまったのだが、これが期せずして「剃毛責め」になり、妻はひどく興奮した。女も三〇を過ぎるとズウズウしくなるのか、ツルツルに剃



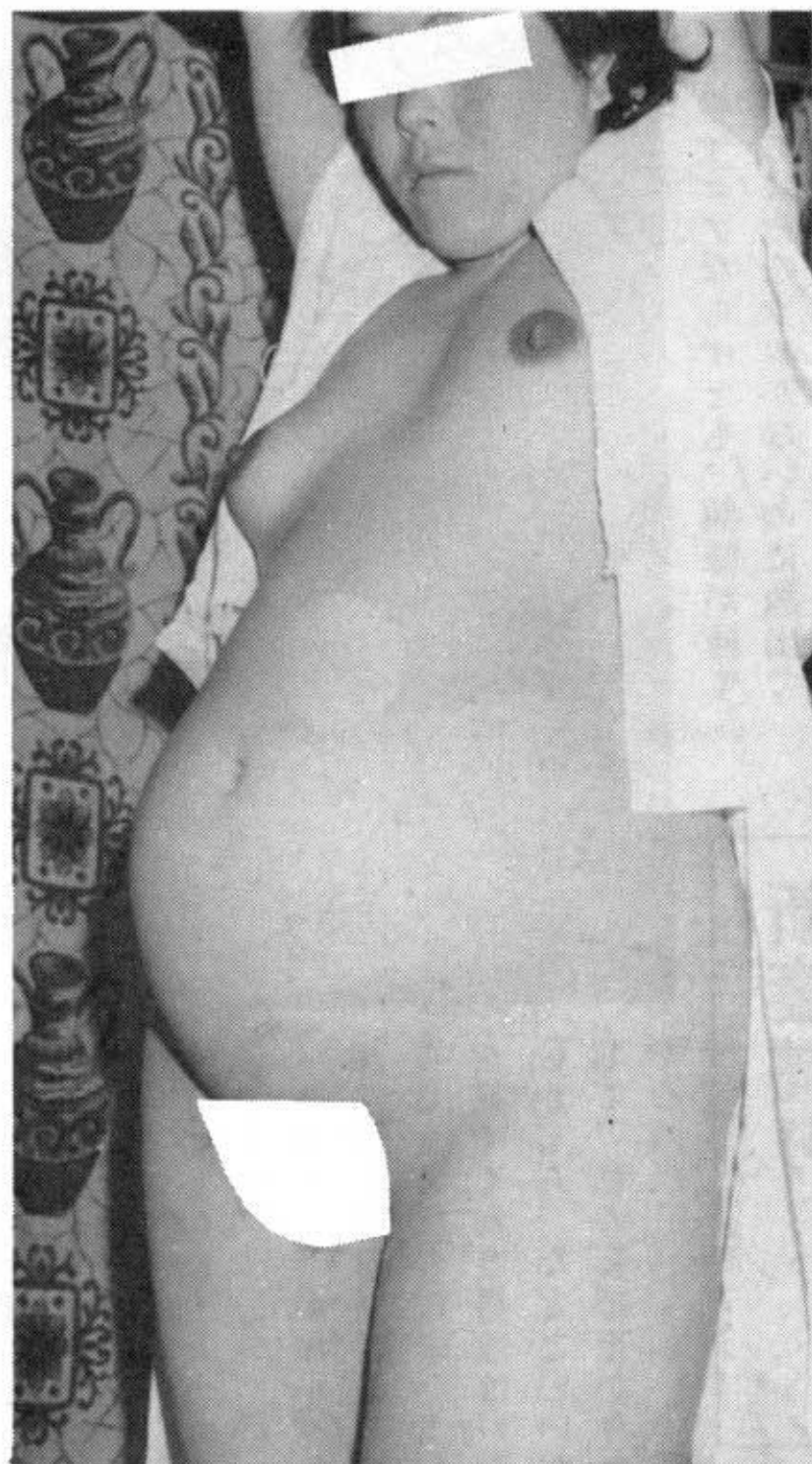
先月、温泉へ行った時に家族風呂で撮ったものです。これもSM写真を参考にしました。

## 妊婦の魅力

原見 良

私は妊婦、妊娠腹にも興味があるので、貴誌で妊婦ハントの投稿を発見したときは、ほんとうに嬉しく思いました。フィクションの妊婦小説なら飽き

飽きしていませんが、前田八郎氏の「膨満の快楽」は妊婦マニアならではの実体験がにじみ出ていて何度読み返しては、氏と人妻美子



との交情に胸を躍らせています。今回投稿した写真は、妻の妊娠腹と出産後の緊縛プレイですが、妊娠腹でない妻はどうも魅力に乏しいようです。今後、も妊娠モノをどしどし載せてください。

## SM夫婦の夢

筑波山造

「奇ク」復刊おめでとうございます。遅ればせながら写真を投稿させていたできました。私たち夫婦は本当の意味でのSMプレイを十年以上も楽しんで



います。といいますのは、私も妻も、SとMを半分づつ持っているらしく、ある時は私がSになってMの妻を責めたりするかと思うと、今度は逆に私がMになって、Sの妻に責めてもらったりしているのです。

以前、あるSM誌で、美濃村晃先生が、SMプレイをする人間にはSとMの両方があるものだ、というようなことを書いておられました。私たち夫婦はそのいい例ではないでしょうか。

M体験のない方には到底わかってもらえないと思いますが、女性（私の場合は妻）に縛られてペニス責めなどをされると、Sの時とは違う快感を味わ

の味は理解できないのではないのでしょうか。

もっとも、妻はSよりもMのほうが、どうやら好きらしく興奮すると、すぐに縛られたがります。

私がいま考えているのは、私たち夫婦にもう一人、男性が女性を交えてSMプレイをすることで、できれば、私たち夫婦を縛ってSプレイ

えますし、女が男に虐められる時の感じもわかるような気がして、プレイをする上での参考になります。一度縛られてみると、緊縛プレイの本当

に専念してもらえたら、と思っています。例えば、こんなのはどうでしょうか。私たち夫婦を「夫婦奴隷」にしてください、ご主人さまに奉仕させるのです。勿論、奴隷として一通りのこともさせますが、セックスのほうのお相手もさせていただくのです。

妻がご主人さま（男性または女性）とセックスしている時、私はご主人さまのアヌスを舐めさせていただくなどして奉仕するのです。私がお相手の時





は妻が舌技で奉仕します。こんな夢を見てゐる私たちです。

## 露出が大好き

大文字一郎

結婚を前提としてつきあっている彼女にSMプレイを覚えさせています。彼女はまだ二〇歳。どんなことにも好奇心を持つ年頃なので、飼育するのはそれほど面倒ではありませんが、縛られるのはあまり好きではないらしく、露出プレイのほうが好きようです。それと、言葉による「羞恥責め」と



いうのか、四文字言葉でからかうと、すごく興奮します。4月号に山路征男さんの「露出プレイ」が載っていましたが、実は私も彼女に同じようなことをやらせた経験があります。ノーパンで外を歩かせたり（特に風の強い日）、街燈に犬のオシッコをさせたり、です。今回は放尿シーンを送ります。

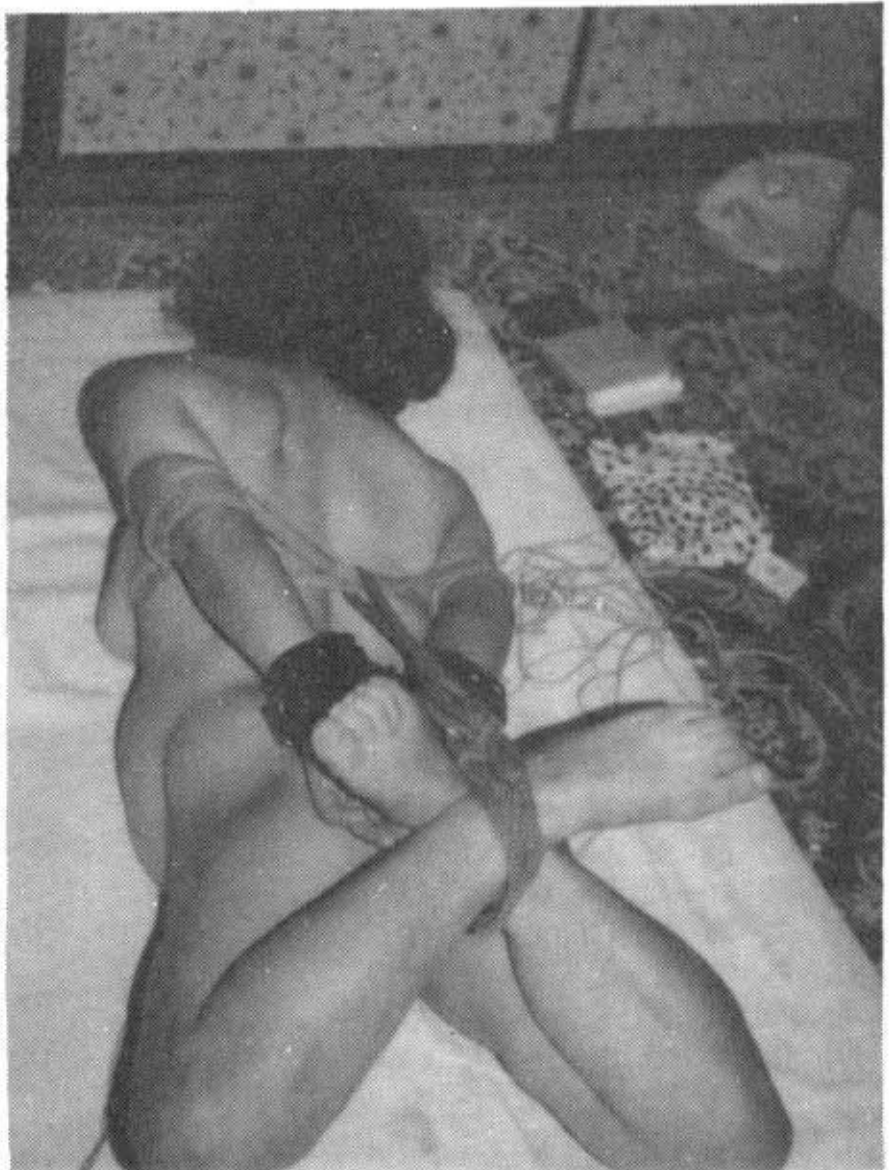
## 復刊を祝す

玄海クラブ（北九州）

「奇ク」誌復刊おめでとうございます。わざわざご挨拶をいただきながら、ご返事が遅れて申し訳ありません。私どもの「玄海クラブ」では現在、5、6組の夫婦がSMプレイを楽しんでいますが、私の妻が昨年暮れに血圧を



げてしまい、今のところ私のみ単独で参加して縛り方の指導などをさせてもらっています。他誌には不安を感じていた私どもですが、貴誌のK編集長とはプレイ仲間でもあり、今後は大いに協力させていただくつもりでお



## S Mモデル募集 年令。容姿不問

あなたののおひまな時に、モデルのアルバイトをしませんか。一時間につき一万円お支払いします。応募の秘密は厳重に守りますので、写真同封のうえ手紙で連絡して下さい。  
連絡先 東京都中央区銀座一の22  
の10、ストークビル501号、風俗  
資料保存会宛。

ります。また、「玄海クラブ」へ入会されたいご夫婦は編集部回送のお手紙をください。必ずご返事します。





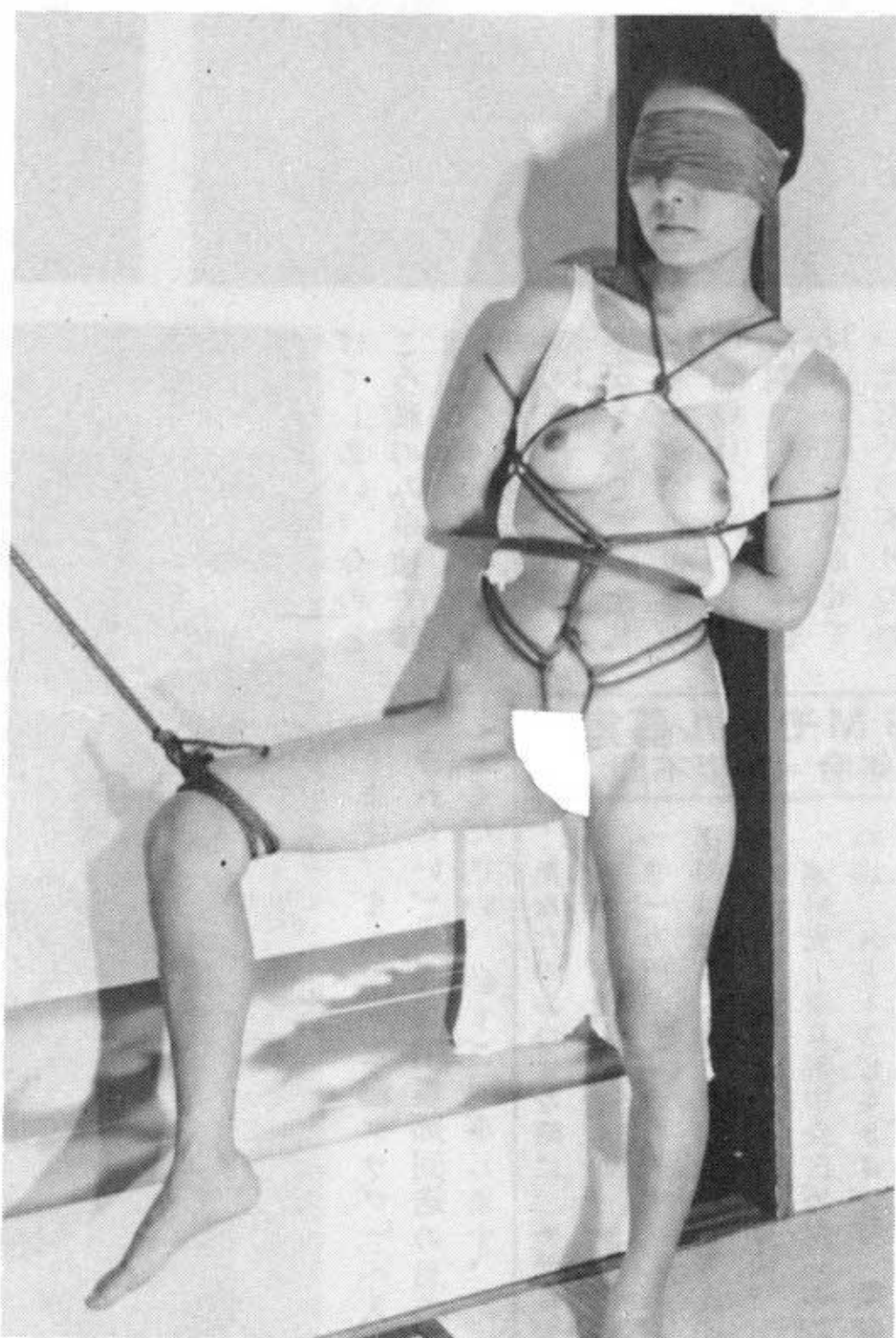
愛好会レポート

# 股間縛りに 羞恥するK夫人

ナリヒラ会（東京）

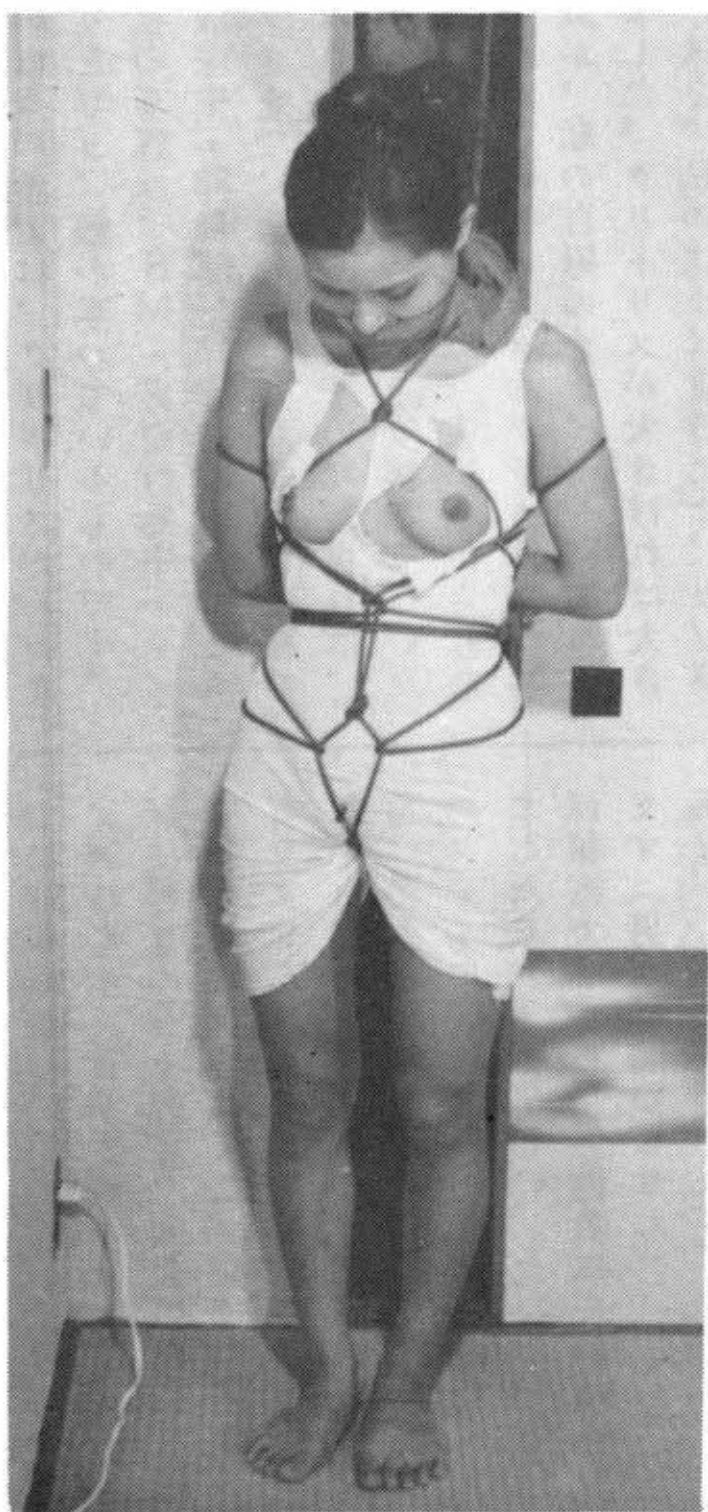
ナリヒラ会では、2月上旬に定例のプレイ会を開き、会員W氏の紹介で、飼育歴半年のK夫人を招いて緊縛プレイを行ないました。当日、集った会員は3名と、カメラマンを仰せつかった私の計4名です。

K夫人は、S性のご主人にS・Mプレイを教えられたそうですが、このとこ



ろ、あまり熱心な調教は受けていない様子でした。K夫人は大変な美人で、4人の男性会員は大張切りで、あれやこれやと緊縛プレイに熱中しました。

特にナイロンを被せたロープで股間縛りをする、大変良い声で泣かれたのが、印象的でした。私たちの会へ入会を希望する方は、連絡方法を明記して編集部回送のお手紙をください（K）



## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

東京都中央区銀座1の22の10

銀座ストークビル・5F

芳友社・編集室



# 倒錯愛のメッセーじ



○私の夫は、女性のクリトリスに異常なほどの興味を持っています。いま夫は日本にはいませんけど、旅立った折に、私にクリトリスの写真と、私の秘写真との交換を命じていきました。ですから、どなたかクリトリスの写真と交換していただけないでしょうか。私のほうの希望は、クリトリスがハッキリと写り、顔が写っているものです。私の写真は、S M・自慰行為中・レズ放尿中・卵飛ばし、それにアナルセックスまで、顔が写っております。私のほうの希望をかなえていただければ、あなたの希望のものと交換させていただいて結構です。私、夫に感化されたのか、この頃は大きなクリトリスの写真が、私の自慰のオナペットに加わりました。クリトリスが大きければ大きいほど、私のほうは貴重です。ただ秘

密のことが心配ですので、それだけは絶対に厳守していただける方のみ、お願いいたします。よろしくお願いいたします。

No. 1 愛知

峯島 佐知子

○私は二十八才の会社員でMです。すでに昨年結婚していますが、妻はS Mに興味がなく有りません。どなたかS Mに興味の有る方と、出会いたいと思います。私自身はまだプレイの経験は有りませんが、できるだけのことはしたいと思います。またS M以外の人でも、色々な経験をしたいので、その他のプレイに興味を持っている方が有りましたら、手紙下さい。ただし、妻には秘密ですから、男性名にてお願いします（男女は問いません）

No. 2

福井

K・K

○三十四才、会社員、一六二センチ、六十九キロ、太りぎみの男性です。結婚して十年。妻との場合、僕はSなので、僕のアナルに快感があるのを知ってから、妻にも打ちあけきれず、苦しんでおります。時には、トイレなどでひそかに異物を使って、楽しんでみるのですが、やはり物足りません。少し年上の御夫婦、年上の女性もしくは男性の方で、僕のアナルを開発して下さる方、ぜひお便り下さい。一度、妻をスワップに誘ってみました。全、全然興味がなくて、「貴方一人で楽しんで下さい」との許可が出ましたので、投稿した次第です。必ず返事はさし上げます。よかったら、写真も同封して下さい。

No. 3

長崎

K

○ぼくは二〇才の学生です。S M雑誌を読みあさるうち、自分のM性に気づきました。女性にふみつけられる。足の指におしゃぶりする。お尻の穴をなめきよめる。おしっこを顔にかけられる。まだ経験はありませんので、未経験の方でもかまいません。そんな気持ち、かなえてくれる女性、年令、容姿問いません。住所、または、TEL明記の上おたより下さい。

No. 4 都内

なめたいよ

○私は二十八才の独身サラリーマンです。まだ恋人がいません。身長一七五センチ、体重六〇キロ、ごく一般的な容姿です。私はサドっ気が旺盛で、女性をいじめてみたくてたまりません。四年程前、今は別れてしまった彼女と、それらしいプレイで楽しんでいました。彼女が結婚すると同時に、私の楽しみも中断してしまったのです。プレイといっても、簡単な縛りとか、羞恥責めが主で、それほど激しいプレイは知りません。初身者の方、またはベテランの方、私にプレイを色々教えて下さい。ご夫婦の助手として使ってもら

っても結構です。現在、研究精神旺盛ですから、きつと役に立つと思います。それから、独身の女性の方で、もし気が合ったら永遠のつれあいとしての付き合いを考えています。月収普通、結婚しても、ぜいたくしなければ次分生活していけると思っています。どうぞよろしく……。

No. 5 千葉

T・H

○私、三十八才の自営業者。小さな食品店を細々と経営しており、外出の間は自由にとれる身です。M女性でプレイを楽しみたいと思っています。人妻、未亡人、OL、学生さんら……、どなたでもかまいません。年令、容姿を問いませんので、気楽な気持ちで、ご一報ください。私はこの道十年ですが、相手の方の経験に合わせて、プレイをするつもりです。肉体的苦痛をともなったプレイをお好みの方には、私の知識を全て放出して、ご希望にそわせます。また、まだ未経験に近い方々には、そちらの条件を全部入れて、いやな事は絶対しません。それから女房は私のこ

んな性癖をもちろん知っていますが、できるなら内緒の御交際をと思っております。勝手ですが、男性名にてお手紙をください。ご夫婦の方でも、もちろん結構です。

No. 6 大阪

Y・O

○現在、妻と別居中の四十四才の中年男性です。中年だが、お腹の出ていない、スマートな体型。身長一六九センチ、体重五十三キロ、少しヤセ過ぎなところもあるが、筋肉質なので、裸になると結構たくましい。妻とは性格の不一致で七年前より別居。子供の為に離婚だけはしていないが、実質的にはいっさい交渉のない、形だけの夫婦である。人妻、未亡人、独身女性、いずれも可だが、お尻の大きい、下半身デブと一般に言われる体型の女性が好みます。乳房は大きい方が良く、お尻が大きければ……。ポテッとした太り方のマゾヒストの女性、年令は問いません。ぜひ小生の相手になってやってください。プレイ内容は、ムチ打ちやろうそく責めなどのような、少々残酷なもの、あまり好まず、もっぱら羞



恥心をくすぐるようなプレイが……。場所は、現在住んでいる小生のアパートではいかがですか。ホテルよりも落ちつき、時間の制限ありません。あととらブルのないよう、くれぐれもよろしく！

No. 7 福井

キザマン

○私は二十六才の男性です。大変エネマに関して興味を持っています。こういう投稿は今回が始めてで、市内に住んでおられる女性、手紙下さい。興味深いエネマについて、恥ずかしいと思わず話し合いのできることを望んでいます。女性の方は便秘症の人が多くので、浣腸の機会も多いのではないですか？ プレイまでいきたいところですが、そんな方のお話だけでも嬉しく思います。そして、いつかは逢いたいものです。

No. 8 山口

エネマ・マニア

○私は現在三十九才、社会的地位もあります。いずれのことでも、お互いの信用が大切で、相手に不幸を与え、身体に危険を感じさせるような一切の行

為は、他の不幸をまねくとともに、自分自身の身を破滅に導くものだと思います。人間本来の行為は致し方なしというには、余りにも動物的と考え、あくまで、S、M、Fの本質を充分に理解し合ってこそ、次分なるお互いの心の喜び、身の喜びが得られるものと考えます。しかし、同好の方の世間の目、物の考え方で及ぼす影響は、本当に大切と考えます。そのうえでのS、M、Fについて、お互いの意見が一致いたしますればと思います。私はS九〇パーセント、M少々の者ですが、貴女のいわれる事柄、望みには満足させてあげられる自信があります。人間本来の動物的行動に走ることなく、明日への、あくまで自信の社会への力としてのS、M、Fであれば、よいと思います。

No. 9 神奈川

夢人

○私、S、Mについては全くの未経験でございしますが、やむにやまれず拙文を出す気持ちになりました。私はM性で、今までは、書物や空想の世界で、自分をいやしてきたのでございます。三〇才、独身、身長一七一センチ、体重六

十四キロ、容姿は勝呂誉に似ていると他人にいわれます。東京の某有名私立大学卒業後、現在は某銀行に勤務いたしております。両親は既に亡く、父の遺産も少くはあり、気楽に生活しております。このような私めではございますが、もし女王様の御意にかなひ、快樂の道具として御奉仕する奴隷に御召しいただきますれば、どこへでもお伺いする所存でございます。ムチによる責め、人間便器、舌による奉仕、その他いかなることでも、女王様の御命令に従ひ、末長くお仕えできますよう努力いたします。なにとぞ、お情けを待ちまして、足下に侍ることをお許し下さいませ。

No. 10 都内

願夫

○二十四才ですが、以前から少し異常だと思われる性癖に悩んでいます。私は女装に一番興味をもっていて、最近テレビなどで女装の人をよく見かけますが、中にはビックリするくらいきれいな人がいるので、うらやましくなり

ます。私自身思うのですが、女装趣味は同性愛にも通じるものだと思います。女装趣味の人は、同性愛においては、女役になる方で、従って、私も同性愛に興味があり、女役です。といっても、今のところは、同性愛と同じくらい、異性（女性）にも興味があります。やさ顔で、髪は房々と長く黒く、からだは細っそりとしていて、無毛といってもいいほど体毛の少ない、なめらかな肌を持っています。異性の方はもちろんですが、同性の方のお便りもお待ちしています。ただし、普通の毛深いゴツゴツした男性的な身体には、顔をそむけたくなるのです。時々、美少年に抱かれ、また美少年を抱くという事を空想しますが、現実もそうあってほしいと……。もちろん、同性の方で、女装に興味のある方とも、ぜひ文通したいと思っています。私と同じような性癖を持っている方、どうぞ、よろしくお願い致します。

No. 11

大阪

美々

○二十一才の学生です。今までどんな親しい友人にも話さず隠してきました

が、今回、思い切って投稿させてもらいました。私は今までSだとばかり思ってきましたが、ある中年の男の人を知ってから、自分はMだったのではなにかと思っただけです。いつもSM小説を読んで想像することは、自分が女性を縛り責めている姿です。でも、現実には自分も小説の中の女の人のように、されることを望んでいるのです。自身、SかMが分かっておりません。でも、一度でもプレーをしてみれば、分かると思います。どなたか三〇才ぐらいまでの女性の方で、私の相手になってくださる人がおられたら、お便りください。男性同伴は、お断わりします。

No. 12

愛知

木原

○私は三十五才になる、真面目な公務員です。SMに興味を持ち始めて十数年ですが、実際の経験はたったの数回です。ぜひ、マゾ女性を責めさせてください。たとえば、こんな責め方はいかがでしょう。まず衣服を着けたまま、後手に縛りあげ、私の前で正座させます。そして、奴隷になることを誓

わせ、本格的な全裸の緊縛責めに入ります。高手小手に股間縛りのまま、貴女は私の目の前で部屋を一周させられる。（もちろん、足首も縛ってあります）さらに、柱にはりつけにさせられたり、ベットに強烈に縛られたりしながら、バイブレーター、ソーセージ、ローソクなどで、ありとあらゆるところを、責め抜いてみたいと思います。とにかく、誌上ではあまり大胆に書けません。私が今まで考案した縛りを、すべて行なってみたいと思います。こんな私の責めを受けてみてもよいと思われた貴女、ぜひお手紙ください。

No. 13

都内

道案内人

住所を知られたくない人へ  
文通相手に住所を知られたくない場合は、当社「回送扱い」を利用して下さい。相手へ出す手紙の封筒へは住所を書かずに鉛筆で、「回送」とのみ記入。当社名で回送します。



# 読者ポスト

○貴誌に想う。創刊号御目出難う御座居ます。私は、六十八才になります。二十八年以上毎号楽しく拝読してあります。現在のSMブームは、誌が最初には有ったからこそだと思えます。誌が書店より去った時は、お先まっくらで楽しみがなくなっていました。又、此処に復刊しました事、お喜び申し上げます。誌の内容についてですが、青年から老人迄幅広い読者の為に、種々の記事をのせて下さい。私は赤い腰巻愛好者です。昔よく腰巻記事をお書きになった牧高士さん、どうなされましたでせうか。感動して読んでました。股にナワのくいこんだ日本髪山原清子さんの写真など、今も大事にしています。私も赤井尾越と云うペンネームで、何回か出して頂いた者ですが、現在では街行く人で、和服姿に赤いお腰の方が、めったに見られなくなりました。ビニ本でもSM誌でも、あまり

なくなりました。日本の伝とう和服に腰巻、もっと見直させよう。裾から風が吹くと見える赤いお腰、階段の上り下りの時見える赤いお腰、洗たく竿にほされ、ひらひらなびいてる腰巻など見ると、美しさに立ちどまってしまう。二十五年前、ブラック建の両国国ギ館に相撲を見に行き、便所に入りました。ブラックなゆえ便所もおそまつで、男女両用でした。私の入った便所に小さな穴があり、はからずも隣りに黒い着物を着た、日本髪のお芸者さんが入っていました。黒い着物と赤いお腰をいばいにまくりあげ、白いお尻と白足袋が目にはきつき、それから腰巻のとりこになってしまいました。それから赤い腰巻集めに大変でした。バーの女給やストリップバーに多額のお金を出し、使用済みの腰巻をもらい受けたら、街行く中で、裾から見える赤いお腰の人を見ると、その人が美人で

あろうが無かろうが良かったのです。その方のあとをつけ家をつきとめ、そして、それからが大変です。毎日その家の所に行き状況を知るのです。或る時は、こんな事も有りました。駅の階段で見かけた奥様風の人です。やはり毎日状況知らべに出かけ、その赤いお腰の人は親子三人で、小供は男子で幼稚園に行っている。三〇才位の元水商売風の髪を、いつもアップにした美人です。いつも着物を着ており、お腰はかならず御主人のシュミカ赤い色で右側から見ていると、良く足さばきが見えます。何日かした或る日、その家の所に行くと、その小供が遊んでいました。私はその子にたづねました。お母さんいるときくと、今お使いに行っているのとのヘンチでした。私は僕におこ使いをあげるから、お母さんの洗たく機から、パンツと上が白で下が赤いフロシキのようなのを持ってきてくれとたのみました。じゃ、おじさんいっしょに家に上りなよと云うので、そのうれしさ。いっしょに上り、座敷を通り、風呂場の処に行きました。洗たく機のそばにひとかたまりのよごれもの

がありました。私は、それをかきわけめざす腰巻白一枚と、目にいつもやきついた真つ赤な腰巻一枚、それに奥様の小さなパンティ二枚をみつけました。子供にお金を渡し、聞かれても知らないよと云いなさい、と言って、むねときめかせ、その宝を家に持ち帰り、その腰巻を大きくひろげたり、頭からかぶったり、腰に巻いたりして、毎日楽しんだものでした。これは集めた腰巻の一例ですが、そうして苦労して集めた腰巻が二〇枚位あり、その何点かをへやの中いっぱいロープにつり、又腰に巻いて書いてます。私のような方大ぜいいると思います。ぜひ、これからも赤い腰巻の記事、写真など、のせて下さい（横浜・赤井）

○奇譚クラブ復刊おめでとうございます。私共若いマニアにとって、貴誌はまさに幻の銘著でありました。諸先輩方の設かれた伝統を、今、このような形で拝受出来ますことを、喜びと感じております。貴誌の存在は、SM奇譚S・A・N・A・N・D・M・O・O・N、その他多くの本により知ってはおりましたが、

復刊されたと聞き、さっそく買い求めてまいりました。偽物、まやかしの多い中、貴誌だけは永年の伝統を大切に今後も本物だけを世に送って下さい。なに分にも、経験不足の身ゆえ、よろしく御指導下さい。又、先輩諸氏との交流の機会がありましたら、御連絡ください。貴誌の御発展をお祈りいたします（東大泉・柳田）

○奇譚クラブ―復刊を心から欲しく思う。初期の奇クが発売された当時は、終戦後、間もない頃で、私もまだ若かった。いま人生の黄昏の中で、過ぎし日の奇クに対した情熱を偲び、幾星霜時の流れの早さ。歲月人を待たず、の古人の言葉に感銘する。私自身も、最近S・Mに燃やす情熱が、すっかり衰えたと自覚するが、それでもまだ、渴れ果てた訳ではなく、老いたりとも雖もかき立てれば、埋火は蒼白く炎を燃やす。巻頭の序文にあるが、最近のS・M誌氾濫にはいささか難易、眉をひそめていたけれど、奇クの復刊により、私はまた秘かなる喜びを期待する。昨日計らずも書店で貴誌を手にし、燃えつ

きやうとする最後の情念を、再び呼び醒まされた思いである。今後の御繁栄を祈ります（池田市・三輪田）

○本当に関西での奇譚クラブが、突然の休刊より八年になりますがS四十八年五月号。奇譚クラブは全国つづうらの愛読者がおられた由にて、会社社長様という上流の方より、私達サラリーマンのマニヤに致るまで巾広いものでした。この度は編集の方々の努力により、私は三月号を書店にて見とどけ、早速求め頁をくりました次第です。まだものたりぬ初刊のことにて、これからは旧誌に勝るとも劣らない、新しい発想のあるアイデアと、まじめにこの道の方々との交流が求められる、すばらしいS・M誌の第一話たるものにしていただきたい。それにはマニヤの方々と大切に、これからのプロ的な小説とフォトは、余り受けないものと考えております。私達の願望とのぞむものは、マニヤの方々の告白とプレイ手記あわせてフォトの投稿をのぞんでおります。女性の方々がすんなりと求められる、品のよい表紙でありたいもので



す。なつかしい吉田様、辻村様の全盛時代の頃を思い浮かべつつ、私も辻村様とご面接のお電話をさせて頂き、お伺いをする時期に、ご病気のことを知らされました中止。吉田様にもお見舞いのおしるしを申し上げて、後も病気が大変にてそのまま今日に至っております。はからずも三月号にて、御永眠なされましたこと、心より哀悼の徴意を表するものです。本当にすばらしいモデルさんとのプレイをなされて、本人もさぞやご満足で、この世に心おきなく……。せつかくの新しい奇譚クラブの発刊を、マニマの一員として深心よりお喜び申し上げます。又、私とした者が、増々元気で節生を守り、SMの馬鹿者がここにも一人、日夜その構想とプレイへのいざないをINGしております。新しいユニークでファンタジックなこの道の極め付きのものを発表そして、沢山のマニヤが集まった、投稿の新奇譚クラブでありますように……。それには、再度くりかえして、マニヤの交流がそのイニシヤチブを握るものと、体験上、切にお願い申し上げます。もっと信頼して、心を許せるご夫婦の

方々との交流プレイを……。人妻独身の女性への参加などは、すばらしいものと……。そこで一日も早く、吉田様辻村様のようなベテラン仕掛人、仕置人の方が、本誌のリーダーとして、誌をにぎわして頂きたいものと思いつつペンを置かせていただきます。なつかしい旧奇譚のご夫婦様、私のつたない文章がお目にとどまりましたら、ご一報心よりお待ちしております。 (関西旧奇譚のマニヤより)

○拝啓、奇譚クラブの御復刊、心よりお祝いたします。インチキSM誌が氾濫している中で、辻村先生が活躍した「奇ク」が、再び発刊されたことは我々、かつての愛読者にとっては、喜びにたえません。辻村先生の御病気の回復を願って止みません。私は以前にも「奇クサロン」を通じて、二、三人の女性とのプレイを楽しませてもらいました。この復刊号でも、このような(奇クサロンのような)交際場を設けていただけましたことに、感激しております。奇クが今後も、このような同好の志の発展の場として、指導していただけるよう、お願い申し上げます。

(埼玉・宮崎)

○前略、復刊第二号、本日拝見、感想としては、氾濫するSM誌の中にあつて、一味ちがうと思うのだが、創刊号を見ての、期待が飛躍しすぎた反動でいささか興味がうすらいだ。他誌に比べて本格派のSM誌である、と一応の評価は惜しまないが、瞠目するほどの新鮮さはない。同人誌的な編集傾向は旧奇クと大同小異である。昔の奇クで夜野探郎と名乗るお調子マニアが、毎号、実につまらぬ雑文を投稿していてその内容の馬鹿馬鹿しさ加減に、すっかり参って、奇クから離れた想い出がある。然し、歳月を経て、私も人生の黄昏をしみじみ感じる昨今、年の故もあって、他人に対する寛容さが生じると、夜野探郎氏なる御仁のスタンドプレー的な雑文も、愛嬌があつて面白いものだったかな? と考えたりする。けれど、復刊号に掲載される手記の中に、あの手の独善的なエッセーがないのは、何よりである。本号で、縄妾志願に驚倒され、世にこう云う女性も存在するものか、と感嘆され、大いに興味を抱かれた読者の投書が見られるが

私もこのことには、前号で、大いに興味を持った。それが真事なら、良識と信頼による交際の絆をつなぎたいと、真面目に考えた。私の観念では、SM誌に発表されるこの種の投書には、信頼すべき何もない、と云った先入観がある。本号で、神奈川Y生氏が注意されているが、通信欄を悪用した営業的な投書による被害もないではない。勿論、そうでないマニアの熱望的な、真面目なものも当然あるけれど、それとても、かなり身勝手な内容が、覗かれるものだ。狂信的であり、ひとりよがりの常識外れが、マニアのマニアたるゆえんである。と云えなくもないのだが、だからと同好者であると云った一事だけで、全幅の信頼を寄せることは悔いを招くことになりかねない。要するに、通信欄で安易に、プレーメイトが得られるとする願望そのものが、根本的な思いちがいであることに気づくべきである。私の体験からしても、誌上を通じての交際は、余程の幸に恵まれない限り、意気投合の相手は、そうさらに、めぐり逢えないものだ。下手に、住所、電話番号を明記すると、

常識では考えられぬ奇怪な電話が入ったりする。逆に、こちらが相手を信頼して、礼を踏んだ良心的な手紙を書いても、音沙汰なし、と云うのがある。誌上で見て判断する限り、一応の返信があるものと、よくよく思索した揚句が、これである。私は過去において、その種の手紙を見た場合、それがどんな非常識な内容であつても、住所、氏名が明記されていると、必ず一度は返信を書いた。それが、未知とは云え、マニアの礼だと思ふからである。常識ある人との文通は、その後、幾年も賀状と共につづいている。貴誌が、縄姦志願の女性を、どのように探索し、編集されているか知らぬが、これは他誌に見られぬ企画である。純粹のマニアは、ストリートにこれらの縄姦美女群に、熱い想いの手紙を書くことだろう。私も年甲斐もなく、熱い手紙を書いた一人である。そして失望を味わったものだ。勿論、編集部には責任があることではないが、私の観念では、諾否は問題でなく、筋を通した手紙には、当然いづれにせよ、それなりの返信を期待したのだが……。それが空しいもの

だったと知ると、矢張りこの種の投書を少しでも信じた自分の愚を、壁に向かつて笑いたくなる。ただ、私が理解しがたいのは、誌上にそれなりの意志を公表する以上、それに応じた相手に一応の返信を書くのが、編集者と多くの読者に対する義務ではなかろうか、と思うことである。それはそれとして貴誌がこれからSM誌の本格派を自負し、真のマニアのための味ある真価を発揮され、ますます、隆盛であることを祈ります(M)

○私、SMに大変興味があり、奇クが復刊されたこと、大変嬉しく思っている者です。それで大変恐縮なのですが今後の奇クに、私の好む鼻責めの記事なり写真なりを載せて頂けたらと、こうしてペンを取りました。私は女性の方の、少々丸味を帯びた恰好の鼻の穴をみつめていると、無性に心がときめき、神秘的にも感じて、心ゆくばかり責め、また責められてみたいと思うのです。私の考えている責めの一例は、まず裸になって頂いて、手、足、顔をピクツとも動かないように縛りつけ、



鼻と鼻毛をきれいに剃ります。鼻の奥は毛を抜きます。抜くと痛いので、声のでたり涙がでてくると思います。だから、巾広いビニールテープで、口を確実に塞ぎます。つぎに柔かい毛筆二本で、両方の鼻の穴をくすぐっていいくと、クシャミとともに鼻汁と涙がでて、可愛い小鼻がピクピクと動きます。そこで、洗濯ばさみで鼻をつまみ、くすぐることを繰り返します。と、鼻汁をズルズルすすりあげたり、赤くなった鼻と流れた鼻汁とでクシャクシャになって、可愛い顔が台なしになります。つぎは鼻をきつく吊り上げ、鼻の頭を縛ります。小鼻も動かないくなり、頭を少し下げると、鼻の穴は真上を向いて、穴の奥の粘膜まで丸見えで、情ない顔になります。そこで両方の鼻の穴に息ができる程度の大きさの、ビニールチューブをさし込み、脱脂綿をつめ、ロウソクのロウを脱脂綿の上にたらし、鼻の穴を完全にふさぎます。とにかく顔が動かせないので思うままに責められ、何か言おうとしてもただフンフンという切ない声が、ビニールチューブを通して洩れてくる

だけです。そこで水平面になっている鼻の両方の穴の上にロウソクを立てて身体の鋭敏な個所をバイブレーターでなでていく。ロウソクが短かくなって熱気が鼻に伝わり、バイブレーターの快音とともに、何ともいえぬ、ため息が洩れるでしょう。最後に鼻の縛りをするとき、まだ元に戻らない上向きの赤い鼻をやさしく愛撫し、鼻汁をきれいに拭いてやって、鼻の穴まできれいにカラー化粧をほどこします。そのような責めをあれやこれや考えるだけでも毎日楽しく、ましてやプレイができる女性がいたら、本当に幸せです。せつに鼻に関する記事や写真を、よろしくお願い致します（大阪・鼻輪）

○奇ク愛読のM女性に告ぐ！ 貴女は白いビキニパンティとストッキングだけを体につけて、広い部屋の中央に敷かれたマットレスの上に、人の字型に足を開いて仰臥するのです。私はパンティの横を引っぱり広げて、貴女の要所所を鑑賞します。次にゴムをひっぱるようにして、お腹のところから、私の羞恥責めの指先が、貴女の羞恥の

ポイントを襲うのです。むっちりとした太腿をふるわす貴女にかまわず、何時間も私の指先は貴女をまさぐるのです。私の指先が白くふやけるまで、それは続けられ、貴女の恍惚の姿は、セルフタイマーで撮影されるのです。パンティを膝小僧までずらせて、洗面器の中へおしっこはいかがですか。恥ずかしさに悶える貴女の局部に顔を近づけて、最後の一滴までしたたり落ちるのを見せてもらいます。次にアヌス責めに入ります。四つん這いになってもらい、パンティをお尻の下まで引き剥がします。ベビーかんちよう一個だけ施しておいて、ゆっくりとこよりの先で、責めてあげます。やがて、堪まらなくなった貴女の白い豊かな双丘が波を打ち、美しい固型が産み落とされるのです。アヌスの筋肉がほぐれ、それからのアヌスへの愛撫に、貴女の敏感になった性感は、より多くの刺激を受けとめられるでしょう。以上が、私の夢です。私と同じ夢の貴女と、いつか、どこかでの逢瀬を夢みて……（愛知・サジオ）

※この欄への投稿をお待ちしています

# 投稿画廊



ルードヴィッヒ・蘭(兵庫)



もとがみ・ひろし(三重)



## 投稿規定

### 〔体験・告白・日記など〕

S M・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニメル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ポラロイド）のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

### 〔創作・小説など〕

S M小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はS M、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

### 〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

### 〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

### 宛先

〒104 東京都中央区銀座1の22の10

ストークビル501号

風俗資料保存会編集室

# 「読者通信欄」への投稿

※郵便料金に注意して下さい

## 宛先

〒104 東京都中央区銀座1の22の10  
ストークビル501号  
風俗資料保存会編集室

- 1・400字以内で通信文を書く。
- 2・通信文の内容は“交際”にこだわらず、本誌の感想、雑感、プレイ報告など、なんでも結構です。
- 長文の場合は右ページの投稿規定を参照して下さい。
- 3・投稿文の宛先は左記へ。

## 「読者通信欄」掲載者への手紙の出し方

- 1 手紙を書く。
- 2 手紙を封筒①へ入れて封をする。  
住所、氏名を書いてもよい人は書く。
- 3 No、ニックネームを記入した回送シールと60円切手3枚をクリップでとめ、  
封筒①と一緒に少し大きめの封筒②へ入れて封をする。  
封筒②のウラには正確な住所、氏名を記入して下さい。
- 4 封筒②の宛先は左記へ。  
※当事者間で生じたトラブルに対しては、当会は責任を負いかねます。

No. \_\_\_\_\_  
様  
回送シール  
S.57.4.30まで有効

No. \_\_\_\_\_  
様  
回送シール  
S.57.4.30まで有効

No. \_\_\_\_\_  
様  
回送シール  
S.57.4.30まで有効



# 編集室ノート

○「奇ク」の復刊により、旧「奇ク」誌に寄稿されていた方々から、お祝いや励ましのお手紙、協力のお申し出を受けた。お名前を聞くだに懐かしい方々ばかりで、新「奇ク」への期待をこもこも述べられ、有難く拝聴、拝

見した次第である。過日、十数年ぶりに四馬孝氏と再会。いつに変わらぬダンディな氏と数時間談笑。さっそく次号からの寄稿をお願いした。「奇ク」のシンボルともいえた氏のイラストを再び読者にご覧にいられる日も間近い。隆盛を誇っているようでも、その内容は貧しいのが昨今のSM雑誌界である。その一角を切り崩して、本誌がSM本来の原点に

立つリーダー誌になれるよう努力していきたい。(K編集長)○春です。春になると思いだすのは故郷に残してきたあのコのことです。SM写真を見せたら、ヒヤーツと逃げだした、そう、あのコのことです、アーア(R)○春です、サクラもチラホラ咲く頃ですね。ワタシの、十九の春はとうに過ぎたけど、姥ザクラを咲かすにはまだちょっと、ね(M子)

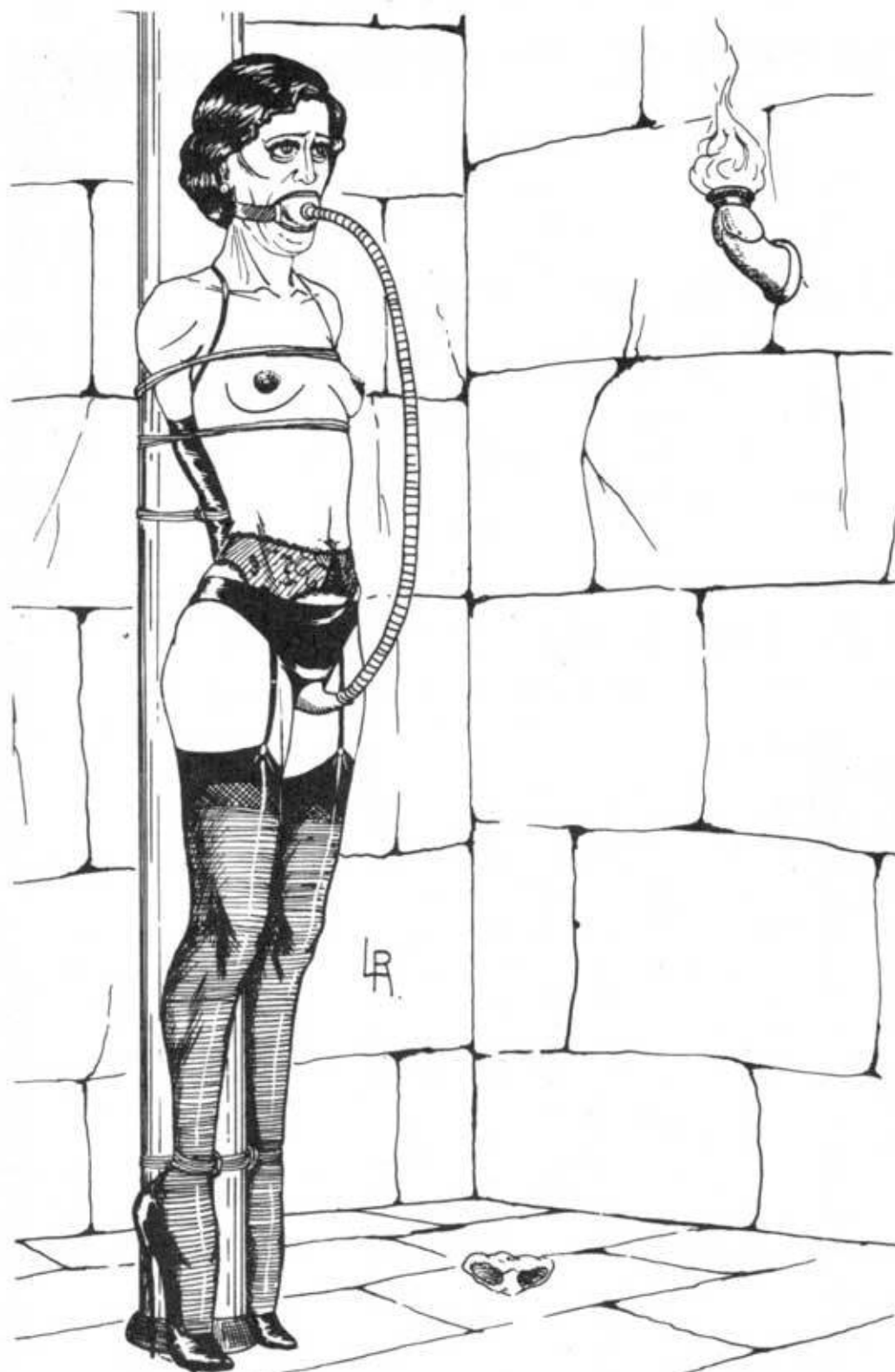
※本誌の入手困難の方は最寄りの書店へご予約されるか、直接本社へご注文ください。※当社へのご連絡は文書にてお願いします。直接訪問や電話連絡はご遠慮ください。

〔宛先〕

〒104 東京都中央区銀座1の22の10

銀座ストークビル・501

芳友社・風俗資料保存会編集部



ルードヴィッヒ・蘭(兵庫)

## SMモデル募集 年令・容姿不問

あなたのおひまな時に、モデルのアルバイトをしませんか。一時間につき一万円お支払いします。応募の秘密は厳重に守りますので、写真同封のうえ手紙で連絡して下さい。  
連絡先 東京都中央区銀座1の22の10、ストークビル501号、風俗資料保存会宛。